

は北妻で総長3.6m、柱間は西から1.5m・1.2m・1.0mとみられる。方向は東側柱列で測るとN-18°-Eである。柱穴は径20~40cmの円形もしくは楕円形で、深さは20cm前後ある。埋土は地山ブロックを少し含む黒褐色シルトである。

【S B2551建物跡】 (図版213・214)

東西2間、南北2間の身舎の東側に縁もしくは廂が1間付く東西棟建物跡である。S B1057建物跡より新しく、S B2552建物跡より古い。柱穴は身舎で7個、縁または廂で3個検出しており、身舎と縁（または廂）でそれぞれ2ヶ所ずつ径9~12cmの柱痕跡を確認した。平面規模は桁行きが南側柱列で総長4.8m、柱間寸法は西から1.9m・2.0mで、縁（または廂）の出は0.8m、梁行きは東妻で総長3.6m、柱間は北から2.1m・1.5mとみられる。方向は南側柱列で測るとE-27°-Sである。柱穴は身舎、縁（または廂）とも径20~45cmの円形もしくは楕円形で、深さは身舎が30cm、縁（または廂）は10cmである。埋土は地山ブロックを多く含む黒褐色シルトである。

【S B2552建物跡】 (図版213・216)

東西1間、南北2間の建物跡である。S B1057・2551建物跡より新しい。柱穴は6個すべて検出しており、うち3ヶ所で径10~16cmの柱痕跡を確認した。平面規模は東側柱列で総長4.2m、柱間寸法は2.1m等間、南側柱列で3.9mである。方向は東側柱列で測るとN-16°-Eである。柱穴は径25~40cmの円形もしくは楕円形で、深さは10~20cmある。埋土は地山ブロックを多く含む黒褐色シルトである。

【S B2553建物跡】 (図版213・216)

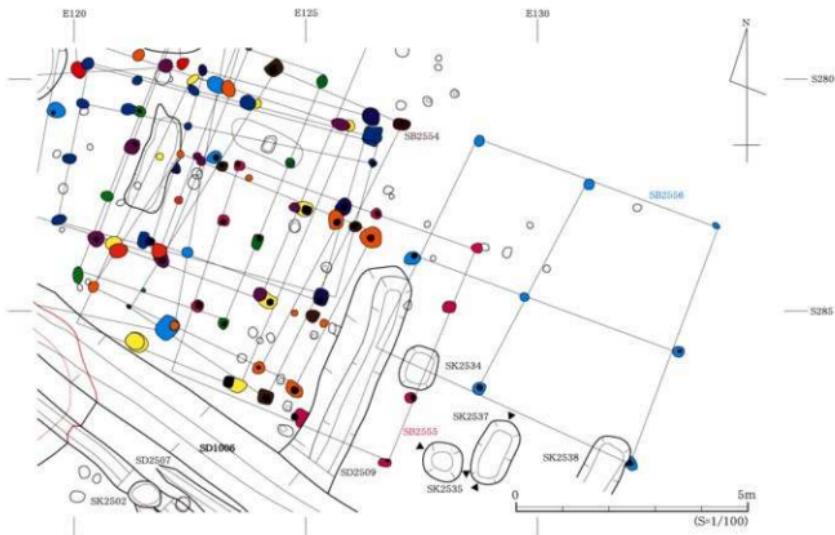
東西2間、南北3間の南北棟建物跡である。S B1054・1058建物跡より古い。柱穴は9個検出しており、うち3ヶ所で径10~20cmの柱痕跡、1ヶ所で柱抜取穴を確認した。平面規模は桁行きが東側柱列で総長6.2m、柱間寸法は北から2.1m・2.1m・2.0m、梁行きは北妻で総長3.6m、柱間は西から1.5m・2.1mとみられる。方向は東側柱列で測るとN-24°-Eである。柱穴は径20~30cmの円形もしくは楕円形で、深さは20~40cmある。埋土は地山ブロックを多く含む黒褐色シルトである。

【S B2554建物跡】 (図版215)

東西1間、南北3間の南北棟建物跡である。柱穴は7個検出しており、うち5ヶ所で径10~20cmの柱痕跡を確認した。平面規模は桁行きが東側柱列で総長6.6m、柱間寸法は北から2.5m・2.1m・2.1m、梁行きは北妻で3.0m、南妻で3.6mである。方向は東側柱列で測るとN-26°-Eである。柱穴は径30~40cmの隅丸方形で、深さは15~30cmある。埋土は地山ブロックを少し含む黒褐色シルトである。

【S B2555建物跡】 (図版215)

東西2間、南北3間の東西棟建物跡である。S D2509溝跡より古い。柱穴は9個検出しており、うち7ヶ所で径9~15cmの柱痕跡を確認した。平面規模は桁行きが北側柱列で総長5.4m、柱間は西から3.2m・2.2m、梁行きは東妻で総長5.0m、柱間寸法は北から1.4m・2.1m・1.5mとみられる。方向は北側柱列で測るとE-20°-Sである。柱穴は径20~30cmの円形もしくは楕円形で、深さは20~40cmある。埋土は地山ブロックを少し含む黒褐色シルトである。柱穴埋土や柱痕跡よりかわらけが出



図版215 SB2554～2556建物跡

土している。

【SB2556建物跡】（図版215）

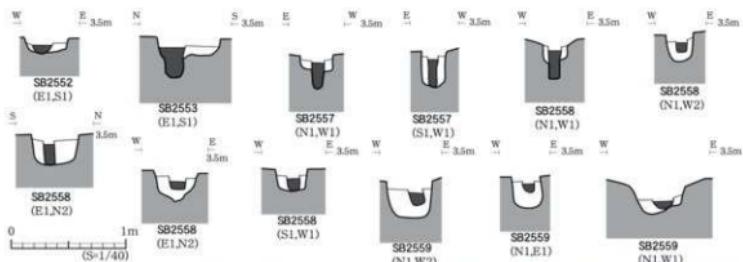
東西2間、南北2間の総柱建物跡である。SK2538土壤、SD2509溝跡より古い。柱穴は8個検出しており、うち5ヶ所で径9~13cmの柱痕跡を確認した。平面規模は東側柱列が総長5.5m、柱間寸法は北から2.8m・2.7m、北側柱列で総長5.4m、柱間は西から2.5m・2.9mとみられる。方向は北側柱列で測るとE-21°-Sである。柱穴は径25~35cmの円形もしくは楕円形で、深さは20~30cmある。埋土は地山ブロックを多く含む黒褐色シルトである。

【SB2557建物跡】（図版213・216）

東西1間、南北1間の建物跡である。SK1008土壤より新しい。柱穴は4個すべて検出しており、うち3ヶ所で径10cm前後の柱痕跡、1ヶ所で柱抜取穴を確認した。平面規模は西側柱列が4.2m、南側柱列で3.7mである。方向は西側柱列で測るとN-28°-Eである。柱穴は一辺が25cmほど隅丸方形で、深さは20~30cmある。埋土は地山ブロックを含む黒褐色シルトである。

【SB2558建物跡】（図版213・216）

東西2間、南北2間の建物跡である。柱穴は8個すべて検出しており、うち5ヶ所で径9~14cmの柱痕跡を確認した。平面規模は北側柱列が総長3.8m、柱間寸法は1.9m等間、西側柱列で総長3.5m、柱間は北から1.6m・1.9mとみられる。方向は北側柱列で測るとE-35°-Sである。柱穴は径20~40cmの円形もしくは楕円形で、深さは20~30cmある。埋土は地山ブロックを少し含む黒褐色シルトで



圖版216 SB2552~2553·2557~2559建物跡柱穴斷面

基番 No.	遺物名	建物間数	構 造	平面構造			建物の方向	柱底跡	柱穴跡	備考	図版 No.		
				桁行	梁行	方向	桁行距離(m)	柱間距離(m)	梁行距離(m)	柱間距離(m)			
BHK SB1054	3	2	南北	6.0	西	2.0+1.8+2.2	3.8	南	1.6+2.2	N-21-E 西 10~12 30~50	楕円形 内底付あり	平-213 斷-214	
BHK SB1055	3	2	南北	5.8	東	1.9+1.8+2.0	3.5	南	1.6+1.9	N-22-E 東 15 30~25	楕円形 棒円形	平-213 断-214	
BHK SB1056	(3)	2+1	東西	6.3	北	1.3+1.2+1.2+3.1(2面計)	3.6	北	0.8+1.2+1.4	E-14-S 北 11~18 20~45	南北に施主たは縁が付く	平-213 断-214	
BHK SB1057	6	1	南北	7.5	東	2.0+1.8+2.0+1.7	3.6	北	3.5	N-9-E 東 9~12 25~50	円形、楕円形	平-213	
BHK SB1058	(3)	3	南北	5.6	東	3.0+2.0+0.9+1.2	3.6	北	1.5+1.2+1.0	N-18-E 東 30~40	南北形	平-213 断-214	
BHK SB1059	2+1	2	東西	4.6	南	1.9+2.0+0.8	3.6	東	2.1+1.5	E-27-S 南 9~12 30~50	南北に施主たは縁が付く	平-213 断-214	
BHK SB1060	2	1	南北	4.1	東	2.1+2.1	3.9	南	3.9	N-16-E 東 10~16 25~40	楕丸形、椭 円形	平-213 断-216	
BHK SB1061	3	2	南北	6.2	東	2.1+2.1+0.8	3.6	北	1.5+2.1	N-24-E 東 8~23 25~30	楕丸形	平-213 断-216	
BHK SB1062	3	1	南北	6.0	東	2.0+2.0+1.1	3.6	南	3.6	N-26-E 東 10~18 30~40	楕丸形	平-213 断-216	
BHK SB1063	2	3	南北	5.4	北	3.2+2.3	3.0	東	1.4+2.1+1.5	E-29-S 東 9~15 20~30	円形	平-213 断-216	
BHK SB1064	2	2	—	5.5	東	2.8+2.7	5.4	北	2.5+2.9	E-21-N 北 9~13 25~35	南北形	内底付あり	平-213
BHK SB1065	1	1	—	4.2	西	4.2	3.7	北	3.7	N-28-E 西 9~11 20~30	楕丸形	平-213 断-216	
BHK SB1066	2	2	—	3.8	北	1.9+1.9	3.6	西	1.6+1.9	E-35-S 北 9~14 20~40	楕丸形、円形	平-213 断-216	
BHK SB1067	3	1	南北	6.3	东	2.0+2.4+1.8	3.9	東	3.9	E-34-E 東 11~17 25~40	楕丸形、円形	平-213 断-216	

* ()内の数値は推定値

* 建物間数の場合は「2+1」であるのは、「身寄2間、棟(または隣)1間」であることを示す。

* 相間寸法は、東西方向のものは南北から、南北方向のものは東西に記した。

* 相間寸法のコック表数字は施主たは縁の相間寸法を示す。

第13表 B区建物跡属性表

ある。柱穴埋土から常滑産片口鉢が出土している。

【S B2559建物跡】(図版213・216)

東西3間、南北1間の東西棟建物跡である。柱穴は7個検出しており、うち3ヶ所で径15cm前後の柱痕跡を確認した。平面規模は桁行きが北側柱列で長総6.2m、柱間は西から2.0m・2.4m・1.8m、梁行きは東妻で3.9mとみられる。方向は北側柱列で測るとE-34° - Sである。柱穴は径25~40cmの円形もしくは楕円形で、深さは20~30cmある。埋土は地山ブロックを少し含む黒褐色シルトである。柱穴埋土から常滑産甕が出土している。

b. 井戸跡

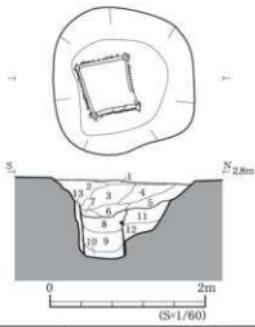
井戸跡は9基確認した。分布をみると、東端に散在するが、S X1397遺物包含層と重複する6基は、いずれもS X1397より新しい。このうち、枠を有するS E2480は個別に、他は一括して概要を述べることとし、個別データは、第14表にまとめた。

(i) 井戸側を有するもの

【S E2480井戸跡】(図版217)

B3区東側で確認した細い心持材や竹材を簾状に組んだ枠をもつ井戸跡である。掘方の平面形は確認面で2.0×1.8mの円形、底面では一辺0.7mの方形で、深さは1.0mある。断面形は東壁に段を持つ逆台形である。枠の内法は一辺60cmで、径2~4cmほどの心持材や竹材を縦方向に簾状に立てて側とし、それを隅柱に組み込んだ横桟で保持している。側材の中には樹皮が残るものも認められた。横桟は上下40cmほどの間隔で2段確認できた。隅柱は径5~7cmの心持材を使用しており、残りの良いものは高さが120cmあり、なかには樹皮を残すものもあった。ほど穴は4×3cmの方形である。横桟は径4cmほどの心持材の両端を加工している。

堆積土は枠抜取穴堆積土(1~7)と枠内堆積土(8~10)、掘方埋土(11~13)に分けられ、枠

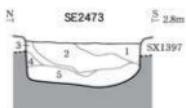


No.	土色・土性	混入物など	備考	No.	土色・土性	混入物など	備考
1	褐色(10YR4/1)粘土シート			8	褐色(10YR4/1)粘土		
2	褐色(10YR3/1)粘土			9	褐色(10YR4/1)粘土(塊状)		井内堆積土
3	褐色(10YR5/1)粘土(塊状)	堆山ブロックを含む		10	青灰褐色(10YR5/1)砂		
4	褐色(10YR3/1)粘土			11	灰褐色(10YR5/2)砂		
5	灰褐色(10YR5/2)			12	灰褐色(10YR5/2)砂		埋土
6	褐色(10YR4/1)粘土			13	褐色(10YR4/1)粘土		
7	褐色(10YR4/1)粘土						



図版217 SE2480井戸跡

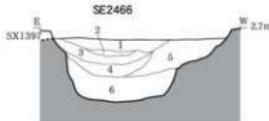
南西隅柱
(縮尺:任意)



No.	土色・土性	混入物など	備考
1	黒褐色(10YR5/1)粘土		
2	黒褐色(10YR4/1)粘土	炭化物を含む	
3	黒褐色(7.5YR3/1)粘土	地山ブロックを含む	
4	黒褐色(10YR3/1)粘土		
5	黒褐色(10YR3/1)粘土		

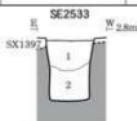


SE246B断面写真（北から）

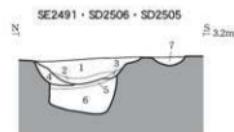


No.	土色・土性	混入物など	備考
1	黒褐色(10YR5/1)粘土		
2	黒褐色(7.5YR5/2)粘土		
3	黒褐色(10YR3/1)粘土		
4	黒褐色(10YR3/1)粘土	3より粘重	
5	黒褐色(10YR4/1)粘土		人為堆積?
6	黒褐色(10YR3/1)粘土		
7	黒褐色(7.5GY4/1)粘土		

No.	土色・土性	混入物など	備考
1	黒褐色(10YR4/1)粘土		
2	黒褐色(10YR4/1)粘土	地山ブロックを多層に含む	
3	黒褐色(10YR4/1)粘土		
4	黒褐色(10YR4/1)粘土		
5	黒褐色(10YR4/1)粘土		



No.	土色・土性	混入物など	備考
1	黒褐色(10YR4/1)粘土		
2	黒褐色(10YR4/1)粘土		
3	黒褐色(10YR4/1)粘土		
4	黒褐色(10YR4/1)粘土		
5	黒褐色(10YR4/1)粘土		



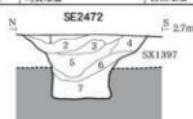
No.	土色・土性	混入物など	備考
1	黒褐色(10YR5/1)粘土		
2	黒褐色(10YR5/1)粘土		
3	黒褐色(10YR5/2)粘土		
4	黒褐色(10YR4/1)粘土	地山ブロックをミナ粒に含む	SD1007堆積土
5	黒褐色(10YR4/1)粘土		SD2506堆積土
6	黒褐色(10YR3/1)粘土		SD2505堆積土
7	黒褐色(10YR4/2)粘土	地山ブロックを多く含む	表面堆積土



SE2491・SD2506・SD2505断面写真（西から）

0 2m
(S=1/60)

No.	土色・土性	混入物など	備考
1	黒褐色(10YR4/1)粘土		
2	黒褐色(10YR4/1)粘土		
3	黒褐色(10YR4/1)粘土	地山ブロックを多く含む	壁面堆土
4	黒褐色(10YR4/2)粘土	均質な層	自然堆積



No.	土色・土性	混入物など	備考
1	黒褐色(10YR4/1)粘土		
2	黒褐色(10YR3/2)粘土		
3	黒褐色(10YR4/3)粘土	地山ブロックを多く含む	
4	黒褐色(10YR4/2)粘土	均質な層	自然堆積



SE2472断面写真（西から）

図版218 B区井戸跡

抜取りののち埋戻されている。遺物は確認面から青磁小壺（図版219-1）が出土している。

（ii）素掘りのもの（図版218）

8基検出した。平面形は確認面で楕円形が3基のほかは、円形もしくは円形とみられるが、下部の平面形はすべて円形である。断面形は箱形が6基、漏斗形が2基認められる。規模は確認面の径が0.6~2.4m、下部径0.5~1.6m、深さは0.5~1.0mあるが、下部径、深さとも0.6~1.0mのものは4基ある。堆積土はいずれも自然堆積で、下部は壁の崩落土を多く含む。

遺物は堆積土から出土している（図版219）。S E2473の上層から鉄滓（5）、堆積土から鎌柄（6）、S E2533の堆積土から瀬戸美濃産陶器煙硝擂（3）、在地産片口鉢（4）・甕、S E2539の堆積土から龍泉窯系鍋運弁文椀（2）や柄杓（7）が出土している。



(単位:cm)

No.	出土遺構・層位	種別	断面	底	周	特	無	量
1	S E2480 遷移層	青磁	小口	縦条壓目	花文(花+運)			05174
2	S E2539 素掘土	青磁	輪底か文向	縦条壓目				05175
3	S E2533 地盤土	陶器	横切削	瀬戸美濃	[17c末~18c初]			05110
4	S E2533 地盤土	陶器	片口鉢	在地				05096
5	S E2473 上層	鉄滓						05111
6	S E2473 素掘土	木製品	鎌柄		長17.30 幅2.8 厚1.3			05112
7	S E2539 素掘土	木製品	柄杓底板		径6.8 厚0.5 内面:黒色漆塗り			05113

図版219 B区井戸跡出土遺物

遺構No.	構造	平面形	断面形	規模	(m)	堆積土の状況	出 土 遺 物	備 考	圖 %
S E2463	素掘	円形?	漏斗形	0.7×0.62上	径0.6 0.8	自然			210 218
S E2466	素掘	楕円形	漏斗形	2.4×1.6	径1.4 0.9	自然?			210 218
S E2468	素掘	円形	漏斗形	1.1×0.9	径0.7 1.0	自然			210 218
S E2472	素掘	楕円形	漏斗形	1.6×1.3	径0.7 0.8	自然			209 218
S E2473	素掘	円形	漏斗形	1.6×1.4	— 0.6	自然?	上層) 鉄製品 (塊) 鎌柄	S X1397-S E2473 素掘層	209 218
S E2480	木組	円形	逆台形	2.0×1.8	— 1.0	自然→人為	青磁小壺	縦条壓目 (側) 青磁小壺	208 217
S E2505	素掘	円形	漏斗形	1.0×0.8	— 0.7	自然		S E2505-S D1397	209 218
S E2533	素掘	円形	漏斗形	0.7×0.6	径0.5 0.8	自然	塊) 瓢戸美濃一陶煙硝擂，在地片 株・甕	S X1397-S E2533 素掘層	210 218
S E2539	素掘	漏斗形	漏斗形	1.4×1.0	径0.7 0.5	自然	青磁碗	S X1397-S E2539 素掘層	210 218

※ 出土遺物のクロロはロクロわくち、手づくねは手づくねわくらけ。在地は宮城県内の在地盤で生産された中世陶器を指す
※ 出土遺物の陶器は近世陶器を指す

第14表 B区井戸跡属性表

c. 墓塚

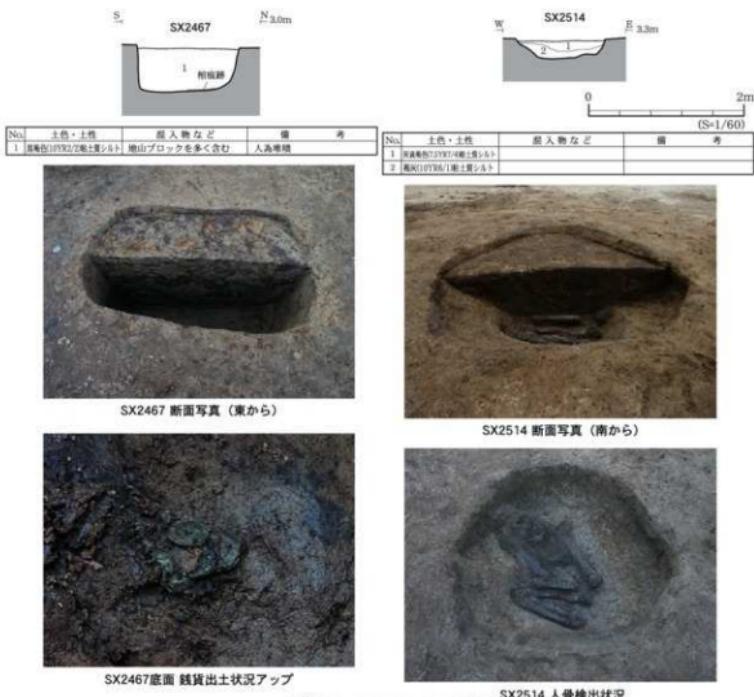
B3区北部で径もしくは一辺が0.6~1.7mで、深さ0.5m以内の比較的浅い土壠を20基確認した。これと似た形態は隣接する市教委4次調査区の北側でも発見されており、総数は50基を超えるとみられる。これらは東西30m、南北20mの比較的狭い範囲に群集すること、SX2467から人の歯や六道銭が出土したこと、SX2514から人骨が出土したことから、墓塚と考えられる。このうち、SX2467・2514は個別の記述を行うこととし、個別のデータは第15表にまとめた（図版221）。

【SX2467墓跡】（図版220）

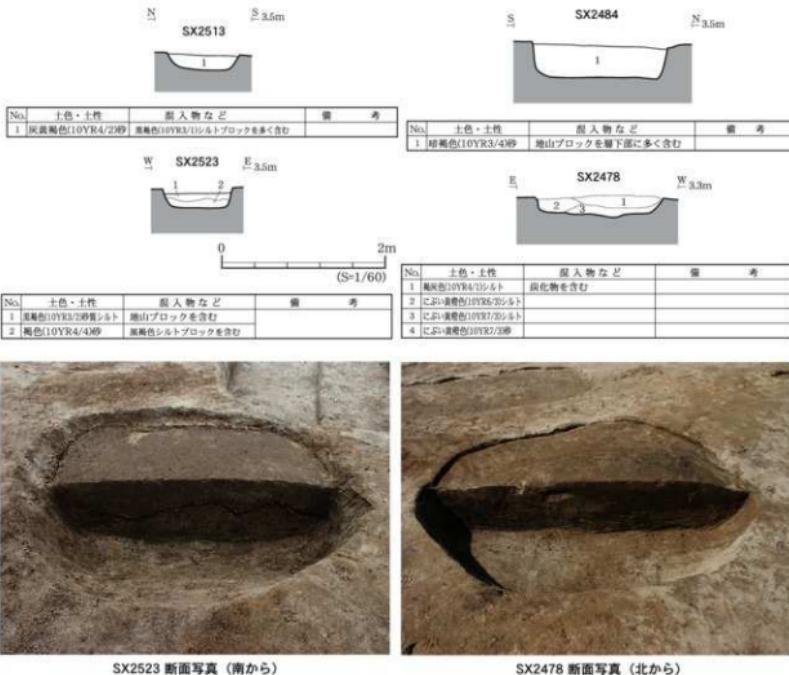
B区北東部で確認した。平面形は1.3×0.9mの隅丸方形である。断面形は箱形で、深さは0.5mある。北壁に近い底面直上に木質がわずかに認められ、その周囲から人の歯と六道銭である錢貨「永楽通寶」（初鑄1408年）が6枚出土した（図版222）。

【SX2514墓跡】（図版220）

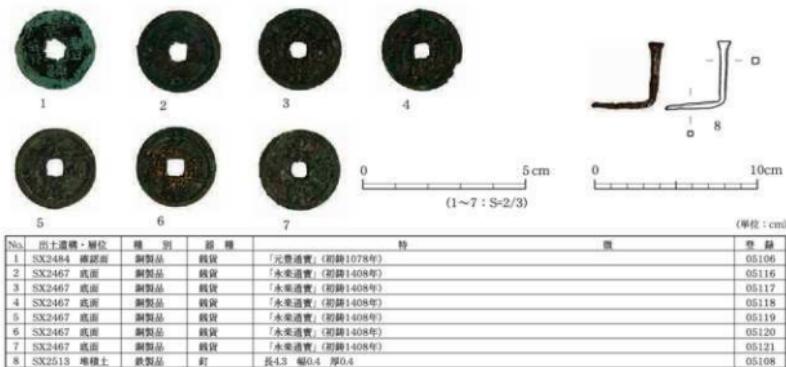
B区北部中央で確認した。平面形は径1.2mの円形である。断面形は皿形で、深さは0.3mある。底面から人骨1体分出土したが保存状況は悪かった。



図版220 SX2467・2514墓跡



図版221 B区墓壙



図版222 B区墓壙出土遺物

遺構No.	平面形	断面形	規模(m)	深さ(m)	分類	堆積土の状況	出 土 遺 物	備 考	図 No.
									平面 断面
S X2467	圓丸方形	筒形	1.3×0.9	0.5		人為	（底）銭「永通寶」(初期1408年) 第V～VI層	銭は6枚出土→六道銭	210 220
S X2477	椭円形	圓形	1.6×0.8	0.3		人為？			210
S X2478	円形	圓形	1.6×1.5	0.3		人為			208 221
S X2484	円形	圓形	約1.7	0.4		人為？	（底）銭「元豐通寶」(初期1078年)		208 221
S X2486	椭円形	圓形	1.2×0.7	0.4					208
S X2512	円形？	圓形	1.2×0.7以上	0.2		人為			210
S X2513	椭円形	圓形	0.9×0.6	0.2		人為	（地）铁钉		210 221
S X2514	円形	圓形	約1.2	0.3		人為	2層人骨		208 220
S X2518	椭円形	圓形	0.7×0.5	0.1		人為			210
S X2519	椭円形	圓形	0.9×0.5	0.1		人為			208
S X2520	円形	圓形	約0.6	0.1		人為			208
S X2521	椭円形	圓形	1.1×0.6	0.1		人為			210
S X2523	円形	圓形	0.9×0.7	0.2		人為			208 221
S X2524	円形？	圓形	1.7×0.4以上	0.1		人為			208
S X2525	円形	圓形	0.6×0.4以上	0.1		人為			208
S X2526	椭円形	圓形	0.9×0.5	0.1		人為			208
S X2529	円形	圓形	約0.6	0.2		人為			208
S X2531	円形	圓形	約0.7	0.1		人為			208
S X2565	圓丸方形	筒形	1.0×0.7	0.2					208

第15表 B区墓壙属性表

d. 土壙

36基確認した。これらは規模や平面形から4類に分けられる。このうちSK1008・2475・2500は個別の記述を行うが、他の土壙の概要は分類にしたがって述べることとし、それぞれのデータは第16表にまとめた。

1類：径もしくは最大径が3.0mを超える大型土壙

【SK1008土壙】（図版223）

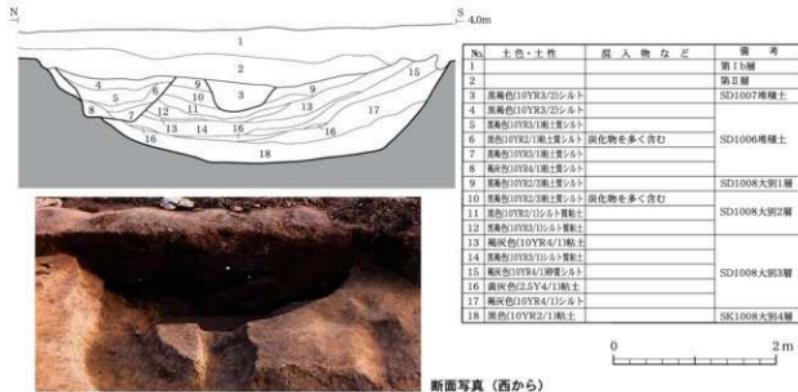
B2区中央部で確認した。S B2557建物跡、SD1006・1007溝跡より古い。1994年度に西半部を調査しており、その成果は『II』で報告した。今回の調査で全体が判明したため、過去の成果を含めて報告する。平面形は径が4.8mの円形で、深さは1.3mある。断面形は逆台形で、底面は中央に向けてゆるやかに傾斜する。堆積土は10層に分けられたが、4層に大別できる。4層が自然堆積土、1～3層は焼土・炭化物・灰・植物遺体を含む廃棄層と自然堆積土である。

遺物は堆積土から出土した（図版225～227）。4層から常滑産甕や白磁碗（5）、3層からロクロかわらけ皿や白磁四耳壺（7）、2層から常滑産甕（11）、在地産甕や不明鉄製品（15・17）、2～3層からはロクロかわらけ小皿（4）、手づくねかわらけ皿（2）・小皿（3）、常滑産片口鉢（10・12・13）・甕（1）、在地産片口鉢（9）、漆椀（14）・片口鉢、白木皿、人物墨書碟（19）、不明鉄製品（16）、切石（18・20）、鉄滓やイシガイ科殻、ウリ科種実、モモ核、1層から在地産片口鉢や白磁四耳壺（6）、堆積土から常滑産甕（8）やかわらけが出土している。常滑産陶器は、4が1b～2型式期、1は2～3型式期、10は3型式期、12・13は5型式期に位置付けられる^(註1)。

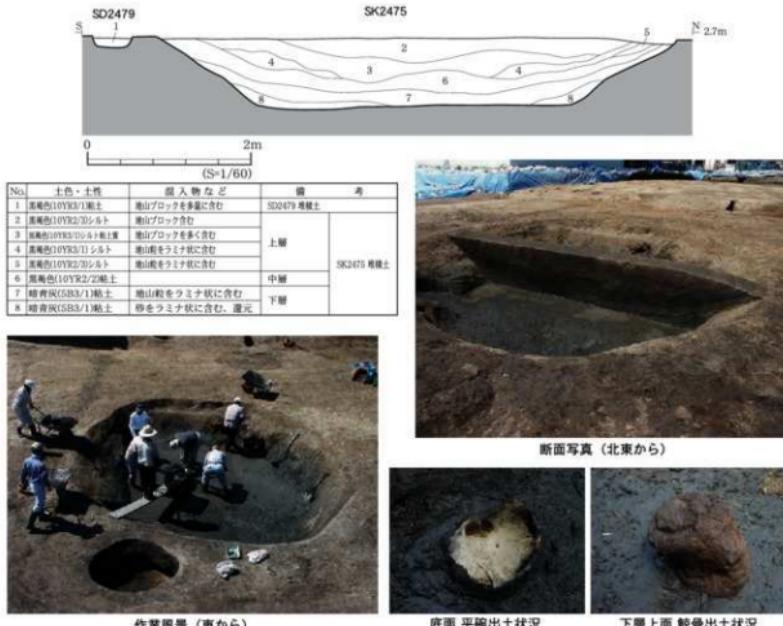
【SK2475土壙】（図版224）

B3区北東部で確認した。SX1397遺物包含層より新しい。平面形は径が6.2mの円形で、深さは0.8mある。断面形は逆台形で、底面はほぼ平坦である。堆積土は8層に分けられたが、3層に大別できる。下・中層が自然堆積土、上層が人為堆積土である。

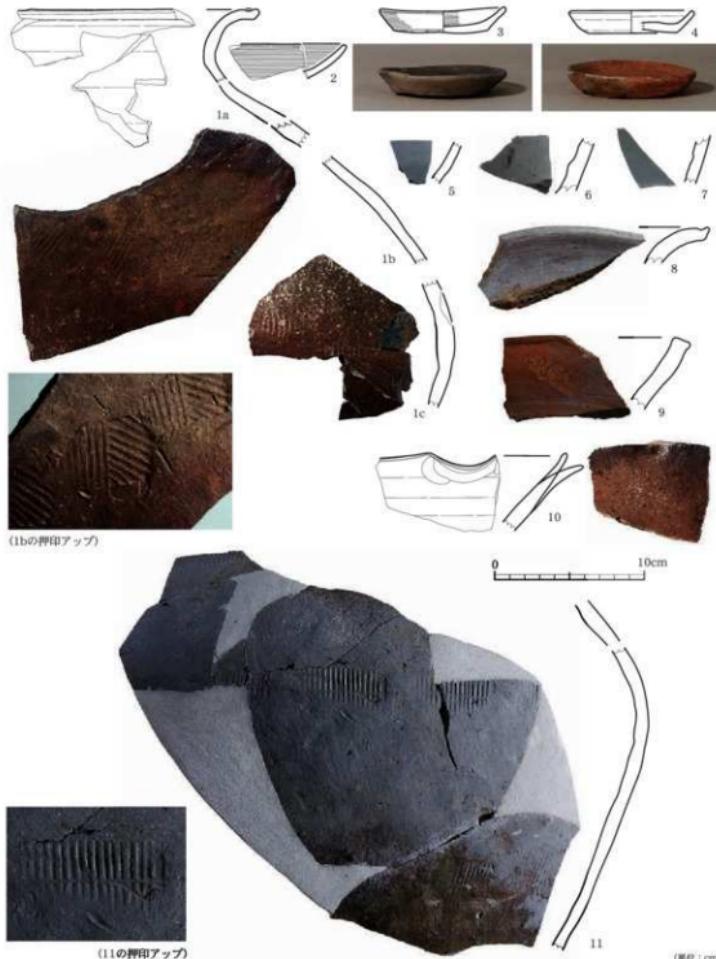
遺物は底面と堆積土から出土した（図版228）。底面から中III期の瀬戸産平碗（1）、底面上か



図版223 SK1008土壤

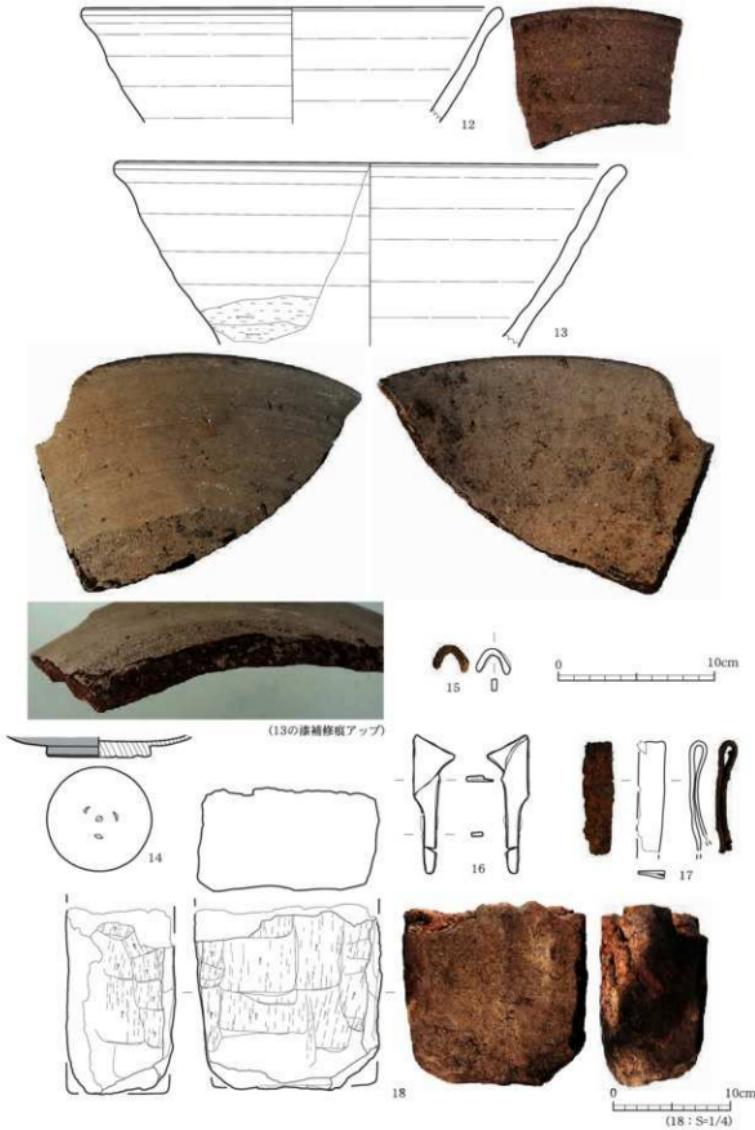


図版224 SK2475土壤



No.	出土層位	種類	測定	地塊	号	備考	寸	引
1	2~3層	無輪陶器	直筒	常陸	柳原2008-11 縦縫+斜縫	【常陸2~3型式図】	Ⅱの両側	94004
2	2~3層	手づなわらび	小盤		11	縦縫、一段ナデ、片口縫に斜縫	Ⅱの両側	94005
3	2~3層	手づなわらび	小盤		12	横ナデ、底付6.4、縫直1.4、縦縫、一段ナデ、底部内面：一方向ナデ	Ⅱの両側	94001
4	2~3層	手づなわらび	小盤		13	横ナデ、底付5.8、縫直1.5、ロクロナデ、底縫：回転糸切+板状U窓 SD1007と接合	Ⅱの両側	94008
5	4層	白磁	玉網模		14	【大学部分X 1~2個±】		05127
6	1層	白磁	四筋巻		15	2と同一個体		05129
7	1層	白磁	四筋巻		16			05128
8	光地上	陶器	直筒	常陸	【常陸1~2 前式圖】			05126
9	1層	陶器	片口縫	在地(白石n)				05125
10	2~3層	陶器	片口縫	常陸	【常陸2型式図】			94009
11	2層	陶器	直筒	常陸	押印量状	SK1008-1~8巻(94005)と接合	Ⅱの両側	05123

図版225 SK1008土壤出土遺物（1）



図版226 SK1008土壤出土遺物（2）



19

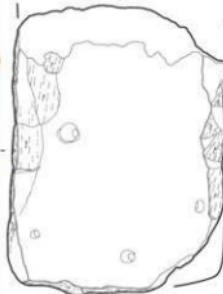
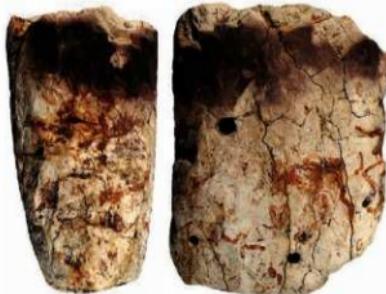


(19のアップ)



0 10cm
(19 : S=1/3)

0 10cm
(20 : S=1/4)



20

(単位: cm)

No.	出土割位	種	形	地	特	種	登録
12	2~3号	陶器	片口鉢	常滑	口径27.0 【常滑5型式鉢】	Ⅱの再翻	94051
13	2~3号	陶器	片口鉢	常滑	口径32.8 連縫 【常滑5型式鉢】 SD1007と接合	Ⅱの再翻	94096
14	2~3号	漆器	椀		高径15.5 内外面：黒色漆、底面：ロクロ瓦漆 【櫛木放り】	Ⅱの再翻	94007
15	2號	鉄製品	不明鉄製品		長径1.2 幅0.7 厚0.4	Ⅱの再翻	05133
16	2~3號	鉄製品	不明鉄製品		短径0.8 幅2.7 厚0.3	Ⅱの再翻	94022
17	2號	鉄製品	不明鉄製品		短径1.1 幅1.7 厚0.3	Ⅱの再翻	05130
18	2~3號	石製品	切石		残存長15.9 幅15.8 厚8.7 打り抜き 繋げはじけ 【廢灰坑】	Ⅱの再翻	94066
19	2~3號	石製品	磨溝器		残存長23.1 幅18.2 厚5.3 二人の人物全身像を彫く 【妙知】	Ⅱの再翻	94075
20	2~3號	石製品	切石		残存長24.7 幅18.2 厚12.4 打り抜き 繋げはじけ 【廢灰坑】	Ⅱの再翻	94067

図版227 SK1008土壤出土遺物 (3)

ら常滑産甕や在地産片口鉢（2）、下層からシカ角や同定不能骨、下層上面からクジラ椎骨、中層から常滑産三筋壺（5）・片口鉢・甕、在地産片口鉢・甕、須恵器系陶器壺、上層から在地産片口鉢、常滑産甕、渥美産甕や同定不能骨、堆積土から常滑産片口鉢・甕、渥美産甕、在地産片口鉢・甕、龍泉窯系青磁蓮弁文椀（4）、龍泉窯系青磁碗（3）、かわらけ、錢貨「元豊通寶」（初鑄1078年）（8・9）、転用砥（6）、砥石（7）やクルミ核が出土している。

2類：径もしくは長軸の長さが1.2m以上～3.0m未満の中型土壙

6基検出した。B2区中央部（SK2500・2537）とB3区南東部（SK2461・2462・2464・2465）に点在する。平面形は円形もしくは梢円形で、深さは0.2～0.9mあり、断面形は皿形が3基（SK2462・2500・2537）と逆台形2基（SK2461・2465）、擂鉢形1基（SK2464）である。堆積土は自然堆積と自然堆積のち人為的に埋戻されているもの（SK2464・2500）がある。



No.	出土層位	種別	器種	產地	特	例	登録
1	底面	施釉陶器	平碗	窓口	高台径5.8 残存:2/3 ロクロナデ→回転ヘラケズリ 底面:高台後ロクロナデ【吉瀬川中里塚】		05094
2	底面面上	陶器	片口鉢	在地	口径28.2 口徑に沈線 SX1600A 東唐G9406-0と同一個体		05094-05035
3	堆積土	青磁	小鉢	龍泉窯系	胎土:白		05096
4	堆積土	青磁	龍泉糞弁文椀	龍泉窯系	胎土:灰色 輗厚が薄い		05095
5	ベルト中層	陶器	三筋壺	常滑	底径(3本):16.2cm		05093
6	堆積土	陶器	転用鉢	常滑	甕の碎片を砾石に転用		05030
7	堆積土	石製品	砥石		残存長(10.2) 幅5.8 厚2.2		05261
8	堆積土	銅製品	錢貨		「元豐通寶」(初鑄1078年)		05100
9	堆積土	銅製品	錢貨		「元豐通寶」(初鑄1078年)		05101

図版228 SK2475土壤出土遺物

遺物は底面や堆積土から出土している(図版231)。SK2465は底面直上から柄杓(4)、2層から在地産甕、ロクロかわらけが出土した。他はいずれも堆積土からの出土しており、SK2461は陶器碗やモモ核、SK2462は陶器碗や常滑産甕(図版231-3)、SK2464は鉢(5)や曲物である。

【SK2500土壤】(図版208・229)

B2区中央部で確認した。SK2501溝跡より新しく、SK2503・2508土壤より古い。平面形は径が2.6×2.0mの楕円形で、深さは0.3mある。断面形は皿形で、底面は中央に向てゆるやかに傾斜する。堆積土は3層に分けられるが、1・2層は人為堆積土と考えられる。1・2層から常滑産甕、かわらけ、転用砥(1)、碁石(6)、鐵鏃(2・4)・刀子(5)・不明鉄製品(3)や銭貨「皇宋通寶」(初鑄1038年)(7)が出土している(図版229)。

3類：径や長軸の長さが1.0m前後より小さな小型土壤(図版230)

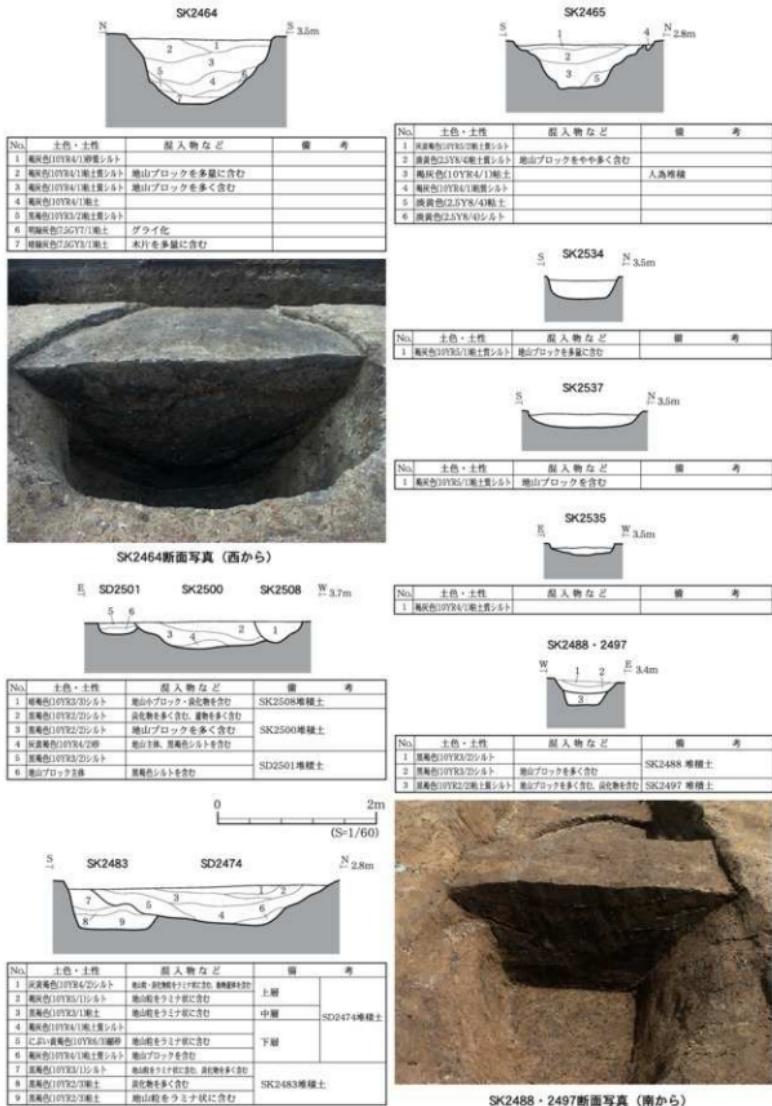
18基検出した。B2区中央部からB3区北部に点在する。後者の中には位置的に建物群と重複するものがある。平面形は円形や楕円形で、深さは0.1~0.4mである。断面形は皿形が12基(SK2493・2502~2504・2508・2535・2541・2543・2544~2548)と多く、ほかに逆台形・擂鉢形がある。堆積土は2基(SK2534・2548)が人為堆積で、10基(SK2497・2502~2504・2541・2543~2548)は自然堆積とみられる。SK2503の堆積土から常滑産甕やかわらけ、SK2535の底面から砥石(図版231-6)、SK2549の堆積土から手づくねかわらけ小皿(図版231-1)が出土している。

4類：長径が1.7m以上、短径は長径の1/2以下となる楕円形の土壤(図版230)

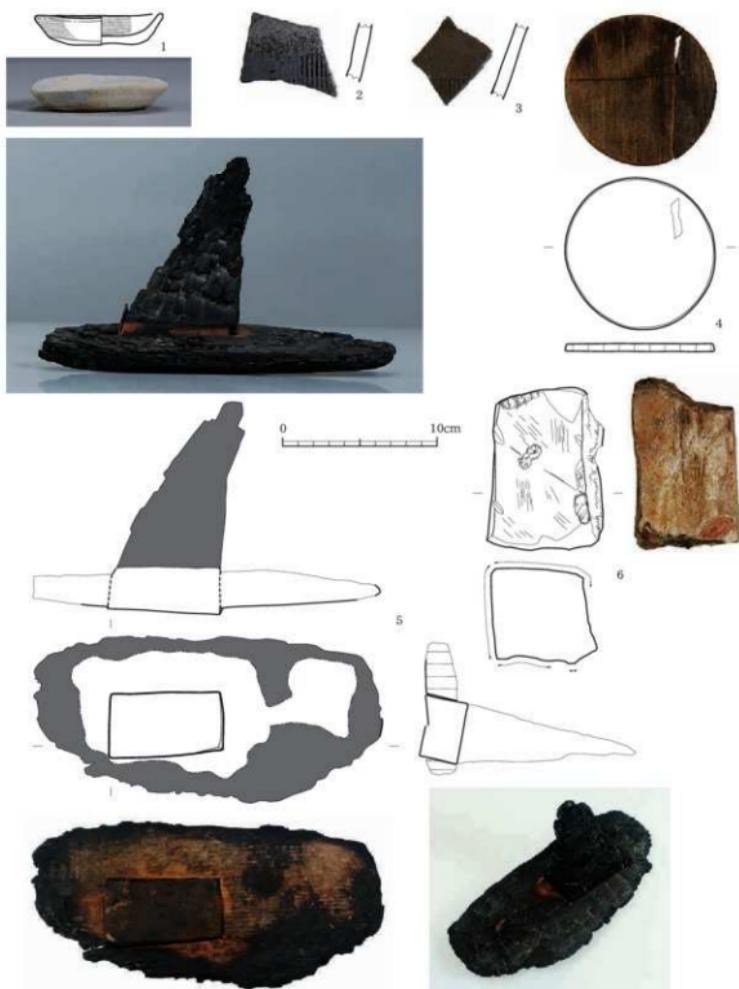
10基検出した。B3区北部に6基(SK2515~2517・2522・2527・2538)が集中しており、ほかにB2区で3基(SK2483・2488・2538)、B3区東側で1基(SK2550)認められる。規模は長径が



図版229 SK2500土壤出土遺物



図版230 B区土壤



(縮尺：任意)

(単位：cm)

No.	出土遺物・層位	種 別	部 位	所 在	特	圖	登
1	SK2549 1層	手づくねかわらけ	小皿		口径(8.3) 番高(1.9) 残存3/5 口縁部：一段ナデ		05032
2	SK2488 地盤上	陶器	甕	常番	円筒壺状		05131
3	SK2462 地盤上	陶器	甕	常番	円筒壺状		05033
4	SK2465 地盤上	木製品	柄杓底板		径9.7 厚0.5		05105
5	SK2464 地盤上	木製品	甕	(25.6) 番(10.7) 厚(2.4)	残存高13.8		05114
6	SK2535 歪面	石製品	硯石		長(10.2) 幅(6.5) 厚(5.6)		05266

図版231 B区土壤出土遺物

2.0~3.9m、短径は0.8~1.2mで、深さは0.2~0.3mあり、断面形は逆台形が5基（SK2483・2488・2515・2517・2538）、皿形が3基（SK2522・2527・2530）、箱形が2基（SK2516・2550）である。堆積土は北部の2基が自然堆積、中央部南側の4基が人為堆積とみられる。中央部南側の2類土壙は墓域の中にあり、埋め戻されるものがあることから、墓壙の可能性が考えられる。遺物はSK2488の堆積土から、常滑産甕（図版231-2）やかわらけが出土している。

（注1）遺物図版は、『II』で報告したものも再度収録している。それらは、2005年度出土品と区別するため觀察表の備考欄に「IIの再録」と記載した。なお、1994年度の出土層位は今回報告する大別2~3層に対応する。

遺構No	平面形	断面形	規模(m)	深さ(m)	分類	堆積土の状況	出 土 遺 物		備 考	回 %
							平面	断面		
SK1098	円形	逆台形	径1.8	1.3	1	自然+人為	4層） 常滑甕、白磁甕 3層） 白磁四耳壺、ロクロ皿、 2層） 常滑甕、在地甕、鉄製品 1層） 在地片口鉢、白磁四耳壺 2・3層） ロクロ小皿、手づくね皿、小里、常滑片口鉢、甕、瓦、在地甕、津波甕、片口鉢、曲物、白木皿、札状木製品、鉄製品、切石、人物模型、インガバ付瓶、ウリ科種実、モモ核	S B2557→SK1006→SD1006・1007 第IV層	208	223
SK2461	円形	逆台形	1.9×1.8	0.3~0.4	2	自然	3層） 陶器甕、モモ核	SD2241→SK2461 第V層	210	
SK2462	円形	皿形	径1.6	0.2	2	自然	3層） 陶器甕、常滑甕	SD2241→SK2462 第V層	210	
SK2464	円形	箱形	1.9×1.8	0.9	2	自然→人為	3層） 甕、曲物		210	230
SK2465	円形	逆台形	径1.6	0.6	2	自然?	底層） 陶器甕、 2層） 在地甕、ロクロ		210	230
SK2475	円形	逆台形	径6.2	0.8	1	自然→人為	3層） 陶戸平甕、 底層上） 在地片口鉢、常滑甕、下層）シソ角、下層上） 中層） 常滑三筋甕、片口鉢、甕、在地片口鉢、須恵器系甕、 上層） 常滑甕、青磁美術、在地片口鉢、甕、甕、瓦、常滑片口鉢、甕、瓦、鐵製品、瓦、輪支具、常滑片口鉢、甕、瓦、鐵製品、瓦石、クリム核	S X1397→SK2475 第IV層	209	224
SK2483	椭円形	逆台形	2.7×1.0	0.6	4			SD2483→SD2474	209	230
SK2488	椭円形	皿形	3.6×0.8	0.1	4	自然	3層） 常滑甕、かわらけ	SK2497→SK2488	208	230
SK2493	椭円形	皿形	0.7×0.4	0.1	3				208	
SK2496	椭円形	皿形	0.7×0.6	0.4	3				208	
SK2497	椭円形	逆台形	0.8×0.6	0.3	3	自然?	1層） 常滑甕、かわらけ、墓石? 瓦、不規則製品、瓦、「皇宋通寶」(折十)1038年)	SK2497→SK2488	208	230
SK2500	椭円形	皿形	2.6×2.0	0.3	2	自然→人為	1層） 常滑甕、かわらけ、墓石? 瓦、不規則製品、瓦、「皇宋通寶」(折十)1038年)	SD2501→SK2500→SK2503・2508 第V層	208	230
SK2502	椭円形	皿形	0.7×0.6	0.2	3	自然		SK2504→SD1007→SK2502	208	
SK2503	椭円形	皿形	0.8×0.5	0.2	3	自然	3層） 常滑甕、かわらけ	SK2500→SK2503・2508	208	
SK2504	椭円形	皿形	0.5×0.3	0.1	3	自然		SK2504→SK2502	208	
SK2505	椭円形	唐草形	0.9×0.6	0.3	3			SK2500→SK2503・2508	208	230
SK2515	椭円形	逆台形	3.0×1.0	0.3	4				208	
SK2516	椭円形	皿形	2.4×1.1	0.2	4	自然?			208	
SK2517	椭円形	逆台形	3.5×1.0	0.3	4	人為?			208	
SK2522	椭円形	皿形	2.5×1.2	0.2	4	人為?			208	
SK2527	椭円形	皿形	3.5×1.2	0.2	4	人為?			208	
SK2530	椭円形	皿形	2.0×0.8	0.2	4	人為?			208	
SK2534	椭円形	逆台形	0.9×0.6	0.3	3	人為			208	230
SK2553	円形	皿形	0.9×0.8	0.1	3		底層） 砾石		208	230
SK2555	円形	皿形	0.8×0.5	0.3	3				208	
SK2557	円形	皿形	1.4×0.8	0.2	2				208	230
SK2558	円形	皿形	2.6×0.8	0.2	4				208	
SK2541	円形	皿形	0.6×0.5	0.1	3	自然			208	
SK2543	円形	皿形	0.8×0.3	0.2	3	自然			208	
SK2544	円形	皿形	0.7×0.3	0.2	3	自然			208	
SK2545	円形	皿形	0.6×0.3	0.1	3	自然?			208	
SK2546	円形	皿形	0.5×0.3	0.2	3	自然			208	
SK2547	円形	皿形	1.0×0.5	0.1	3	自然			208	
SK2548	円形	皿形	0.7×0.4	0.2	3	人為?			208	
SK2549	円形	逆台形	0.7	0.3	3		3層） 手づくね小皿	S X1397→SK2549	209	
SK2550	円形	皿形	2.2×0.8	0.6	4	自然		SK2550→S X1397→SD2241	210	

※ 出土遺物のロクロはロクロかわらけ、手づくねは手づくねかわらけ、在地は宮城県内の在地甕で生産された中世陶器を指す
※ 出土遺物の陶器は、近世陶器類を指す

第16表 B区土壤属性表

④. 溝跡

20条検出した。このうちSD1006・1007・1017・2241・2474・2485は概要を述べ、個々のデータは第17表にまとめた。なお、『II』で溝跡としたSD1040・1045は、今回の調査で近世より新しい遺構であり、水田跡の可能性が高いと考えられたため、溝跡から除外した。

【SD1006溝跡】(図版208・209・232)

B2区中央部で確認したL字形の溝跡である。『II』で西侧部分を報告しており、今回の調査で規模を確定することができた。以下、『II』の成果を含めて述べる。SK1008土壌、SD1007・1019・2495・2509溝跡より新しい。検出総長は南北が10.9m、東西27.9mである。上幅1.0~1.3m、下幅0.4~0.6m、深さは0.4mある。底面はほぼ平坦で、断面形は逆台形である。方向は東西部分でN-30°~40°-Sである。堆積土は6層に分けられるが、いずれも自然堆積とみられる。

堆積土からロクロかわらけ皿(2・3)、ロクロかわらけ小皿(4)、常滑産片口山茶碗(1)・片口鉢・甕(6)、在地産甕(7)、龍泉窯系青磁鑄蓮弁文椀(5)、銭貨「皇宋通寶」(初鋤1038年)(8)、鐵鏃(9)、釘(10)や砥石(11)が出土している(図版234)。

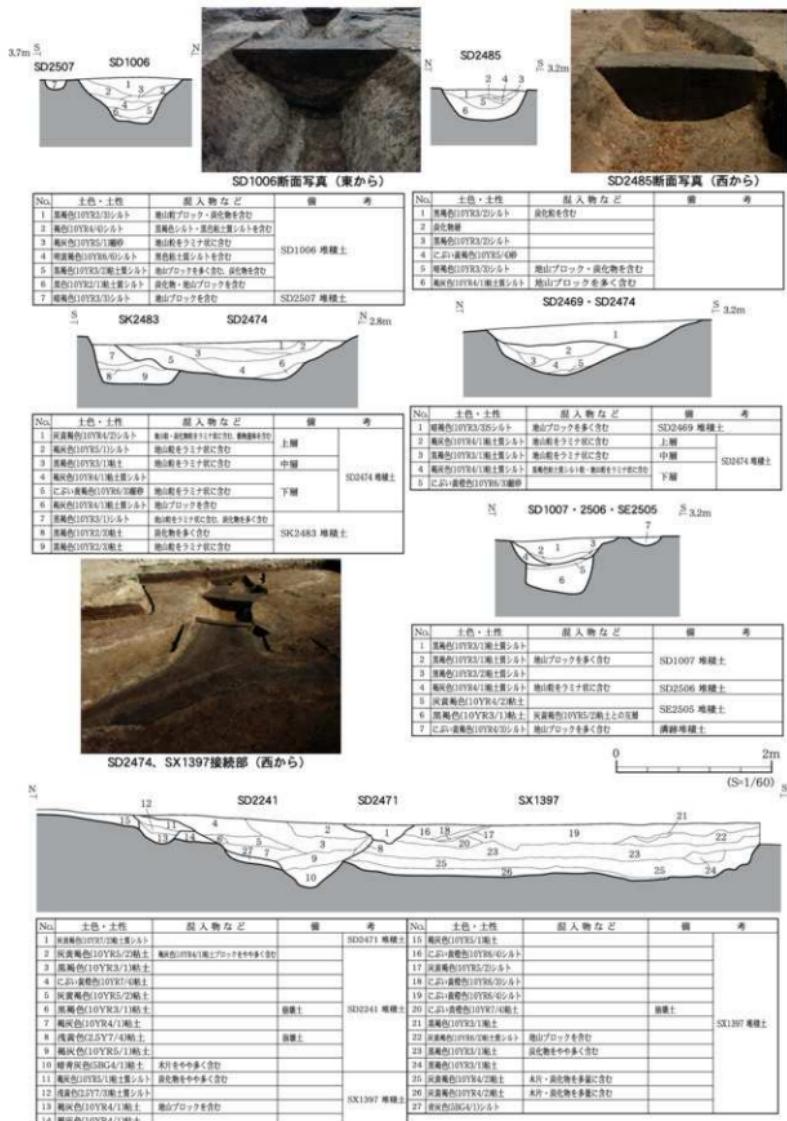
【SD2485溝跡】(図版209・232)

B2区からB3区の東側で確認した南北溝跡である。SX1397遺物包含層の西岸に沿うように南へ延びる。検出長は18.5mである。上幅0.8~1.3m、下幅0.4~0.6m、深さは0.6mある。方向はN-30°-E前後である。底面はほぼ平坦で、断面形は逆台形である。堆積土は6層に分けられるが、いずれも自然堆積である。

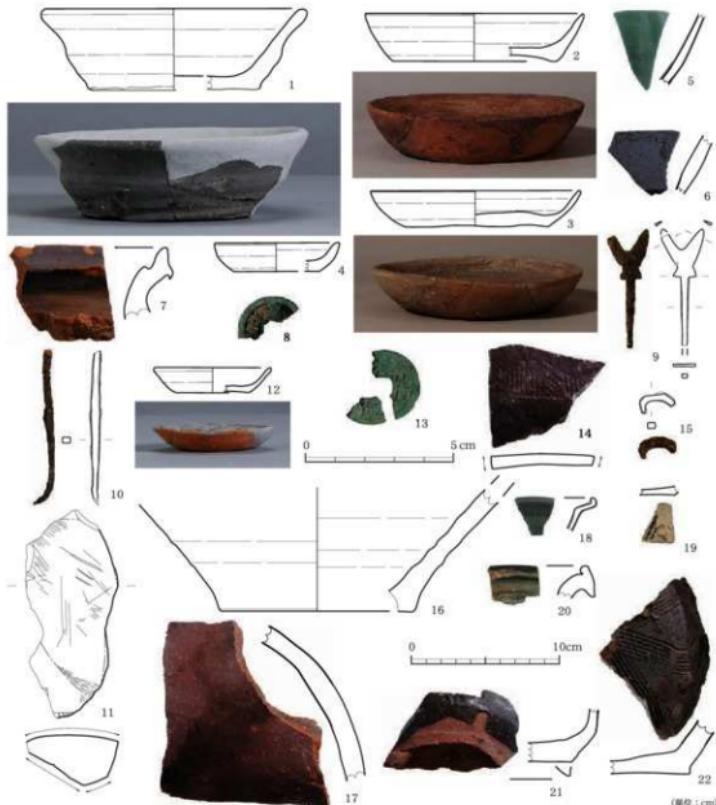
堆積土よりかわらけ皿、常滑産片口鉢・甕、在地産片口鉢・甕(図版234-17)、龍泉窯系青磁盤(図版234-18)が出土している。



図版232 SD1006・2485溝跡(北東から)



図版233 B区溝跡



(単位: cm)

No.	出土遺物・層位	種別	器種	產地	特徴	備考	便益
1	SD1006 湿棲土	陶器	片口山茶碗	常滑	口幅18.0 延長5.0 高さ5.5 残存: 1/2. 底部が剥離。表面内面に使用痕。SK1311001057Dに複合		05143
2	SD1006 湿棲土	陶器	ロクロかわらけ	無	口幅14.8 底径11.0 高さ3.2 ロクロナデ 瓶: 回転系切	Ⅲの両縁	94002
3	SD1006 湿棲土	陶器	ロクロかわらけ	無	口幅14.2 底径9.7 高さ3.2 ロクロナデ 瓶: 回転系切	Ⅲの両縁	94003
4	SD1006 湿棲土	陶器	ロクロかわらけ	小堀	口幅8.5 底径5.6 高さ2.0 ロクロナデ 瓶: 回転系切	Ⅲの両縁	94043
5	SD1006 湿棲土	青磁	扁圓分支瓶	鹿児島県			05149
6	SD1006 湿棲土	陶器	無	常滑	口幅14.0 頂部斜削		05144
7	SD1006 湿棲土	陶器	無	常滑	口幅14.0 頂部斜削		05145
8	SD1006 湿棲土	鉄製品	鉄貨	無	「古史遺寶」(初譲1939年) 長径7.8 幅径4.2 高さ0.3	Ⅲの両縁	94015
9	SD1006 湿棲土	鉄製品	鉄貨	無	長径7.8 幅径4.2 高さ0.3		05154
10	SD1006 湿棲土	鉄製品	釘	無	長10.4 幅0.6 厚0.4		05155
11	SD1006 湿棲土	石製品	砾石	無	長13.7 幅6.1 高さ3.6		05232
12	SD1007 湿棲土	ロクロかわらけ	小堀	常滑	口幅18.0 底径5.0 高さ1.7 残存: 1/4 ロクロナデ 瓶: 回転系切		05159
13	SD1007 湿棲土	鉄製品	鉄貨	無	「古史元」(初譲1909年)		05156
14	SD1007 湿棲土	軋用器	無	無	長径7.8 幅径4.2 高さ0.3		05153
15	SD1007 湿棲土	鉄製品	不明鉄製品	無	長2.51 幅0.5 厚0.4		05273
16	SD2485 湿棲土	陶器	粗抹	常滑	口幅13.22 頂部斜削		05164
17	SD2485 湿棲土	陶器	無	在地	両端ナデ		05163
18	SD2485 湿棲土	青磁	無	鹿児島県			05151
19	SD2492 深鉢皿	陶器	無	常滑			05150
20	SD2469 湿棲土	陶器	無	常滑	【常滑の型式類】		05167
21	SD2469 湿棲土	陶器	青磁	常滑	底面に文様 軋輪 瓶: 扇切→足追合		05168
22	SD2509 湿棲土	陶器	片口鉢	在地	内面: 頂部 弧形: 板状板縫		05148

図版234 B区溝跡出土遺物

【SD1007溝跡】（図版208・209・233）

B2区中央部で確認した東西溝跡である。『II』で西侧部分を報告しており、今回の調査で全体を確定することができた。以下、『II』の成果を含めて述べる。SE2505井戸跡、SK1008土壌、SD2506溝跡、SX1397遺物包含層より新しく、SK2502土壌、SD1006溝跡より古い。検出総長は56.6mである。上幅0.8~1.3m、下幅0.4~0.6m、深さは0.6mある。方向はN-30°~40°-Sである。底面はほぼ平坦で、断面形は逆台形である。堆積土は3層に分けられ、2・3層が人為堆積、1層は自然堆積である。

堆積土からロクロかわらけ皿（12）、常滑産甕、錢貨「祥符元寶」（初鑄1009年）（13）、転用砥（14）、不明鉄製品（15）やウマ下顎骨が出土している（図版234）。

【SD1017溝跡】（図版65）

B2区中央部で確認した東西溝跡である。『II』で西侧や東側を報告しており、今回の調査で全体を確定することができた。以下、『II』の成果を含めて述べる。SK1048・1311土壌、SX1397遺物包含層より新しく、SK1018土壌、SD1045溝跡より古い。検出総長は80.5mである。上幅0.7~1.3m、下幅0.4~0.6m、深さは0.4mある。方向はE-15°~20°-Sである。底面は中央がやや凹み、断面形は逆台形である。堆積土は4層に分けられるが、いずれも自然堆積とみられる。

堆積土からロクロかわらけ皿、常滑産甕、在地産片口鉢、錢貨「熙寧元寶」（初鑄1068年）、弓が出土している。

【SD2241溝跡】（図版66・233）

B区東側で確認した南北溝跡で、SX1397が形成された湿地跡の中央部に設けられる。D区から続いており、検出総長は232.1mとなる。B2区北東部やB3区南東部では東へ分岐している。『III』でD区分は報告済みであるため、今回はB区分の概要を述べる。また、『II』で報告したSX1397Dとは一連の遺構であることが判明したため、その成果を含めて述べる。

SK2550土壌、SD2474溝跡、SX1397遺物包含層より新しく、SK2461・2462土壌、SD2471溝跡より古い。上幅1.2~2.0m、下幅は0.6~1.1m、深さは0.6~1.1mある。方向はB2区でN-30°-E前後あり、B3区南端で西へ向きを変える。断面形は逆台形である。堆積土は6層に分けられるが、いずれも自然堆積である。

遺物は下層からウマ下顎骨、堆積土からロクロかわらけ（1）、在地産片口鉢（2・4）、常滑産片口鉢・甕（6・8・10）、渥美産甕（3）、龍泉窯系青磁碗（5）、転用砥（7・9・11）、漆碗（12）、漆丸盆（14）、柄（13）、砥石、モモ核やシカ角が出土している（図版235・236）。

【SD2474溝跡】（図版209・233）

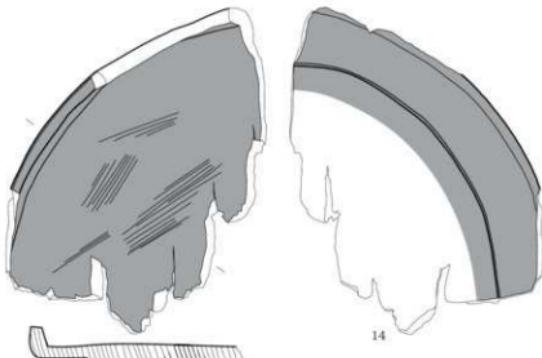
B2区東側で確認した南北溝跡で、『II』で報告したSX1397Cと一連であるため、その成果を含めて述べる。SK1322・2483土壌、SX1397遺物包含層より新しく、SD2241・2469溝跡より古い。検出総長は67.1mである。方向はN-0°~25°-Wで、B2区南東部で東へ向きを変える。上幅2.5~3.0m、下幅は1.3~1.8m、深さは0.6mある。断面形は逆台形である。堆積土は大別して3層に分けられるが、いずれも自然堆積である。部分的な調査であるため、洪水等で一時的に形成された流路



(単位: cm)

No.	出土層段	種別	器種	産地	特	圖	登録
1	堆積土	口クロかわらけ	皿	口原(12.3) 高野8.0 蔵南3.1 残存: 1/2 ロクロナゲ 内: ロクロナゲ→方向ナゲ 外部: 回転削切→斜削刃幅			05017
2	堆積土	陶器	片口鉢	在地			05037
3	堆積土	陶器	甕	在地	押以模様(X)		05018
4	堆積土	陶器	片口鉢	在地			05021
5	堆積土	青磁	小杓	鹿児島県	胎土: 灰色		05082
6	堆積土	陶器	甕	在地	押以模様(10と同一個体)		05024
7	堆積土	帆形瓦		在地	？倉7の被片を瓦石に転用		05002
8	堆積土	陶器	甕	在地	押以模様(10)		05023
9	堆積土	帆形瓦		在地	？倉7の被片を瓦石に転用		05019
10	堆積土	陶器	甕	在地	押以模様(6と同一個体)		05025
11	堆積土	帆形瓦		在地	？倉7の被片を瓦石に転用		05020
12	堆積土	漆器	椀	高台(7.4)	残存高2.0 残存: 1/3 外・底部: 黒色漆塗り 内: 赤色漆塗り		05078
13	堆積土	木製品	道具柄		残存長22.5 幅2.1 厚1.9 端部反が付け加えている【カラマツ】	IIの内蔵	01242

図版235 SD2241溝跡出土遺物 (1)



No	出土層位	種別	器種	特	他	(単位: cm)
14	地盤上 堆積 灰	直	高3.2 厚1.1 内外面: 黒漆塗り 【ケヤキ】		且の西隣 01232	

図版236 SD2241溝跡出土遺物（2）

跡である可能性も残る。

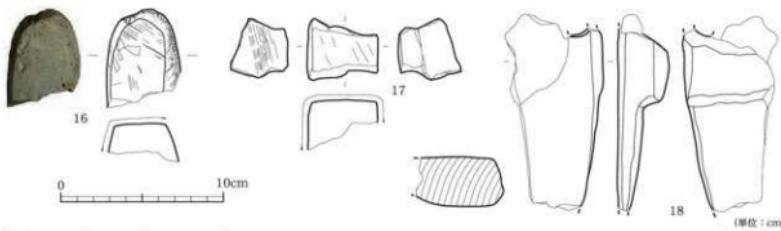
遺物は下層から常滑産片口鉢（3）・甕、中層から在地産甕（13）、上層からロクロかわらけ、常滑産甕、砥石（16）やモモ核、堆積土からロクロかわらけ皿・小皿（1）・柱状高台皿、常滑産三筋壺（6・7）・片口鉢・甕（9～12）、在地産片口鉢・甕、白磁碗（4）、転用砥（14・15）、連齒下駄（18）、砥石（17）やモモ核が出土している（図版237・238）。常滑産陶器のうち、10は5型式期、11は6型式期に位置付けられる。



(単位: cm)

No.	出土場所	性別	器種	産地	特徴	備考
1	堆積土	ロクロかわらけ	小皿	[1188(8.2)] 直径4.3 鋼高2.2 壁厚: 1/2 ロクロナデ 脇部: 回転角切	IIの汚跡	01765
2	堆積土	陶器	片口鉢	黒滑	SX1397-C期堆積土(01069)と同一個体	05031
3	上層	陶器	片口鉢	黒滑	SX1397-4期(05003)と同一個体・山系南系	05027
4	堆積土	白磁	碗	高台径6.2 内底立上がり底に疣状	IIの汚跡	01067
5	堆積土	陶器	片口鉢	黒滑	SX1397-3期堆積土(05016)と同一個体	05029
6	堆積土	陶器	三折鉢	汎用	黒滑	05028
7	堆積土	陶器	三折鉢	黒滑	平行凹槽 2本一組	01074
8	堆積土	陶器	三折鉢	汎用(黒滑)	05085	
9	堆積土	陶器	甕	黒滑(花文?)	05086	
10	堆積土	陶器	甕	【清6型式甕】	IIの汚跡	01068
11	上層	陶器	甕	【清6型式甕】	05026	
12	堆積土	陶器	甕	黒滑	05085	
13	中層	陶器	甕	性地(白石)	05085	
14	堆積土	軋用鏡		円錐鏡脚・鋸縫) 常滑産鏡の鏡片を砾石に軋用	IIの汚跡	01071
15	堆積土	軋用鏡		神田鏡格子(常滑産鏡の鏡片を砾石に軋用	IIの汚跡	01070

図版237 SD2474溝跡出土遺物（1）



図版238 SD2474溝跡出土遺物 (2)

遺構No.	柱直径(m)	断面形	基 横 (m)			方 向	堆積土	出 土 遺 物	備 考	基 級
			上幅	下幅	深さ					
16 上層 石製品 砕石						東西(±30°～±40° S)	自然	■ 壁、礫、石器片、骨、貝、石器、瓦片等 （初期100年）、鐵製品、鐵、井符通貫實（初期100年）、木器	SD1008～SD1007～SD1006 SD1010～SD1009	IIの再発 05259
17 堆積土 石製品 砕石						東西(±35° ±2.8 [砂質])	自然	■ 壁、礫、石器片、骨、貝、石器、瓦片等 （初期100年）、鐵製品、鐵、井符通貫實（初期100年）、木器	SD1009～SD1007～SD1006	IIの再発 01401
18 堆積土 木製品 木炭下駄						東西(±30° ±1.5 厚1.5)	自然	■ 壁、礫、石器片、骨、貝、石器、瓦片等 （初期100年）、鐵製品、鐵、井符通貫實（初期100年）、木器	SD1009～SD1006	IIの再発 01346
										(単位:cm)

第17表 B区溝跡属性表

※検出長、方向、出土遺物は過去の調査で確認したものを含める。

※出土遺物のコロはヨコかわらけ、ホツクねは手づかわらけ、在地は宮城県内の生産地、縫継は縫合方法を指す

※出土遺物の陶器は近世陶器を指す。

D. 考 察

第Ⅰ章で述べたとおり、宮城県教育委員会による中野高柳遺跡の発掘調査は8年に及んだ。今回報告を行ったのは、住宅地区の5区、流通地区のD区とB区南東部である。検出した遺構は、第Ⅶ層で区画溝に囲まれた烟跡と水田跡、第V層で烟跡、第IV層で中・近世の屋敷の区画溝跡11、掘立柱建物跡89、井戸跡118、墓壙20、土壙223、溝跡96などである。以下、報告した地区的遺構や出土遺物の特徴を述べ、その後中・近世については屋敷の構成について検討する。

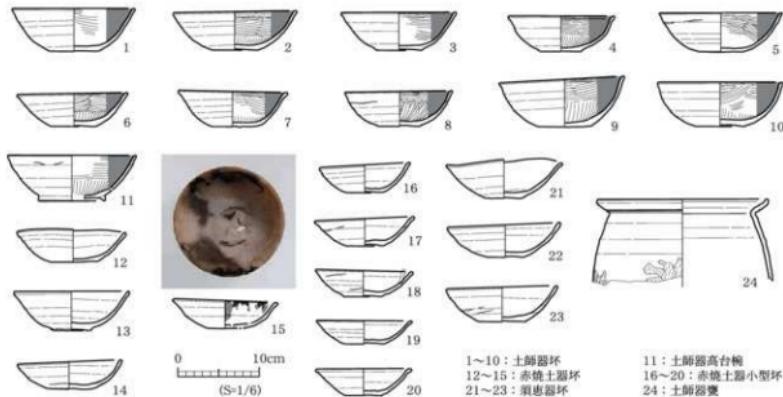
1. 古代の遺物と遺構の概要

(1) 遺物

【S X 2030土器集積遺構出土土器】(図版239)

S X 2030は、灰白色火山灰の降下によってS D 2027烟区画溝の屈曲部が埋まったのちの凹地で検出された土器集積遺構である。土器食器が口縁部を上にして数枚重なった状況で出土した。図示した25点の土器のうち、土師器・赤焼土器・須恵器の坏22点は残存率が高く、完形のまま置かれたと考えられる。

坏類の内訳は土師器坏10点（1～10）、赤焼土器坏4点（12～15）、赤焼土器小型坏5点（16～20）、須恵器3点（21～23）である。いずれも回転糸切りで、再調整は認められず、体部下半に膨らみを持つ椀形の器形である。須恵器は焼成が不充分であり、灰白色・軟質で、内外に黒斑が認められる。土師器坏・椀の内面は、ミガキの幅が広く、ミガキが及ばない部分があつたりと仕上げが雑である。焼物の別に関係なく底面に回転糸切りのちスノコ状圧痕が認められるものがある。赤焼土器や須恵器の中には内面に顕著なコテナデが認められるものがある。また、灯明皿として使用された15の小型坏は、内面に油煙状付着物が顕著に認められ、底部が外から穿孔されている。



図版239 SX2030土器集積遺構出土土器

こうした特徴をもつ土器群は、多賀城やその周辺から数多く出土している。山王遺跡 S X543土器溜（多賀城市教育委員会1991）、同遺跡 S K2861土壤（宮城県教育委員会1998）、高崎遺跡 S X1080土器捨て場跡（多賀城市教育委員会1995）などで、灰白色火山灰降下前後に認められる。したがって、S X2030は10世紀前葉と考えられる。

【S D2400区画溝跡出土遺物】

S D2400区画溝跡は、第VII層で検出したS F2401烟跡の東辺を区画する溝跡である。土師器壺2点が出土した。器形や調整の特徴はS X2030の土師器と類似することから、年代は10世紀前葉と考えられる。

（2）遺構

【第VI層上面】（図版16）

北部から中央部のS D1100河川跡左岸の自然堤防でS F2401烟跡やS D2026・2400区画溝跡、北部左岸の自然堤防縁辺から後背湿地でS F1916水田跡、また、S D2027の屈曲部でS X2030土器集積遺構を確認している。

S F2401烟跡は、河川とコ字形に接続する溝（S D2027・2400）で三方を区画されたとみられる。畠は河川や区画溝の際まで認められ、方向は河川の向きにほぼ直交する。耕作域は東西25～30m、南北約297mで、面積は約8,200m²である。S F2401は、畠間の下層に灰白色火山灰の1次堆積（第VIa層）が認められること、畠は残存せず、その上を火山灰の2次堆積層（第VIb層）や洪水による堆積層（第V層）が覆うことから、灰白色火山灰の降下で廃絶し、その後に起きた洪水によって畠が失われるとともに埋没したと考えられる。S F2401南端の区画溝（S D2027）屈曲部では、火山灰降下後の凹地に土器食器22個体を据えた跡（S X2030）が確認されており、何らかの祭祀行為や飲食儀礼に用いられた土器が一括廃棄された跡と考えられる。

S F1916水田跡は、自然堤防の縁辺部に設けた溝で画される。水田1枚の規模は一辺12.0m×7.3m以上である。方向はS F2401と異なり、東へ傾斜するためS F2401とは別時期に機能していた可能性がある。。

第VII層検出遺構は、S X2030出土土器の年代観と灰白色火山灰との関係から10世紀前葉に機能していたと考えられる。その後、これらの遺構は河川の氾濫（第V層）によって埋没する。

【第V層】（図版27）

北部左岸の自然堤防縁辺部でS F1919烟跡を確認した。耕作域の面積は東西8.1m、南北8.9mで、面積は72m²以上である。第VII層のS F2401烟跡と比較すると、区画溝が伴わず、畠の方向も異なる。年代は、同時期と考えられるS F1303烟跡（『I』）の年代から10世紀中葉とみられる。

2. 中世・近世の遺物と遺構の概要

（1）遺構の特徴と年代

遺構や遺物包含層から、かわらけ・陶磁器・土製品・石製品・木製品・金属製品・動物遺体・植物遺体が出土している。ここでは、ある程度遺物がまとまって出土した遺構について、特徴や年代を考

える。また、中野高柳遺跡の検出遺構は、大別して7期に整理されており（『I』 第18表）、大別遺構期への位置付けも行う。その際、中世以降は奢侈品である瀬戸産陶器や輸入磁器（青磁・青白磁・白磁）、貯蔵具である陶器壺・甕などは伝世したり使用期間が長期にわたるケースも考えられるため、これらより使用期間が短いと考えられるかわらけや陶器碗、陶器片口鉢・擂鉢、瓦質土器、木・漆製食器の年代を優先し、奢侈品や貯蔵具については補助的に扱う。

中世陶器の年代観は、常滑が中野晴久氏（中野晴久1994）、瀬戸は藤沢良祐氏（藤沢良祐1994・1997）の文献を参考とした。また、本遺跡から出土した中世の在地産陶器は、器形や胎土、製作技法からみて白石窯跡群の製品と考えられる。同群は一本杉・東北・黒森・市ノ沢の4支群からなる。一本杉支群は20基の窯が調査され、生産年代は13世紀中頃～14世紀初頭であり（菊池逸夫2003）、他群もほぼ同時期の操業とみられる。さらに、漆器については中世期が東北地方で編年作業が進んでいたため、北陸地方の編年（四柳嘉章1997）を参考とし、近世期については、仙台藩領内の漆器変遷をまとめた関根達人氏の論考を参考とした（関根達人1998）。

遺構期	年代	主な遺構	備考	掲載書
第Ⅰ期 10C前葉	10C前葉	溝に開まれた焼跡・水田跡	灰白色火山灰で廃絶→洪水で埋没	
		S F 1334・1593・SD 1256・1257・1592		I・II
		S F 1493・2401・SD 2027・2400・2402		IV
		S F 1199（水田跡）+ SD 1155・1156		I
		S F 1916（水田跡）+ SD 1911		IV
		S X 2030（土器集積遺構）	土器食器22個出土	IV
第Ⅱ期 10C中葉	10C中葉	SD 1100（河川跡）		I・II・IV
		溝に開まれた焼跡	洪水で廃絶	
		S F 1303 + SD 1150・1151		I
		S F 1333 + SD 1309・1330		I
		S F 1919		IV
第Ⅲ期 12C	12C	S X 1151（洪水跡）		I
		SD 1100（河川跡）		I・II・IV
		風致跡、道路跡？ 遺物包含層		
		屋敷跡L・M・N		IV
第Ⅳ期 13C～14C	13C～14C	S X 1200（遺物包含層）	土器・陶磁器・漆器・木器・金属器 跡地網状底層	III
		屋敷跡、道路跡、遺物包含層		
		屋敷跡A		I
		屋敷跡G・G'		II・IV
		屋敷跡L・M・N・O・P		IV
第Ⅴ期 15C～16世紀後半	15C～16世紀後半	S X 1600（南北道路跡）	2時期、南北とも遺跡外へ延びる	I・II
		S X 1397（遺物包含層）	土器・陶磁器・漆器・木器・金属器	II・IV
		屋敷跡		
		屋敷跡B・B'	屋敷B→屋敷B' 南辺に土橋	I・III・IV
第Ⅵ期 16C後半～17C前半	16C後半～17C前半	屋敷跡I	南辺に土橋	IV
		屋敷跡Q		IV
		屋敷跡		
		屋敷跡C	屋敷C→屋敷E 二区画 南辺に土橋	I・IV
第Ⅶ期 17C後半～19C	17C後半～19C	屋敷跡E	三区画 南辺に土橋	I
		屋敷跡J	南辺に土橋	IV
		屋敷跡、道路跡？ 墓跡		
		屋敷跡H		IV
		屋敷跡F	区画溝から土器・陶磁器・漆器・木器・金属器	I・III・IV
		屋敷跡K		IV
		屋敷跡R	内部は三つに細分？	IV
		屋敷跡S	屋敷F南側	III
		屋敷跡T	遺跡南端	II

第18表 中野高柳遺跡の遺構期と主な検出遺構

一遺物包含層一

【S X1397】（図版240・241）

遺跡南部の湿地跡に形成された遺物包含層である。下層から手づくねかわらけ皿（1）・小皿、ロクロかわらけ皿・小皿（2～9）・柱状高台皿、常滑産片口鉢（14～16）・三筋壺（18）・甕（10～13）、在地産片口鉢（17）、瀬戸産仏花瓶（19）、須恵器系陶器壺、白磁壺、漆椀（20・21）・皿（22）、白木椀（23）が出土している。常滑産陶器は2～3型式期（12世紀中頃～後葉）の甕（10・11・13）、4型式期（12世紀末～13世紀第1四半期）の片口鉢（15・16）・甕（12）、5型式期（13世紀第2四半期頃）の片口鉢（14）が認められる（図版240）。

中層からは手づくねかわらけ皿・小皿（29）、ロクロかわらけ皿・小皿（30～36）・柱状高台皿、渥美産壺、常滑産片口鉢・三筋壺・甕、在地産片口鉢、須恵器系陶器壺、漆椀・小皿（37）が出土している（図版240）。上層からは、手づくねかわらけ皿（1）・小皿（2）、ロクロかわらけ皿（3・4）・小皿（5～10）、瀬戸前II期（13世紀第2四半期頃）の卸皿（12）、在地産片口鉢（15・16）、常滑産片口鉢・三筋壺（13・14）、須恵器系陶器壺、白磁四耳壺、渥美産甕、漆椀（17）・皿（18）などが出土している（図版241）。

かわらけの胎土や色調をみると、砂粒を多く含み橙色や褐色を呈するものと、砂粒を含まない均質な胎土で黄橙色や褐色といつた、白っぽい色調のものとがある。前者は手づくね、ロクロ双方に認められるが、後者は手づくねにのみ認められ、なかには器面の摩滅が著しいものがある。S X1397周辺の遺構では、前者は認められるが、後者の出土例はない。したがって、S X1397が形成されたときに使用されていたかわらけは、橙色を呈するかわらけであり、手づくねかわらけは小皿を主体とすると考えられる^(註1)。

漆椀・皿は内外とも黒色漆で仕上げられる。漆椀は、総高台の内側を浅く削って高台とするため、底部が厚い。体部は内彎しながら立ち上がる椀形である。白木椀は漆椀と器形は同じで、底部は浅い抉りが施された総高台である。

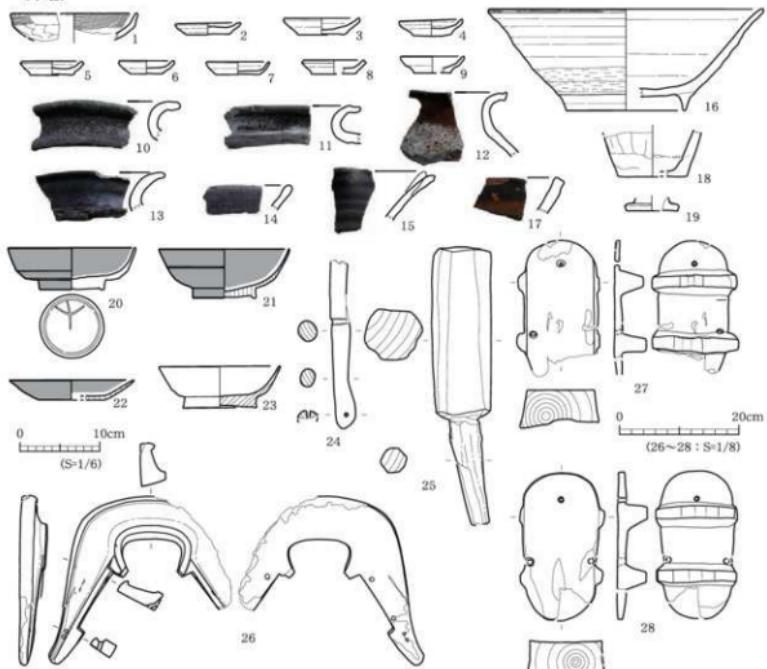
各層の遺物を比較すると、以下の点で下層・中層と上層に違いが認められる。

- ①ロクロかわらけ小皿：下層・中層は扁平なものと器高の高いもの組み合わせであるが、上層は扁平なタイプのみである。
- ②在地産陶器の割合：下層・中層は常滑産が主体で、在地産は非常に少ないが、上層は在地産を定量含む。
- ③漆椀：下層・中層の器形は、口径に較べて身が浅く、体部の開きが大きいが、上層は身が深くなり、体部が内彎する（開きが小さくなる）。

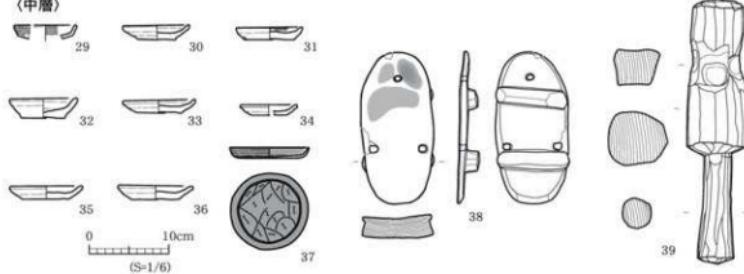
このうち、中・下層と同じロクロかわらけ小皿の組合せは、SK2185でも認められる。また、漆椀の体部の内彎傾向が新しくなって強まる（体部の開きが小さくなる）傾向は、北陸地方でも認められている（四柳嘉章1997）^(註2)。したがって、S X1397の出土遺物は下層・中層→上層という2段階の変遷が考えられる。

S X1397の年代は、常滑産片口鉢や瀬戸産卸皿の年代が12世紀末～13世紀第2四半期であること、

〈下層〉



〈中層〉



29: 手づくねかわらけ小皿

30~36: ロクロかわらけ小皿

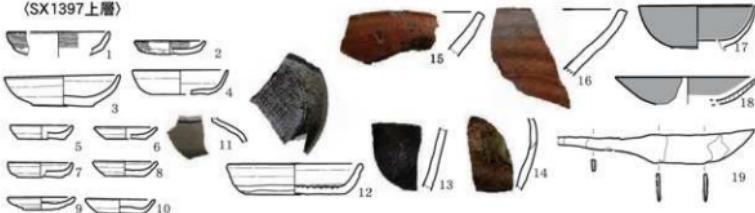
37: 接小皿

38: 連曲下駄

39: 橫鉢

図版240 SX1397遺物包含層出土遺物

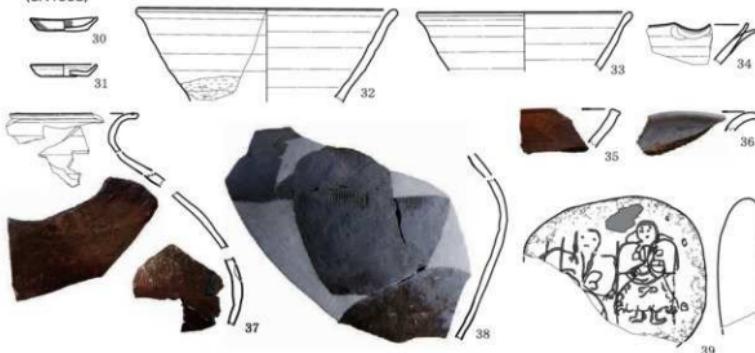
(SX1397上層)



(SK2185)



(SK1008)



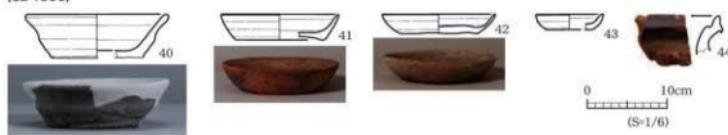
30: 手づくねかわらけ小皿
36 ~ 38: 常滑産要

31: ロクロかわらけ小皿
39: 墨書き

32 ~ 34: 常滑産片口鉢

35: 在地産片口鉢

(SD1006)



40: 常滑産片口山茶碗

41 ~ 42: ロクロかわらけ皿

43: ロクロかわらけ小皿

44: 常滑産要

図版241 SX1397・SK1008・2185・SD1006出土遺物

在地産（白石産）陶器の生産年代が13世紀中頃～14世紀初頭であることから、13世紀代を中心とした年代観が与えられ、第IV期に位置付けられる。先述したように、出土遺物は中・下層→上層という変遷が考えられた。下層には量が少ないながらも5型式期の常滑産片口鉢や在地産片口鉢が認められる。このため、S X1397の年代は中・下層段階が13世紀前半～中頃、上層段階は13世紀後半頃とみられる。

一区画溝跡

【SD1467】

5区で確認した東西溝跡で長さ21.0m分を検出した。堆積土から近世以降の陶器、磁器、染付などが出土しており、第VII期に位置付けられる。

【SD1466】

5区で確認した東西溝跡で長さ17.1m分を検出した。第VII期のSD1467より古い。遺構の特徴や近世以降の遺物が出土していないことから、SD1828と一連の遺構と考えられる。

【SD1828】

5区で確認した西端が北に折れるL字形の溝跡である。東西45.5m、南北42.3m分を検出した。遺構の特徴や出土遺物からSD1466と一連の遺構と考えられ、両者は東西45.0m以上、南北81.0～85.0mの範囲（区画I）を画する。底面から青磁碗、堆積土から常滑産片口鉢・甕、在地産甕、青磁碗、ロクロかわらけ、漆椀、茶臼（上臼）などが出土している。SD1466・1828の年代は、第III～IV期のSD1821・1840・1845より新しく、第VII期のSD1467より古いことから、第V～VI期とみられる。

【SD1829】

5区で確認したL字形の溝跡で、南辺には幅3.0mの土橋（SX1902）が設けられる。東西は南辺で45.5m、北辺で29.1m、西辺は南西コーナーから北へ29.6mの地点で東へ折れ、さらに25.2m延びて北辺と接する。SD1829は東西が南側で45.0m以上、南北は40.0mの範囲（区画J）を画する。堆積土からロクロかわらけ、常滑産甕、茶臼（下臼）、白磁碗などが出土している。年代はSD1828より新しく、遺物に近世陶磁器を含まないことから、第V～VI期とみられる。

【SD1494】

5区で確認した西端が南に折れるL字形の溝跡で、東西61.9m、南北27.0m分を検出した。遺構の特徴や出土遺物から、D区のSD1756・2301と一連の遺構と考えられる。SD1466・1756・2301は、東西65.0m以上、南北53.0～61.0mの範囲（区画H）を画する。堆積土の3層から陶器碗・擂鉢、2層から17世紀初頭の志野織部陶器丸皿、陶器碗・鉢、1層から17世紀第3四半期の瀬戸美濃産陶器輪禿皿、陶器碗・小皿・擂鉢、染付碗・皿、磁器碗、青磁碗、堆積土から17世紀後半～18世紀前半の肥前産陶器大皿などが出土しており、第VII期に位置付けられる。

【SD2301】

D区で確認した東西溝跡で、38.8m分を検出した。遺構の特徴や出土遺物から、5区南部で検出したSD1494、D区北部で検出したSD1756と一連の遺構と考えられる。また、SD2364と接続する可能性がある。堆積土下層から漆椀、上層から切込産とみられる磁器碗、18世紀末以降の陶器甕、陶器

徳利・鉢・ひょうそく、堆積土から陶器碗・擂鉢、染付徳利や磁器小壺などが出土しており、第VII期に位置付けられる。

【S D 2364】

D区で確認した南北溝跡で、25.2m分を検出した。堆積土から染付碗・皿・壺、陶器碗・鉢・土瓶・擂鉢・甕、軟質施釉土器熔烙、キセルなどが出土しており、第VII期に位置付けられる。

【S D 2015】

D区で確認したコ字形をした溝跡である。東西40.0m、南北27.5m分を検出した。S D 2015は東西40.0m以上、南北27.5mの範囲(区画K)を画する。区画内部の建物跡の年代から第VII期とみられる。

【S D 2363】

D区で確認した南北溝跡で、50.8m分を検出した。堆積土から常滑産片口鉢・壺、5型式期(13世紀第2四半期)の常滑產甕、在地産片口鉢・壺、ロクロかわらけ皿・小皿、龍泉窯系青磁鑄蓮弁文碗などが出土しており、第IV期に位置付けられる。

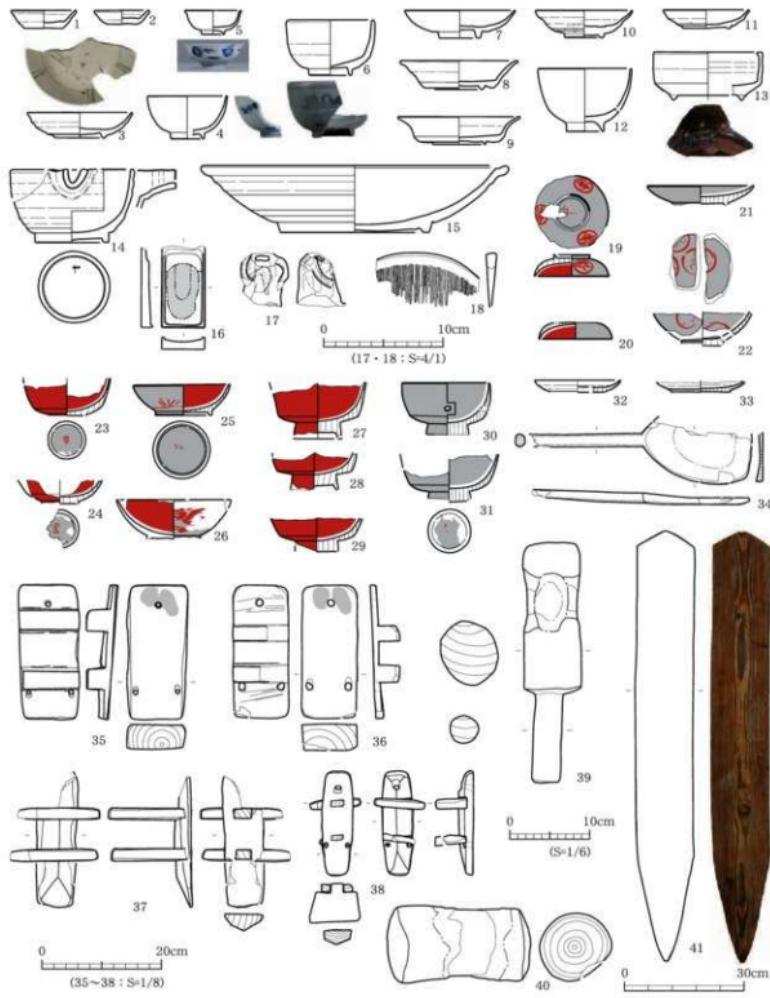
【S D 1633B区画溝跡】(図版242・243)

A区で確認した屋敷Fの区画溝である。底面と堆積土から多量の陶磁器や漆器が出土しており、年代や産地が判明しているのは以下のとおりである。底面から17世紀後半の瀬戸美濃産陶器皿・下層からは17世紀前半の志野織部皿(11)、17世紀~18世紀中頃の瀬戸美濃産陶器皿・端反皿(8・9)・笠原鉢(15)・片口鉢(14)、17世紀後半~18世紀前半の岸産陶器香炉(13)・小甕・猿形水滴(17)、17世紀中頃~18世紀前半の肥前産陶器呂器手碗(12)・陶胎染付碗(6)・折縁皿(10)・磁器染付小碗(4)・小杯(5)・皿(3)・折縁皿・青磁皿(7)・漆椀(身:22~31、蓋:19・20)・皿(21)・白木小皿(32・33)が出土している(図版242)。

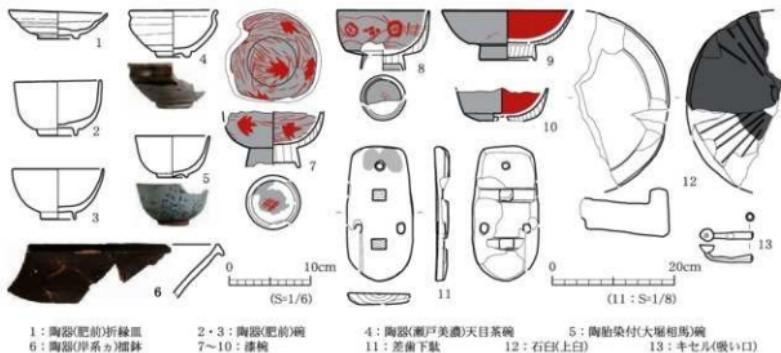
下層出土漆器は、内外もしくは片面が赤色漆仕上げとなるものが主体を占め、内外とも黒色漆仕上げは少ない。また、赤色漆で漆絵が描かれるものが認められる。漆椀(身)では、体部下半に稜を有する「一文字腰」が多い(23・24・27~31)。一文字腰をもつ漆椀は、江戸遺跡で17世紀後半に出現し、18世紀以降に一般的になるとされ(中井さやか1992)、同様の傾向は、仙台領内でも指摘されている(関根達人1998)。また、23・24のように高台内に朱書きされた長方形の枠と文字は、仙台城で17世紀末・18世紀初頭をピークとして18世紀後葉まで認められる装飾技法である(関根達人 前掲)。

上層からは17世紀初頭の志野織部皿、17世紀後半の瀬戸美濃産天目茶碗(4)、18世紀前半の岸窯系陶器擂鉢(6)、18世紀の肥前産陶器碗(2・3)・折縁皿、19世紀前半の大堀相馬産陶胎染付碗(5)、19世紀の堤産軟質施釉土器熔烙、19世紀の陶器土瓶、漆椀(7~10)などが出土している。漆椀(身)は、内外もしくは片面が赤色漆仕上げとなるものと赤色漆で漆絵が描かれるものとが認められる。また、体部下半に稜を有する「一文字腰」椀(8・10)が4点出土した(図版243)。

以上の検討から、陶磁器や漆器からみたS D 1633 Bの年代は、17世紀後半~19世紀と考えられ第VII期に位置付けられる。なお、上層から出土した台の先端が平坦で、後端が尖り気味に丸くなる露卵(差歛)下駄(図版243-11)は、伊達家家紋の三引両文が描かれた漆器(三引両文漆器)を出土する遺跡で出土する傾向が高いと指摘されている(高桑登2003)。



図版242 SD1633B区画溝跡下出土遺物



図版243 SD1633B区画溝跡上層出土遺物

一 5 区の遺構一

【井戸跡】 64基検出した。井戸側を持つものは7基で、残りは素掘である。また、前者のうち4基は側がすべて抜き取られていた。

S E 1881・2602は、葦を簾状に組んだ枠をもつ井戸跡である。S E 1881はS K 1880、S E 2602はS E 2601より新しい。両井戸跡とも年代を推定できる遺物が出土していない。葦簾組の井戸は、本遺跡で7基確認しており、構造的には隅柱を伴うもの（S E 1647・2480・2602）と隅柱がないもの（S E 1534・1539・1881・2199）に大別できる。年代がわかるものはS E 1647で、17世紀以降である。本遺跡の周辺で類似した構造を持つ井戸は、新田遺跡7次調査S E 3や8次調査S E 1・2（多賀城市埋蔵文化財調査センター1989）があげられる。その年代は15世紀頃と報告されていることから、S E 1881・2602は中世以降（第IV期以降）と考えられる。

S E 1786は縦板に丸太の周縁部を用いた縦板組隅柱横桟止めの井戸跡である。S E 1811より新しい。棒内堆積土から陶器碗が出土しており、第VII期とみられる。

S E 1456は素掘の井戸跡で、堆積土の下層（6層上面）から出土した漆椀は、高台が低く厚みがないこと、口縁部の開きが小さいことから北陸編年の第VI期（13世紀）に位置付けられ、第IV期とみられる。このほか、**S E 1789・1790・1890**は出土遺物が12世紀のS X 1200（『III』）や13世紀のS X 1397に類例があることから第III～IV期、**S E 1772**は在地産陶器が出土していることから第IV期、**S E 1462**は出土遺物がS D 1633 Bに類例があることから第VII期に位置付けられる。また、**S E 1769**は第IV期のS E 1772より古いことから第IV期以前、**S E 1774**は第IV期のS K 1761より古いことから第IV期以前に位置付けられる。

【土壤】 64基検出した。これらは規模や平面形から1類：大型土壤（18基）、2類：中型土壤（29基）、3類：小型土壤（16基）、4類：楕円形土壤（1基）に分けられる。

【S K1454土壙】

5区北東端で確認した大型土壙である。下層から挽臼や砥石、中層から漆椀、漆大鉢、上層から常滑産片口鉢・甕などが出土している。中層の漆大鉢や内面が赤色漆、外面に漆絵が描かれる漆椀は北陸編年のVII期2段階（15世紀後半）に、上層の片口鉢は、常滑編年の10型式期（15世紀後半）に類例が求められる。したがって、年代は15世紀後半頃とみられ第V期に位置付けられる。

【S K1458土壙】

5区北東端で確認した大型土壙である。S K1454より古い。中層から在地産片口鉢、上層から内面が赤色漆、外面は黒色漆で、両面に漆絵が描かれる漆小皿、堆積土から在地産片口鉢、常滑産甕などが出土している。在地産陶器が出土していること、上層出土の漆小皿は北陸編年のVII期1段階（14世紀前半）に類例があることから、年代は14世紀前半頃とみられ第IV期に位置付けられる。

【S K1880土壙】

5区中央部で確認した大型土壙である。4層からロクロかわらけ小皿、3層からロクロかわらけ、常滑産甕、龍泉窯系青磁碗、漆碗や曲物、2層からロクロかわらけ小皿・皿、1層からロクロかわらけや常滑産甕などが出土している。ロクロかわらけはS X1200・1397に類例があり、年代は12～13世紀とみられ第III～IV期に位置付けられる。

【その他の土壙】

S K1761は、径3.4mの大型土壙である。下層からロクロかわらけ小皿や常滑産片口鉢、中層からかわらけや常滑産甕、上層からロクロかわらけ小皿、在地産片口鉢が出土している。遺物の特徴は、S X1397に類例があることから第IV期に位置付けられる。S K1883は、径4.0mほどの大型土壙である。第III～IV期のS K1880より古いこと、出土量は少ないが堆積土より常滑産片口鉢・甕が出土していることから、第III～IV期とみられる。S K1844は第III～IV期とみられるS D1821より古いが、堆積土から常滑甕が出土しており第III～IV期とみられる。S K1782は径1.5mほどの中型土壙で、堆積土より陶器小皿が出土していることから第VII期に位置付けられる。

このほか、S K1762は5型式期（13世紀第2四半期頃）の常滑産片口鉢が出土していることから第IV期、S K1460・1784・1797・1878は出土遺物がS D1633Bに類例があることから第VII期に位置付けられる。また、S K1773は第IV期のS K1761より古いことから第IV期以前、S K1846～1848は、第III～IV期のS D1845より古いことから第IV期以前に位置付けられる。

【溝跡】29条検出した。

S D1495は南北溝跡で、検出総長は107.6mである。3時期（A→B→C）の変遷があり、D区のS D2020溝跡と一連の遺構と考えられる。また、S D1821東西溝跡と一連の遺構である可能性がある。その場合、検出総長は南北257.1m、東西70.0mとなる。B期堆積土からロクロかわらけ皿・小皿や常滑産甕、C期堆積土からロクロかわらけ皿・小皿、常滑産片口鉢・甕などが出土している。S X1200やS X1397出土遺物の特徴と共に通しており、第III～IV期に位置付けられる。

S D1821は上幅1.8～2.4mの東西溝跡で、市教委5次調査区を含めた検出総長は70.0mである。S D1495南北溝跡と一連の遺構である可能性がある。第III～IV期とみられるS K1844より新しく、第V

期とみられる S D 1828より古い。堆積土から常滑甕やかわらけ、確認面から渥美產とみられる三筋壺、常滑產甕、かわらけなどが出土している。遺構の重複関係や出土遺物が S X 1200・1397に類似することから第Ⅲ～Ⅳ期とみられる。

S D 1840は上幅1.2～1.5mの南北溝跡で、市教委5次調査区分を含めた検出総長は39.1mである。東に1.0～3.5m離れて S D 1845が併行する。S K 1839、S F 1842や第VI期とみられる S D 1829より古い。堆積土から常滑甕やかわらけ、青磁椀などが出土しており、第Ⅲ～Ⅳ期とみられる。

S D 1845は上幅2.4m前後の南北溝跡で、市教委5次調査区分を含めた検出総長は36.7mである。西に1.0～3.5m離れて S D 1840が併行する。第Ⅲ～Ⅳ期とみられる S K 1846～1848より新しく、S K 1839、S F 1842、第VI期の S D 1829より古い。堆積土からロクロかわらけ、常滑產片口鉢・甕、青磁椀、錢貨「永楽通寶」（初鑄1408年）などが出土している。「永楽通寶」は1層からの出土ではかに15世紀以降の遺物がないこと、遺構の重複関係や2・3層の出土遺物は S X 1200・1397に類似することから第Ⅲ～Ⅳ期とみられる。

S D 1853・1854は上幅0.8～0.9mの南北溝跡で、市教委5次調査区分を含めた検出総長は S D 1853が50.1m、S D 1854は56.0mである。両者は0.8～1.5m離れて併行しており、道路側溝の可能性が考えられる。このほか、**S D 1483**は第IV期の S K 1761、第Ⅲ～Ⅳ期の S K 1762より古いことから、第IV期以前に位置付けられる。

—D区の遺構—

【井戸跡】45基検出した。井戸側を持つものは6基で、残りは素掘である。また、前者のうち2基は、側がすべて抜き取られている。

S E 2105は縦板組隅柱横桟止め井戸跡である。年代は中世以降（第IV期以降）である。**S E 2162**は横板井籠組とみられる井戸跡である。第V期とみられる S D 2165より新しく、第VII期の S E 2161より古い。枠内堆積土から磁器染付碗、枠抜取穴から近世陶器碗・鉢、磁器染付碗が出土しており、第VII期に位置付けられる。

S E 2199は葦を簾状に組んだ枠をもつ、縦簾組横桟止め井戸跡である。第V期とみられる S D 2113より新しく、第VII期の S D 2015より古い。側が簾状となる井戸のうち年代のわかるものは、A区の S E 1647で17世紀以降であることから、第VII期とみられる。

S E 2204は隅柱横桟止め井戸跡で、側板はすべて抜き取られている。年代は中世以降（第IV期以降）である。**S E 2273**は素掘の井戸跡である。堆積土から磁器染付碗や陶器碗などが出土しており、第VII期に位置付けられる。また、楕形溝が出土していることから、付近で鍛冶が行われていたと考えられる。

このほか、**S E 2151・2154・2155・2159・2161・2167・2170・2171・2173・2180・2211・2212・2244・2361**は出土遺物が S D 1633Bに類例があることから第VII期に位置付けられる。また、**S E 2283**は第VII期の S D 2291・2291より新しいことから第VII期以降に位置付けられ、**S E 2152**は第VII期の S K 2153より古いが、周辺の井戸4基（S E 2151・2154・2155・2159）がすべて第VII期であることから、

第VII期とみられる。

【土壤】 123基検出した。これらは規模や平面形から1類：大型土壤（11基）、2類：中型土壤（50基）、3類：小型土壤（55基）、4類：橢円形土壤（7基）に分けられる。

【S K2183土壤】

D区南東部で確認した。下層からロクロかわらけ小皿、上層から手づくねかわらけ皿、ロクロかわらけ小皿・皿、5型式期の常滑産片口鉢、白磁口禿椀などが出土している。手づくねかわらけの胎土はロクロかわらけと同じ橙色で砂粒を含む。かわらけの形態はS X1397出土品の中に類例があること、常滑5型式期は13世紀第2四半期頃、白磁口禿椀は13世紀を中心に認められることから、年代は13世紀代と考えられ第IV期に位置付けられる。

【S K2185土壤】（図版241）

D区南東部で確認した。下層から手づくねかわらけ小皿（20）、1層から手づくねかわらけ小皿・皿（21）、ロクロかわらけ小皿（22～28）・皿（29）などが出土している。ロクロかわらけ小皿は、器高の高いものと扁平タイプとの組み合わせであることから、S X1397中・下層段階に併行し13世紀前半～中頃とみられ、第IV期に位置付けられる。

【S K2246土壤】

D区中央部北側で確認した。4層から常滑産片口鉢・三筋壺・甕、在地産甕、2層から常滑産片口鉢・甕、在地産短頸壺・甕、1層から瀬戸戸中II期（14世紀前葉）とみられる折縁中皿、瀬戸産瓶子、常滑産三筋壺・甕、在地産壺などが出土している。瀬戸産陶器や在地産陶器から、年代は13世紀後半～14世紀前半とみられ第IV期に位置付けられる。

【その他の土壤】

S K2209は径が9.0mを超える大型土壤である。SD2208より新しく、SK2113土壤より古い。底面からロクロかわらけ、在地産片口鉢、常滑産甕、堆積土下層から青磁椀、白磁皿、常滑産甕、在地産甕、中層から在地産片口鉢やロクロかわらけ、上層から瀬戸戸折縁中皿、常滑産甕、在地産片口鉢・甕やロクロかわらけなどが出土している。ロクロかわらけは小破片のみで、図化できるものはなかった。遺物の特徴はS X1397と類似することから、第IV期に位置付けられる。

S K2213は径が4.7mの大型土壤である。第IV期のSK2209より新しいが、下層から常滑産甕、堆積土から青白磁皿や常滑産甕が出土しており、第IV期に位置付けられる。**SK2238**は長径が5.0mの大型土壤である。堆積土の1～7層よりロクロかわらけ小皿が4枚出土している。器形はS X1397と類似することから13世紀とみられ、第IV期に位置付けられる。**SK2294**は長径2.3mの中型土壤でSD2291・2291より新しく、SK2295より古い。底面から陶器鉄絵皿と土師質土器皿が2枚重なって出土した。出土状況から墓壙の可能性がある。鉄絵皿は17世紀後半の瀬戸美濃産であることから、第VII期に位置付けられる。

このほか、**SK2300**は出土遺物がS X1200・1397に類例があることから第III～IV期、**SK2018・2112・2153・2157・2168・2174・2190・2191・2196・2216・2217・2225・2230・2240・2250・2252・2253・2256～2258・2303・2311・2341**は出土遺物がSD1633Bに類例があることから第VII期に位置付

けられる。また、SK2156・2243・2295は、それぞれ第VII期のSK2157、SK2250、SK2294より新しいことから、第VII期以降と考えられる。

【溝跡】47条検出した。

SD2020A・Bは第IV期のSX1397遺物包含層の東岸に沿って延びる南北溝跡である。126.9m分を検出した。2時期(A→B)の変遷があり、5区のSD1495溝跡と一連の遺構と考えられる。B期堆積土から龍泉窯系青磁鑄蓮弁文瓶、常滑産片口鉢・甕、在地産甕やロクロかわらけなどが出土しており、SX1200・1397と特徴が類似することから第III～IV期に位置付けられる。

SD2165A・Bは東西溝跡で、66.0m分を検出した。2時期(A→B)の変遷があり、第IV期のSD2020やSX1397より新しく、第VII期のSE2161・2162・2244、SK2250、SD1633より古い。A期堆積土から青磁瓶や常滑産甕、B期堆積土から常滑産甕、在地産甕などが出土している。遺構の重複関係から第V期のSD1650と同時期の可能性が考えられる。

SD2150・2195は上幅0.6～1.0mの東西溝跡で、前者は46.0m分、後者は一連とみられるSD2148を含めて59.0m分を検出した。SD2150は第IV期のSD2020より新しく、第VII期のSK2190より古い。SD2195は第VII期のSK2191・2196より古い。両者は、2.0m前後離れて併行することから道路側溝とみられる。SD2195は堆積土から陶器皿が出土しており、第VII期に位置付けられる

このほか、SD2269・2291は出土遺物がSD1633Bに類似があることから第VII期に位置付けられる。また、SD2113は第IV期のSD2020より新しく、第VII期のSD2015より古いことから第V～VI期、SD2104は第IV期のSD2020より新しく、SD2113と同じ方向をとることから第V～VI期とみられる。SD2292は第VII期のSD2291より新しく、SK2294より古いことから第VII期に位置付けられる。

—B区の遺構—

【井戸跡】

9基検出した。井戸側を持つものは1基で、残りは素掘である。SE2480は細い心持材や竹材を簾状に組んだ側をもつ、縦築組隅柱横桟止め井戸跡である。底面や堆積土から遺物は出土していない。年代は中世以降(第IV期以降)である。中野高柳遺跡で側が簾状となる井戸のうち年代がわかるものはSE1647で、17世紀以降であることから、SE2480は第VII期の遺構とみられる。

SE2466・2468・2472・2473・2533・2539はいずれも第IV期のSX1397より新しい。SE2533で17世紀末～18世紀初頭の瀬戸美濃産煙硝瓶が出土していることから第VII期に位置付けられる。他の5基も、SE2533の近くに位置することから第VII期とみられる。

【墓塚】

B3区北部で20基確認した。隣接する市教委分を含めると、総数は50基を超えるとみられる。墓域は東西30m、南北20mほどである。C区で検出した近世墓(『II』)と較べて、形態に梢円形や方形が認められる、棺の痕跡が認められない、といった違いが認められ、SX2467底面からは銭貨「永楽通寶」が6枚出土していることから、近世墓ではなく、15～16世紀代(第V～VI期)の中世墓である可能性が考えられる。

【土壤】36基検出した。これらは規模や平面形から1類：大型土壤（2基）、2類：中型土壤（6基）、3類：小型土壤（18基）、4類：橢円形土壤（10基）に分けられる。

【SK1008土壤】（図版241）

B2区中央部で確認した大型土壤である。4層から常滑産甕、白磁碗、3層からロクロかわらけ皿、白磁四耳壺、2層から常滑産甕、在地産甕、2～3層より手づくねかわらけ皿・小皿（30）、ロクロかわらけ小皿（31）、常滑産片口鉢（32～34）・甕（36～38）、漆椀・片口鉢、白木皿、1層から在地産片口鉢（35）、白磁四耳壺、堆積土から常滑産甕やかわらけなどが出土している。常滑産陶器には2～3型式期（12世紀中頃～後葉）の甕（37）、3型式期（12世紀後葉）の片口鉢（34）、5型式期（13世紀第2四半期頃）の片口鉢（32・33）がある。かわらけはS X1397に類例が認められることから、年代は13世紀代と考えられ第IV期に位置付けられる。

【その他の土壤】

S K2475は径が6.2mの大型土壤で、第IV期のS X1397より新しい。堆積土から中III期（14世紀第2四半期）の瀬戸産平碗、在地産片口鉢が出土していることから、14世紀中葉～後葉とみられ第IV期に位置付けられる。**S K2500**は長径が2.6mの中型土壤で、SD2501より新しく、SK2503・2508より古い。埋め戻される際、鉄縫3点を含む遺物が廃棄されている。堆積土から常滑産甕やS X1397と類似するかわらけが出土しており、第IV期に位置付けられる。中型土壤である**S K2461・2462**は、第V～VI期とみられるSD2241より新しく、堆積土から陶器碗が出土していることから第VII期に位置付けられる。

【SD1006溝跡】（図版241）

B2区中央部で確認したL字形の溝跡である。堆積土からロクロかわらけ皿（41・42）、小皿（43）、5型式期とみられる常滑産片口山茶碗（40）、常滑産片口鉢・甕、在地産甕などが出土している。SD1006とS X1397上層のかわらけを比較すると、SD1006のロクロかわらけ皿は扁平で口縁に向けて直線的に開き、手づくねかわらけが認められないのに対し、S X1397上層は底部から内彎しながら立ち上がる椀形で、手づくねかわらけが共伴する。SD1006はSD1007を介してS X1397より新しいことから、両者の違いは時間差を示すと考えられる。したがって、年代は14世紀前半頃とみられ第IV期に位置付けられる。

【その他の溝跡】19条検出した。

SD1007は上幅0.8～1.3mの東西溝跡で、56.6m分を検出した。第IV期のSK1008、S X1397より新しく、同期のSD1006より古いことから、第IV期に位置付けられる。**SD1017**は上幅0.7～1.3mの東西溝跡で、80.5m分を検出した。第IV期のSK1311、S X1397より新しいが、堆積土から在地産片口鉢、ロクロかわらけ、常滑産甕が出土しており、第IV期とみられる。

SD2241はS X1397の中央に設けられた上幅は1.2～2.0mの南北溝跡で、232.1m分を検出した。第IV期のSD2474、S X1397より新しく、第VII期のSK2461・2462より古いことから、第V～VI期とみられる。**SD2474**は上幅2.5～3.0mの南北溝跡で、67.1m分を検出した。第IV期のS X1397より新しく、第V～VI期とみられるSD2241より古い。堆積土からロクロかわらけ小皿、在地産片口鉢、5

～6型式期の常滑産甕が出土しており、第IV期とみられる。S D 2485は上幅0.8～1.3mの南北溝跡で、18.5m分を検出した。堆積土から在地産片口鉢・甕、常滑産片口鉢・甕、かわらけ、龍泉窯系青磁盤が出土しており、第IV期に位置付けられる。

このほか、S D 2495は第IV期のS D 1006より古いが、堆積土よりロクロかわらけが出土していることから第IV期、S D 2501は第IV期のS K 2500より古く、銭「祥符通寶」が第IV期のS D 1007出土品と接合することから第IV期、S D 2509は第IV期のS D 1006より古く、堆積土から常滑産や在地産の片口鉢が出土することから第IV期、S D 2469は出土遺物がS D 1633Bに類似があることから第VII期に位置付けられる。また、S D 1019は第IV期のS D 1006より古いことから第IV期以前、S D 2489は第IV期以前のS D 1019より古いことから第IV期以前に位置付けられる。

(2) 挖立柱建物跡の検討

5区で33棟、D区で32棟、B区で14棟の掘立柱建物跡を確認した。これら89棟の建物跡について位置のまとまりから建物跡群を設定し、その特徴を整理する。

a. 建物群の設定

今回の報告する5・B・D区では多数のビットを確認し、これらの中から柱筋の通りが良く、柱穴相互の間隔に規則性が見いだせたものを、掘立柱建物跡の柱穴として抽出した。建物の数は5区で33棟、D区で32棟、B区で14棟である。抽出した建物跡を概観すると、位置ごとにある程度のまとまりがみられる。そこでそのまとまりを建物跡群として捉え、以下のように設定する（図版244）^(註3)。

1群建物跡：5区北東部、S D 1829区画溝跡以北の建物跡群。17棟検出した（S B 2031～2047）。

2群建物跡：5区中央部、S D 1494区画溝跡以北の建物跡群。10棟検出した（S B 2051～2060）。

3群建物跡：5区南部からD区北端、S D 1494区画溝跡以南、S D 2301区画溝跡以北の建物跡群で、7棟検出した（S B 2061～2066、2410）。

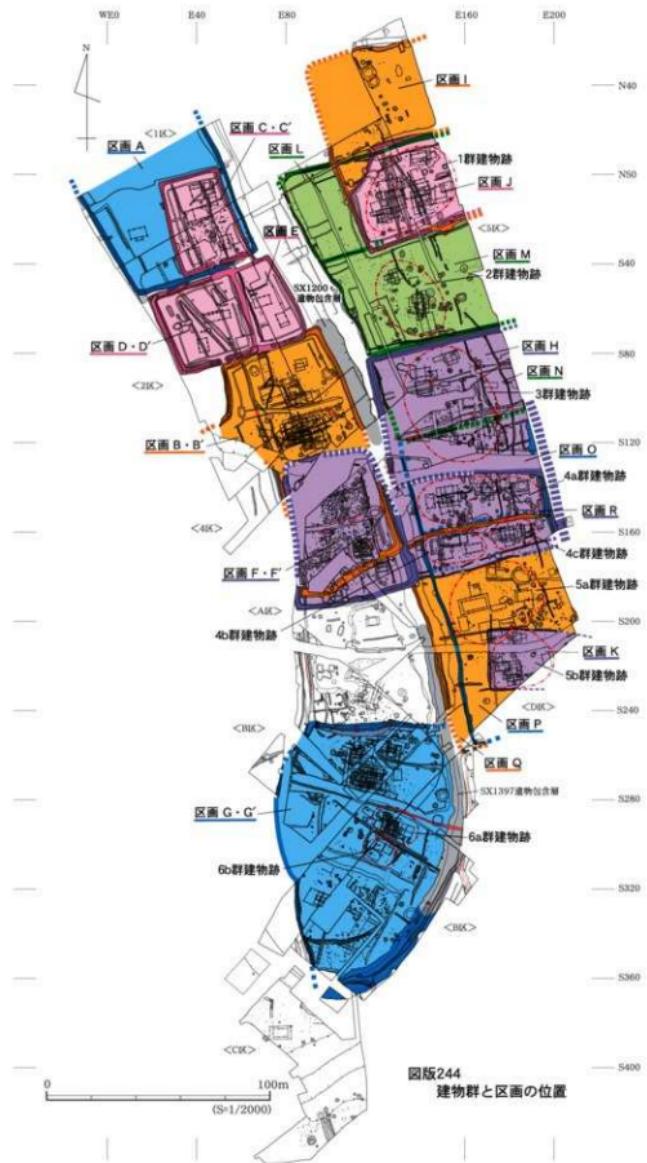
4群建物跡：D区北部、S D 2301区画溝跡以南、S D 2195溝跡以北の建物跡群。22棟検出した（S B 2411～2432）。

5群建物跡：D区中央部から南部、S D 2150溝跡以南の建物跡群。19棟検出した（S B 2433～2451）。

6群建物跡：B 2区東側の建物跡群。14棟検出した（S B 1054～1058・2551～2559）。

b. 各建物群の特徴

建物跡群の特徴をみると、二つの観点に着目した。一つは建物面積で、もう一つは建物跡の重複状況である。建物跡の面積をみたところ、60m²を超えるものが散見されたため、建物面積60m²前後を一つの境界値として、60m²以上の建物跡を大型建物跡、60m²未満の建物跡を中・小型建物跡と呼称する^(註4)。その結果、1・4～6群に大型建物跡が認められ、また、大型建物がない2群でも、他より10m²以上大きな建物が2棟存在することがわかった（第19表）。建物跡の重複状況については、同位置での建物跡の重複が2棟以下なのか、3棟以上重なりあうのかで建て替えの多少を判断



断し、さらに重複する建物跡の規模が同規模か異なる規模なのかについて着目した。以下、各建物跡群の特徴をみていく。その際、出土遺物から時期が特定可能な建物についても検討する。

1群建物跡

1群には17棟の建物跡が存在する。このうち大型建物跡は5棟（S B2035・2037・2041・2042・2044）認められる。大型建物はほぼ同位置にあり、その東や西、あるいは北東に中・小型建物が建てられ、それぞれが数度建て替えられている。S B2035は柱穴埋土から錢貨「至大通寶」（初鑄1310年）が出土しており、14世紀以降と考えられる。

2群建物跡

2群には10棟の建物跡が存在する。大型建物跡は認められないが、S B2056・2060は他と較べて10m²以上大きい。建物は南と北の2箇所に分かれ、前者は南北棟の中心建物を含めて7棟が重複する。

3群建物跡

3群には仙台市教委が確認した4棟を加えた11棟の建物跡が認められる。大型建物跡はみられず、11棟とも中・小型建物である。同位置での重複は全体的に少なく、建物相互の位置も比較的散らばる。

4群建物跡

4群には22棟の建物跡が存在し、北側（4a群：S B2411～2420）、南西側（4b群：S B2421～2428）と南東側（4c群：S B2429～2432）の建物群に細分できる。

4a群は大型建物跡（S B2412）を除く9棟のうち、50m²前後の建物跡が2棟（S B2417・2419）認められ、他の7棟より10m²以上大きい。S B2412・2417・2419は重複せず、東西に並び、他の7棟はこれら3棟の建物跡と重複するが、中・小型建物跡どうしの重複は2棟を除いて認められない。S B2412・2417は柱穴埋土から近世陶磁器が出土しており、第VII期に位置付けられる。

建物群	直構名	桁行平均 柱間	床面積 (m ²)
5区	S B2031	4.5	51
	S B2032	3.5	36
	S B2033	3.5	36
	S B2034	2.3	44
	S B2035	2.3	60
	S B2036	3	29
	S B2037	3.7	74
	S B2038	2.4	35
	S B2039	3.8	55
	S B2040	2.5	31
	S B2041	3.4	82
	S B2042	2.6	105
	S B2043	3.9	51
	S B2044	3	68
	S B2045	2.6	53
	S B2046	2.4	28
	S B2047	1.6	22
4区	S B2051	2.1	39
	S B2052	1.9	28
	S B2053	2	13
	S B2054	2	38
	S B2055	1.9	33
	S B2056	2.1	50
	S B2057	2.2	12
	S B2058	2.5	33
	S B2059	2.5	23
	S B2060	4.1	51
3群	S B2061	3.4	36
	S B2062	2.6	24
	S B2063	2.2	35
	S B2064	3.1	8
	S B2065	2.5	39
	S B2066	2.2	42
5区	S B2410	2.3	18
	S B2411	2.1	23
	S B2412	1.9	80
	S B2413	1.8	28
	S B2414	2.9	33
	S B2415	2.5	20
	S B2416	2	14
	S B2417	2.2	51
	S B2418	1.9	27
	S B2419	1.8	46
4区	S B2420	1.9	29
	S B2421	1.4	12
	S B2422	1.9	19
	S B2423	1.9	19
	S B2424	2.4	55
	S B2425	2.5	31
	S B2426	2.6	33
	S B2427	2.2	35
	S B2428	1.8	27
	S B2429	1.7	61
3群	S B2430	3.4	52
	S B2431	1.7	18
	S B2432	1.9	16
	S B2433	4.9	85
	S B2434	1.8	22
	S B2435	2.1	92
5区	S B2436	3.3	16
	S B2437	2.1	24
	S B2438	2.2	38
	S B2439	2.1	16
	S B2440	2.4	73
	S B2441	1.8	23
	S B2442	4.1	17
	S B2443	2	13
	S B2444	2	11
	S B2445	1.2	18
4区	S B2446	1.3	26
	S B2447	1.7	60
	S B2448	2.4	33
	S B2449	2	5
	S B2450	2.1	28
	S B2451	2.1	22
	S B2452	2	11
	S B2453	1.9	26
	S B2454	1.7	17
	S B2455	1.6	17
3群	S B2552	2.1	16
	S B2553	2.2	22
	S B2554	2.2	20
	S B2555	2.2	25
	S B2556	2.8	30
	S B2557	4.2	15
6区	S B2558	1.9	13
	S B2559	2.1	25

第19表 建物面積と桁行平均柱間寸法

4 b・c群では、4 b群に大型建物が1棟（S B2429）認められ、これに次ぐ50m²以上の建物は、4 b群・4 c群で1棟ずつ認められる（S B2424・2430）。建物跡の重複状況は、4 c群がS B2430とその東の建物で1回ずつ建替えがみられ、2棟の組合せによる2時期の変遷が考えられる。4 b群は、S B2424とほぼ同位置にある3棟（S B2425～2427）が他の4棟より建物面積が大きい。したがって、規模の大きなS B2424～2427とそれより小さな4棟が1棟ずつ組合う可能性が考えられる。S B2429は南西隅柱抜取穴から完形の土師質土器灯明皿が出土しており、第VII期に位置付けられる。

5群建物跡

5群には19棟の建物跡が存在する。これらは中央から北側の建物群（5 a群：S B2433～2441）と南側のS D2015区画溝跡内側の建物群（5 b群：2442～2451）に細分できる。大型建物は5 a群で2棟（S B2435・2440）、5 b群で1棟（S B2447）認められる。建物跡の重複をみると、5 a群は2棟（S B2438・2439）が重複するのを除いて全体的に散在するのに対し、5 b群はS B2442・2443・2451を除く8棟がS B2427近辺に集中する。S B2440は南東隅柱抜取穴の底面から手づくねかわらけ小皿が出土しており、第IV期に位置付けられる。一方、S B2445・2446は柱穴埋土から近世の焼瓦が出土しており、第VII期に位置付けられる。

6群建物跡

6群は、『II』で報告したB 2区南東部の建物群に含まれるもの（6 a群：S B1054～2556）とその南の建物群（6 b群：S B2557～2559）に細分できる。6 a群は建物面積が30m²以下の小型建物からなる。こうした点は『II』で報告した他の建物（S B1052・1053・1061・1062）と共に通しており、6 a群は屋敷Gの副屋と考えられる。6 b群は6 a群とS D1006・1007で画された南に位置する。このうち2棟（S B2557・2558）は内部に柱を持たない方形建物であり、他と異なる性格が想定される。

（3）屋敷の様相

中野高柳遺跡では、溝が方形もしくはそれに近い形にめぐって囲われた空間を形成している状況を、一つの区画として捉え、これまで7区画（区画A～G）を確認している（『I』～『III』）。今回、新たに5区で2区画、5区からD区で1区画、D区で1区画把握できたので、遺跡全体で11区画を確認したことになる（註5）（第20表）。ここでは、今回新たに確認した4区画を区画H～Kと呼称し、規模や年代を考える（図版244）。その後、建物跡など内部施設について検討する。以下の説明では、区画溝内部に建物や井戸などの諸施設が配置された総体を屋敷と呼称する。

a. 区画の概要と屋敷の構成

一区画H—（図版245）

区画Hは、5区の南端からD区北端に位置する。北辺はS D1494、西辺はS D1494・1756によって画されており、南辺は後世の擾乱によって壊されているものの部分的にS D2301を確認した。東辺は確認できなかった。区画溝の幅は2.5～3.4m、深さは0.9～1.2mである。区画の規模は南北52～61m、東西64m以上である。S D2364南北溝跡はS D2301と一連の遺構とみられることから、同溝は北へ延びて区画Hの東端を画する可能性がある。その場合、区画の東西は65mほどと推定される。区画

区画名	区画名	区画構成	反対側の幅	南北の幅	南北の深さ	屋敷の規模	道標期	年代	備考	規範書
屋敷A	S D1101 (西・北) - 1109 (南) * - 1106 (東)	1.2~2.5m	南北20m以上、東西32m	V	13C~14C					I
屋敷B	S D1230 (北・西) - 1239 (南) * - 1650 (南・東)	1.9~2.8m	南北101~108m、東西32m	V	15C~16C後半	南北は市教委1次調査区の東西廣の可能性有り(南北20~83m)	J・III・IV			
屋敷B'	S D1231 (北・西) - 1239 (南) * - 1650 (南・東)	2.0~2.8m	南北101~108m、東西32m	V	15C~16C後半			I・III・IV		
屋敷C	S D1105 A	2.1m	南北20m、東西25~33m	V	14C後半~15C前半	南北中央に土塁(S X1197)	I			
屋敷D	S D1208 (北・西・南) * - 1227 (南) * - 1600 (東)	2.0~2.8m	南北34m、東西32m	V	14C後半~15C前半	南北中央に土塁(S X1399)	I			
屋敷E	S D1108 B	2.8~2.7m	南北24m、東西25~33m	V	14C後半~15C前半					
屋敷F	S D1109 (北・西・南) * - 1106 (東)	2.0~2.9m	南北26m、東西27~32m	V	14C後半~15C前半	南北中央に土塁(S X1399)	I			
屋敷G	S D1102 (北・西・南) * - 1108 (東)	2.1m	南北26m、東西17~22m	V	14C後半~15C前半					
屋敷H	S D1275 (北) * - 1288 (南) * - 1633 A (西) ~南北(東)	2.0~3.0m	南北29m、東西69m	V	14C後半~15C			I・III・IV		
屋敷I	S D1275 (北) * - 1288 (南) * - 1633 B (西) ~南北(東)	2.0~3.0m	南北29m、東西69m	V	14C後半~15C			I・III・IV		
屋敷J	S D1589 (北) * - S X1600 A (南) * - 隣接(南)	2.5m	南北16m、東西20~27m	V	13C~14C			II・IV		
屋敷K	S D1561 (北) * - S X1600 B (南) * - 隣接(南)	2.5~2.7m	南北16m、東西20~27m	V	13C~14C			II・IV		
屋敷L	S D1104 (北・西) - 2301 (南) * - 2384 A (南)	2.0~3.4m	南北53~61m、東西65m?	V	14C後半~15C			IV		
屋敷M	S D1106 (北) * - 1828 (西) * - 2301 (南)	2.1~2.3m	南北81~85m、東西55m以上	V	14C後半~15C前半	南北中央に土塁(S X1902)	IV			
屋敷N	S D2063 (北) * - 2301 (南)	2.1~2.8m	南北10m、東西61m以上	V	14C後半~15C前半			IV		
屋敷O	S D2064 (北) * - 2301 (南)	2.1~2.9m	南北10m、東西61m以上	V	14C後半~15C前半			IV		
屋敷P	S D2065 (北) * - 2301 (南)	2.0~2.1m	南北10m、東西61m以上	V	14C後半~15C前半			IV		
屋敷Q	S D2165 (北) * - 2241 (南)	1.6~2.0m	南北96m、東西66m以上	V	14C~16C後半			IV		
屋敷R	S D2364 (東)	5.9m	南北20~41m、東西53m	V	17C後半~18C	北は屋敷F、西は屋敷F、南北道筋に開けられる	IV			
屋敷S	なし	?	?	V	17C後半~18C	南北道筋上の南側主屋、月戸が確認 道筋市場、主屋、付属建物、跡地を確認	III			
屋敷T	なし	?	?	V	17C後半~18C	南北道筋を確認	II			

各 区画面積のつづく()は、屋敷の東西南北の各辺を括る。()がない場合は、塗が四隅を塗る
各 区画面積の幅で()としたものは、新しい屋敷の区画面積の幅から推定した値である

各 屋敷の規模は、区画の内法で計算した

第20表 屋敷の規模と区画溝跡

Hは、SD1494・2301出土遺物から第VII期に位置付けられる。

〈屋敷の構成〉3群建物跡は区画Hの内部に位置することから、屋敷Hを構成する建物群と考えられる。その場合、屋敷H全体からみてやや西に片寄る。これらの中で中央や北側に位置する東西棟のSB2063・2065・2066が主屋、その南東の建物が副屋、主屋の北東が付属建物とみられ、それぞれ2~3時期の変遷が考えられる。主屋と東の副屋に囲まれた一画は広場的な空間とみられる。屋敷南東部の大型土壙のSK2303はゴミ穴とみられ、東西両端付近は遺構がほとんど認められないことから、畑などの耕作地として利用されていた可能性がある。

屋敷Hは、西に隣接する第VII期の屋敷跡である屋敷Fと比較すると、建物規模が小さく、建替え回数が少ない、建物以外の施設の数が少なく全体に散在する、区画溝からの遺物の出土量が少ない、といった相違点が認められる。こうした違いは屋敷居住者の階層や使用期間の違いを反映していると考えられる。

一区画K-(図版245)

区画KはD区南部に位置する。SD2015によって南・西・北辺が画されており、東辺は確認できなかった。区画溝の幅は0.7~0.9m、深さは0.3mである。区画の規模は南北約26m、東西39m以上である。区画Kは、内部に位置するSB2445・2446の年代から第VII期と考えられる。

〈屋敷の構成〉5b建物群は区画Kの内部に位置することから、屋敷Kを構成する建物群とみられる。大型建物のSB2447は主屋と考えられ、これに次ぐ規模でSB2447と重複するSB2448・2450も別時期の主屋の可能性がある。ほかに中・小型建物は、主屋の西で4棟、北で2棟、東に1棟認められる。建物以外の施設としては土壙1基が認められ、区画内部の井戸跡2基はこの屋敷に伴うとみられる。屋敷内部は、西側に較べて東側の遺構密度が低い。



図版245 屋敷F・H・K・Rの構成

屋敷Kは、第VII期の屋敷跡である屋敷F・F'・Hと比較して区画溝の規模が小さい、主屋の位置が南西隅に片寄る、遺物の出土量が少ない、といった違いが指摘できる。したがって、第VII期の屋敷はF・F'→H→Kの順に居住者の階層が低くなると考えられる。

また、屋敷Kの北には第VII期の井戸・土壙が分布している。SD2015は規模が小さく、掘り直しが認められないこと、付近に第VII期の建物がないことから、ある時期の屋敷Kがこれらを含む規模であった可能性がある。その場合、屋敷の境界を示す遺構は確認できなかった。

一区画 I・J (図版246)

区画 I・J は 5 区北東部に位置し、I → J へと変遷する。区画 I は南辺から西辺が SD1828、北辺は SD1466 によって画されており、東辺は確認できなかった。区画溝の幅は 2.3m、深さは 0.6~1.0m である。区画の規模は南北 81~85m、東西 4.6m 以上である。

区画 J は 5 区北東部に位置する。SD1829 によって南・西・北辺が画されており、東辺は確認できなかった。区画 I とは南辺と西辺の南側が一致しており、北東部は角にならず内側に入り込む。また、南辺には土橋 (SX1902) が設けられている。区画溝の幅は 2.1~2.8m、深さは 0.6~0.9m である。区画の規模は南北 39~4.1m、東西 45m 以上で、西端部の南北は 2.6~40m である。SX1902 土橋跡は、南辺の中央となる可能性があり、その場合、区画の東西は 60m ほどと推定される。SD1466・1828・1829 は第 IV 期の造構より新しく、第 VII 期より古いことから、区画 I・J は第 V 期～第 VI 期とみられる (註 6)。

〈屋敷の構成〉 1 群建物跡は区画 I・J の内部に位置することから、屋敷 I・J を構成する建物群と考えられる。SB2035 の柱穴埋土からは、銭貨「至大通寶」(初鑄 1310 年) が出土しており、前述の年代観と矛盾しない。本遺跡で 3m 前後の区画溝で囲まれる屋敷は、中央に主屋、主屋の南東や南西、もしくは片方に副屋が設けられている。こうした視点で屋敷 J をみると、SX1902 の北に位置する東西棟の大型建物 4 棟 (SB2035・2037・2041・2042) が主屋、西から南西の 3 棟 (SB2043・2045・2047) と東の 3 棟 (SB2038~2040) が副屋もしくは付属建物、北東の 3 棟 (SB2031~2033) が付属建物と考えられ、それぞれ 3~4 時期の変遷が考えられる。

屋敷 I の建物は、屋敷 J の主屋と重複する 3 棟の南北棟 (SB2034・2042・2044) が副屋となる可能性がある。主屋については屋敷北半部が削平されているため、失われたとみられる。また、SD1829 北側の井戸跡 7 基 (SE1453・1455・1457・1459・1461・1463・1464)、大型土壙 SK1454 は屋敷 I に属すとみられる。SK1454 の年代は 15 世紀後半であり、第 V 期の年代観の一端を示すと考えられる。

このほか、1 群建物跡南の井戸跡 4 基 (SE1825・1863・1897・1898)、大型土壙 1 基 (SK2609) は屋敷 I もしくは屋敷 J に属すとみられる。

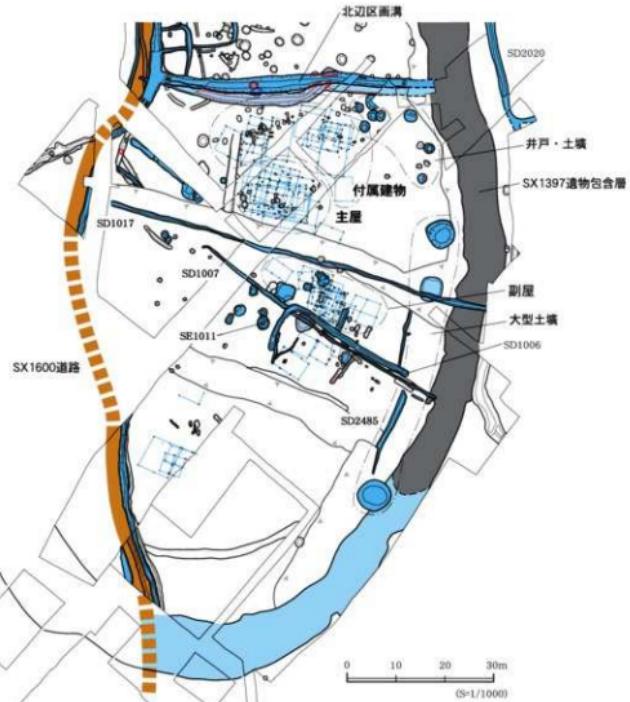


図版246 屋敷 I・J の構成

一区画G・G' - (図版247)

区画G・G'は、遺跡南部のB2区からB3区に位置する第IV期の屋敷跡である。東はSX1397が形成された湿地跡、西はSX1600南北道路跡に面し、北はSX1397とSX1600東側溝を結ぶSD1500・1501・1572によって画されている。北辺の区画溝の幅は2.5m前後、深さは0.6~0.8mである。南は『II』で部分的に確認したSD1040で画されるとみたが、その後の調査で新知見が得られた。

SD1006は東西27.9m、南北10.9mのL字形をした溝跡で、東端の2.7m南には第IV期の遺構でSD1006と同規模のSD2485が南へ18.5m延びている。両者は南北方向がほぼ同じであることから同時期とみられる。その場合、SD2485は区画G・G'の南限とみたSD1040のさらに南へ延びることとなる。また、SD2485の南には大型土壙のSK2475が位置し、年代は14世紀中葉～後葉と考えられ、区画G・G'の屋敷の年代観(13~14世紀代)の中に収まる。したがって、区画G・G'の範囲は当初考えていたSD1040ではなく、SX1600とSX1397が形成された湿地跡の交点まで約55m南へ延びるとみられる。区画G・G'は南半部がすぼまる形をしており、規模は南北約108m、東西は北半部で60~75mである。



図版247 屋敷G・G' の構成

〈屋敷の構成〉 6群建物跡は区画G・G'の内部に位置することから、屋敷G・G'を構成する建物群と考えられる。6a群は『II』で報告したB2区南東部の建物群に属し、屋敷の副屋と考えられる。6b群は6a群とSD1006やSD1007で画された南に位置し、うち2棟は内部に柱を持たない方形建物であることから、他と異なる性格が想定される。屋敷G・G'は、『II』と市教委4次調査区、それに今回報告した部分を加えると、ほぼ全体について調査したことになる。以下、過去の調査成果を含めて屋敷G・G'の施設構成を概観する。

北半部の建物は中央北側に主屋、南東に副屋が配置される。主屋の南正面や南西は、建物が1棟のみで、井戸など他の遺構もまばらに分布することから広場的な空間と考えられる。主屋は東西棟が主体であり、他の建物に較べて大型で縁や廂をもつ傾向が認められる。これに対し、副屋は建物面積が20m²以下の小型建物が多い。主屋北側の建物は厨や倉庫、納屋、作業小屋といった主屋に付属する建物と考えられる。これらの建物は、ほぼ同位置で建て替えを繰り返している。

今回新たに確認した6b建物群は、副屋とSD1006・1007で隔てられた南に位置し、うち2棟(SB2557・2558)は内部に柱を持たない方形建物である。前述したようにSD1006・2485は同時期とみられ、6b建物群は両者によって西・北・東の三方を囲まれた区域の西側に位置することとなる。3棟の建物のうち2棟が方形であることから、この区域は副屋とは別の機能を持った空間であると考えられる(註7)。

SD1017は主屋の南を東西に横断する溝跡で、方向はE10°～20°Sである。SD1007は副屋の前を東西に横断する溝跡で、方向はE30°～40°Sである。双方ともSX1397より新しい。屋敷G・G'の建物は新しい時期に東への角度が大きくなることが指摘されている(『II』)。また、SD1007は13世紀のSK1008より新しく、14世紀前半のSD1006とは新旧関係は古いが、方向はほぼ同じである。したがって、屋敷G・G'を細分する東西溝はSD1017→SD1007へと変遷し、前者は主屋と副屋・広場、後者は主屋・副屋と広場とを隔てていたと考えられる。

井戸は広場や主屋の西、区画北東部に作られている。なかでも側を有し、構造的に他と異なる井戸(S E1011)が広場に設けられたことは、広場や前述した三方を溝で囲まれる空間の機能とかかわっていたと考えられる。ゴミ穴とみられる中・大型土壙は区画周縁部に位置するものが多い。さらに湿地跡からも焼土や灰・炭化物・植物遺体とともに遺物が多く出土することから、区画東縁部周辺はゴミ捨て場として長期間利用されていたと考えられる。

区画の南半部は、西端のSX1600道路沿いに建物が4棟重複し、東端にゴミ穴とみられる大型土壙が1基認められるのみで、北半部に較べて遺構密度は非常に低い。こうした広い空閑地は、畠や馬場として利用されていた可能性が考えられる。

屋敷の基本的な構成要素である建物・広場・井戸・ゴミ穴の配置状況は、第V期の屋敷B・B'、第VI期の屋敷C・Eと同じである。したがって、屋敷内の場の使い方は、固定的であるとともに、中世をとおして変わらなかったといえる。

b. その他の屋敷

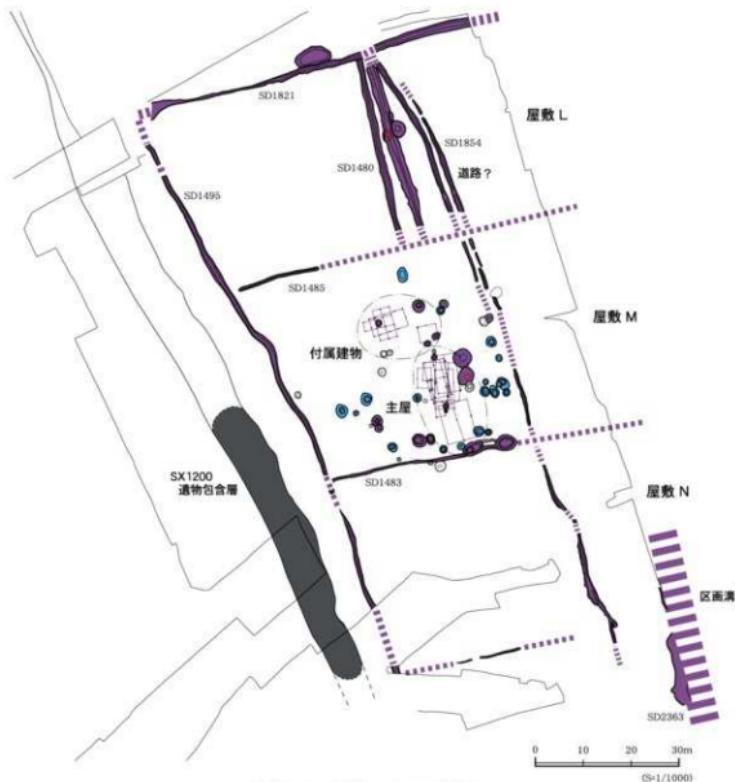
ここでは、溝による空間形成が区画A～Kほど明瞭でなかった区画について、規模や大別遺構期へ

の位置付けを行ったのち、屋敷の施設構成を検討する。

一区画 L・M・N・O・P- (図版248・249)

S D 1495・2020は、S X1397が形成された湿地跡の東岸に沿って延びる南北溝跡で、検出総長は約260mである。上幅0.7~1.6m、深さは0.6~0.7mあり、5区で3時期、D区で2時期の変遷が認められる。また、市教委5次調査区の成果からS D1821溝跡と一連の遺構とみられ、東西長は70m以上である。遺構の重複関係や出土遺物から第Ⅲ~Ⅳ期の遺構と考えられる。

図版247をみると、S D1495・2020の東にはS D1821と同じ方向をとる東西溝跡を4条確認できる。北から**S D 1485・1483**と**市教委2次調査区の溝跡・S D 2247**である。これらはほぼ等間隔(41~44m)で並んでおり、遺構の重複関係や出土遺物からみても第Ⅲ~Ⅳ期とみて矛盾はない。S D2020の南への延びは不明であるが、D区南端では東西溝跡のS D2334が一連の遺構とみられる。また、D



図版248 屋敷 L・M・Nの構成

区東端では同時期の遺構として幅が2.5m以上のSD2363南北区画溝跡を検出している。したがって、第Ⅲ～Ⅳ期の遺跡東側は、SX1200・1397が形成された湿地跡の東岸に沿つてSD1495・2020が南北に延び、5区北部とD南端で東へ折れて東端の南北区画溝SD2363に接続するとみられる。規模は南北約270m、東西がD区で約60mであり、5区は60～70mとみられる。

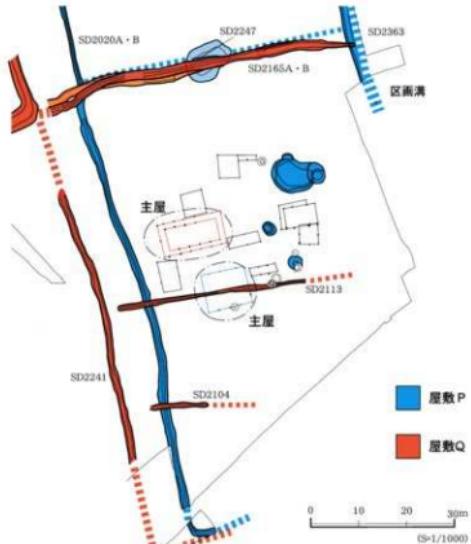
内部は4条の東西溝で5つに細分される。北の4区画はほぼ等間隔(南北41～45m)に分割されており、南端はそれらの2倍の広さ(南北約96m)をもつ。これらを北から区画L～M・N・O・Pと呼称する。また、区画L・Mでは0.8～1.5m離れて併行する南北溝跡(SD1853・1854)

を確認しており、検出総長はSD1853が50.1m、SD1854は56.0mである。これらは第Ⅲ～Ⅳ期の道路側溝の可能性が考えられる。さらに、SD1854の南延長上にはSD1776が認められ、両者が一連の遺構である可能性がある。その場合、推定道路跡は区画Nまで認められることになる。

次に区画L～Pの出土遺物をみてみると、北側の3区画(L～N)は常滑産陶器に較べて在地産陶器の出土が少なく、これに対して南の2区画(O・P)は、常滑産とともに在地産が安定して認められる。また、SD1495は3時期の変遷が認められるが、SD2020は2時期の変遷である。したがって、第Ⅲ期は北側の3区画が整備・利用され、13世紀以降、新たに南の2区画が付け足された可能性が考えられる。遺物包含層が第Ⅲ期は遺跡北部(SX1200)、第Ⅳ期は遺跡南部(SX1397)に形成されることもこうした考えを裏付けるものといえる^(註8)。

〈屋敷の構成〉区画L～Pは第V～VII期の遺構と重複しているため、内部施設の残りがよいのは区画Mである。**屋敷M**には2群建物跡が位置する。10棟の建物跡は南と北の2箇所に分かれ、前者は主屋とみられる南北棟建物跡(SB2056・2060)を含めて7棟が重複し、後者は2棟が重複する。上述した推定南北道路跡を屋敷の東限とみた場合、東西幅は43m前後となり、建物はほぼ中央の南北に位置する。これらの周辺には第Ⅲ～Ⅳ期の井戸跡(SE1769・1772・1789・1790・1890)や土壙(SK1761・1762・1773・1880・1883)が5基ずつ認められる。

屋敷Lには第Ⅲ～Ⅳ期のSD1840・1845南北溝跡があり、これらは内部を細分する溝とみられる。



図版249 屋敷P・Qの構成

その場合、S D1495とS D1840間は東西37~45mである。内部の施設は西半が屋敷に伴う遺構は認められない。東半は屋敷Jと重複するため、特定が困難である。

屋敷Pは他と較べて2倍の広さを有する。5a群建物跡はその内部に位置し、大型建物のS B2440は出土遺物から第IV期であり、ある時期の主屋と考えられる。S B2440は区画中央西よりに位置し、その東から北側には第IV期の土壙が4基（SK2183・2185・2209・2213）認められる。周辺には5a群の8棟の建物跡が散在するが、屋敷Qと重複するため両者の識別はできなかった。

屋敷Pは、建物跡の重複がほとんどなく、同時期の屋敷G・G'のように主屋・副屋・付属建物がほぼ同位置で建て替えを繰り返し、その配置が固定的かつ継続的であったあたりとは明らかに異なる。屋敷Pと屋敷G・G'の間にはS X1397遺物包含層が位置するが、遺物は西側（=屋敷G・G'側）から多く出土している。両者を比較すると、屋敷Pは区画溝の規模が小さい、主屋の位置が片寄る、建物の建て替えが少ない、遺物の出土量が少ないという点が指摘でき、こうした違いは居住者の階層の違いを示すと考えられる。

屋敷N・Oは、後者の南東部で大型土壙（SK2300）が認められるほかは、屋敷H・Rと重複するため、内部施設の特定はできない。

一区画Q-（図版249）

S D2165は東西溝跡で、検出長は約66mである。2時期（A→B）の変遷があり、B期の上幅は1.6~2.0m、深さは0.6mある。A期は上幅や下幅はB期と同じとみられるが、深さは0.1mと浅い。S D2241はS X1397が形成された湿地跡の中央部に設けられた南北溝跡で、検出総長は232.1m、B2区北東部やB3区南東部では東へ分岐している。上幅は1.2~2.0m、深さは0.6~0.9mある。両者は第IV期の遺構より新しく、第VII期より古い。

ここでS D2165・2241をみると、前者を西へ、後者を北へ延ばすと屋敷Bの区画溝SD1650の南東コーナーに到ること、両者とも第IV期の遺構より新しいことから**第V期**の遺構とみられる。SD2241はB2区北東部で東へ分岐しているため、北をSD2165、西や南をSD2241に囲まれ、北西コーナーは屋敷Bの南東隅と接する区画が考えられる。規模は東西66m以上、南北は約96mあり、これを**区画Q**と呼ぶ。区画Qは第IV期の区画Pとほぼ同位置で重複する。また、SD2104・2113東西溝跡は第IV期のSD2020やS X1397より新しいことから、区画Qを細分する溝の可能性がある。その場合、細分された小区画の南北長は北から46m・21m・29mほどとなる。

5a群建物跡は屋敷Qの内部に位置することから、屋敷Qを構成する施設と考えられる。なかでも大型建物のS B2435はある時期の主屋の可能性がある。S B2435は屋敷Qの南北のほぼ中央にあるが、東西の中心からは西に片寄る。こうした主屋の占地は屋敷Pと共に通する。周辺には5a群の7棟の建物跡が散在するが、主屋以外の建物については重複する屋敷Pの建物との識別ができない。屋敷Qは同時期の屋敷B・B'を比較すると、区画溝の規模が小さい、主屋の位置が片寄る、建物の建て替えが少ないという特徴が指摘できる。こうした状況は前代の屋敷G・G'と屋敷Pの関係と同じである。

一区画R-（図版245）

4群建物跡に属するS B2412・2417は柱穴埋土から近世陶磁器が、S B2429は南西隅柱抜取穴から

完形の土師質土器灯明皿が出土しており、第VII期に位置付けられる。また、建物群の周辺に分布する遺構の大部分（井戸跡19基、土壙21基、溝跡4条）が第VII期のものであるため、4群建物跡は第VII期に位置付けられる。これらの遺構は、西が区画Fの東辺であるSD1633、北は区画Hの南辺のSD2301、東は第VII期のSD2364区画溝跡で囲まれている。また、南は一部重複する遺構があるものの、SD2150・2195を側溝とする東西道路跡によって囲まれた区域に集中する。その規模は東西約63m、南北30~41mあり、これを区画Rと呼称する。

（屋敷の構成） 4群には22棟の建物跡が存在し、北側の10棟（4a群）、南西の8棟（4b群）と南東の4棟（4c群）に細分できる。4a群では大型の3棟が重複せず、東西に並ぶ。他の7棟はこれら3棟の建物跡と重複するが、中・小型建物跡どうしの重複は2棟を除いて認められない。4b・c群は大型建物が4b群に1棟認められ、これに次ぐ大型の建物は、b群・c群で1棟ずつ認められる。これら3棟は、細別建物群の中心建物と考えられる。4c群は中心建物とその東の建物で1回ずつの建替えがみられ、2棟の組合せによる2時期の変遷が考えられる。4b群は、SB2424とほぼ同位置にある大型の4棟（SB2424~2427）とそれより小さな4棟が1棟ずつ組合う可能性が考えられる。したがって、3つに細分された建物群は、それぞれ大型の建物1棟と中・小型建物1~2棟がセットとなる組み合わせが考えられる。

なお、屋敷Rは第IV期の屋敷O・P、第V期の屋敷Qと重複する。このため、4群建物跡のなかには屋敷O・P・Qに帰属するものがある可能性が考えられる。

屋敷Rは、敷地の制約から井戸や中・小型土壙の多くが建物に近接してつくられるが、5a群北側とSD2301区画溝跡との間には認められない。こうした状況は幅3mの区画溝で囲まれた建物群とは様相が全く異なる。先に第VII期の区画溝を伴う屋敷について区画や溝の規模、建物の規模や配置、出土遺物の内容や量から階層性を指摘したが、屋敷Rの居住者は屋敷Kのさらに下層の階級と考えられる。

（4）黒漆二枚居木鞍について（図版250）

今回報告する遺物の中で特筆すべきものは、黒色漆塗りの鞍である。屋敷G・G'にともなうSX1397遺物包含層の下層から出土した。東北地方における中世の鞍の出土例は、管見では岩手県志羅山遺跡74SE3井戸跡から出土した後輪と推定されるもの（12世紀後半）（岩手県埋蔵文化財センター2000）と山形県東屋敷遺跡KY1堀跡から出土した居木（15世紀後半~16世紀後半頃）（米沢市教育委員会1998）の2例を知り得たにすぎず、出土例はきわめて少ない。

狭義の鞍は、人が騎乗する部分の鞍橋を指し、前後の板2枚（前輪・後輪）とそれらを繋ぐ2枚もしくは4枚の板（居木）で構成される。今回出土したのは逆U字形の前輪部分で、高さ28.0cm、幅30.8cm、厚さは1.7~4.0cmある。焼けて右の先端（爪先）付近が欠けており、漆は一部に残るのみとなっている。日本の鞍は、構造から唐鞍と和鞍に大別される（馬事文化財団1979）が、出土品は居木を装着する切り込み（切組）が認められることから、和鞍に分類される。古代から中世の和鞍は、平安時代後期に出現した中世鞍とそれまでの古代鞍とに分けられ、その変遷過程は小松大秀氏によって

以下の3段階に整理されている（小松大秀1984・1990）（註9）。

A段階 ①前輪・後輪の周縁が覆輪状に造り出される

②前輪・後輪の内側が平滑に仕上げられる

③居木は四枚居木あるいは幅の広い二枚居木である

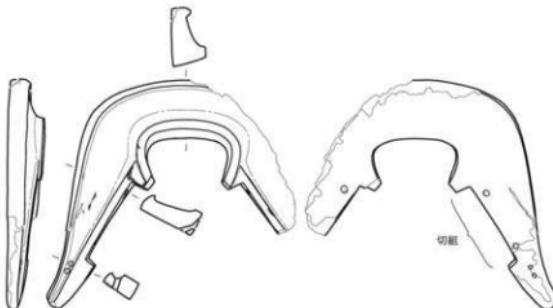
B段階 ④前輪と後輪の周縁は、洲浜形・馬膚側（＝馬側）が厚く、山形側（＝外側）は薄く造られており、両者の境界は稜線で区切られる。前者は「磯」、後者は「海」と称し、海有鞍と呼ばれる

⑤前輪の肩に切り込み（手形）は認められない

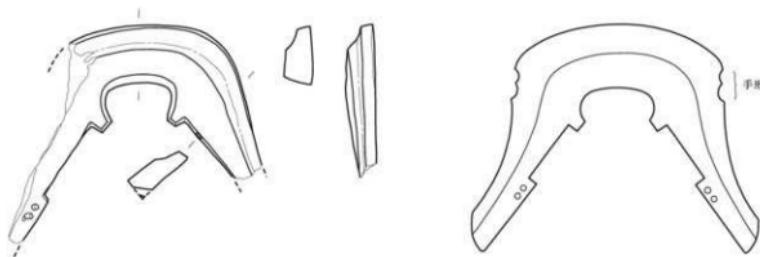
⑥居木は二枚居木である

C段階 ⑦④と同じ

⑧前輪の両肩に手形が認められる



A段階：古代鞍（中野高柳遺跡）



B段階：古代鞍と中世鞍の中間的様相（みやこ遺跡）

C段階：中世鞍（靖国神社所蔵品）

※みやこ遺跡は発掘調査報告書、靖国神社所蔵品は小松大秀1984の図を再トレス

図版250 鞍の変遷

③主要な装飾として螺钿を用いる

A段階の覆輪を持つ海無鞍は**古代鞍**、C段階の手形を持つ海有鞍が**中世鞍**の特徴とされ、B段階の手形のない海有鞍が両者の中間的な様相を示している。こうした視点で中野高柳の前輪をみると、周縁が隆状に造り出される（＝覆輪状に造り出される）、内側は平滑である、両肩に手形が認められない、居木は幅の広い**二枚居木**である、「鞍」をとおす孔の位置が先端部（爪先）に近い、という特徴が指摘でき、出土品は古代鞍の特徴を持つといえる。小松分類のD類=黒漆二枚居木鞍にあたる（小松大秀1984）。

実用品としての鞍は、馬の乗降時に山形を掴んで体を支えることから、大きな力がかかるため破損し易く、消耗品と考えられる。したがって製作年代と廃棄年代との間に大きな差はないと思われる。本遺跡から出土した鞍（前輪）の年代は、共伴する土器・陶磁器・漆椀から13世紀前半～中頃と考えられる。鞍の出土例は全国的にみても数がきわめて少ない。中野高柳遺跡から出土した鞍（前輪）は、伝世品を中心とした鞍の編年に具体的な年代を与える貴重な資料といえる^(註10)。

E. 中野高柳遺跡における遺構の変遷

これまでの発掘調査で検出された遺構を含め、中野高柳遺跡全体の遺構変遷について概要を述べる。遺跡は平安時代中頃の耕作地としての利用から始まり、同時代末期以降は近代にいたるまでほぼ継続的に集落が営まれる。集落は、同時期に機能した溝や道路等で囲まれた複数の屋敷で構成される。

【第Ⅰ期】（図版251）

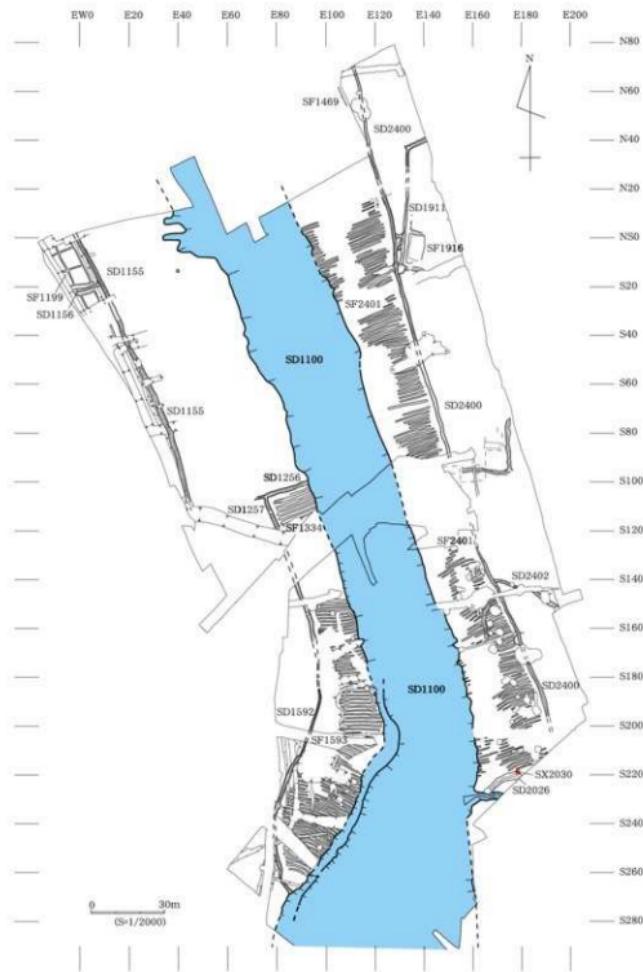
基本層序第VII層上面で確認した遺構である。年代は10世紀前葉と考えられる。北部から中央部のSD1100河川跡両岸の自然堤防は畑、外側の自然堤防縁辺から後背湿地は水田として利用されている。河川右岸はSF1334・1593畑跡、左岸はSF2401畑跡で、両者とも河川とコ字形に接続する溝で三方を区画されている。畠は河川や区画溝の際まで認められ、方向は河川の向きにほぼ直交する。耕作域はSF1334・1593が東西16～32m、南北約170mで、面積は約4,100m²、SF2401は東西25～30m、南北約297mで、面積は8,200m²である。

次にSF1334北側に目を向けてみたい。この区域は耕作痕が確認できなかったが、畠区画溝であるSD1256は、北東コーナーから南へ折れるSD1592のほかに西へ延びるSD1257に分かれる。後者の西にはSD1155南北水路が認められる。したがって、SF1334北側に東が河川、西と南はSD1155・1257によって囲まれた区画が想定される。同じ場所は第Ⅱ期に畑（SF1303）として利用されていることを考えると、遺構は確認できなかったが、この場所に第Ⅰ期の畠が営まれた可能性がある。

水田は右岸がSF1199、左岸はSF1916で、自然堤防の縁辺部に設けた溝で画される。方向は前者が畠と同じで、後者は畠とは異なり、東へ傾斜する。水田1枚の規模はSF1199が一辺6.0～7.5m、SF1916が一辺12.0m×7.3m以上で、小さな区画に分割されている。

畑跡は、畠間の下層に灰白色火山灰の一次堆積が認められることから、灰白色火山灰の降灰で廃絶したと考えられる。SF2401南端の区画溝では、火山灰降下後の凹地から土器食器22個体が重なって出土（SX2030）しており、祭祀もしくは飲食儀礼に用いられた食器が、使用後置かれた跡と考えら

れる。一方、西側の水田跡は耕作土と火山灰層との間に間層が認められることから、火山灰の降下時に耕作を行っていなかったと考えられる。その後、第V層の遺構は河川の氾濫によって埋没する（第V層）。



図版251 第I期の遺構

【第Ⅱ期】(図版252)

基本層序第V層上面で確認した遺構である。年代は10世紀中葉と考えられる。北部から中央部のSD1100河川跡右岸の自然堤防が畑(SF1303畑跡、SF1333畑跡)として利用され、左岸は自然堤防緑辺部でSF1919畑跡が発見されている。SF1303・1333は第Ⅰ期と同じく区画溝が巡り、畠は河川や区画溝の際に認められ、方向は河川の向きに直交する。一方、SF1919は畠の方向が河川とは直交せず、前代のSF1916水田跡と同じである。耕作域の面積はSF1303が東西53~55m、南北約122mで、面積は6,600m²以上、SF1333は東西約40m、南北55m以上で、面積は2,200m²以上、SF1916は東西8.1m、南北8.9mで、面積は72m²以上である。

河川右岸のSF1333は、第Ⅰ期のSF1334と耕作域が重複する。その北のSF1303も第Ⅰ期の耕作域と重複するとみられる。これに対し、左岸のSF1919周辺は水田耕作域だったところであり、前代とは異なる土地の利用が行われた。SF1303はSD1151東西溝跡によって南北に細分される。また、SF1303は広い畠間と狭い畠間が交互に認められ、他の畑とは異なる作物が栽培されていたと考えられる。



図版252 第Ⅱ期の遺構

S F 1303・1333は河川側が壊され第IV層で覆われる。また、畠区画溝は河川や溝相互の接続部を中心とした箇所が認められる。こうしたことから、第II期の遺構は河川の氾濫によって埋没したと考えられる。とくに河川跡とS D1151区画溝跡の接続部は大きく壊れ(S X1154)、第IV層堆積後の凹地から焼土や炭化物とともに土器が出土しており、祭祀もしくは飲食儀礼に使われた土器が廃棄されたものとみられる。

S X1154の出土土器は、S X2030と器形・調整技法に違いは認められない。したがって、第I期の災害からは比較的早く復旧し、第II期の遺構がつくられたが、再び起きた洪水で廃絶したと考えられる。

【第III期】(図版253)

遺跡北東部に屋敷がつくる。年代は12世紀と考えられ、第II期の終末とは1世紀半以上のブランクがある。第III期以降は遺跡内に様々な屋敷が構えられるようになり、古代とは土地利用のあり方が全く異なる。



図版253 第III期の遺構

第Ⅰ～Ⅱ期の河川は、10世紀中葉の洪水によって埋没し、中央部分が湿地化する。湿地跡左岸北部には、幅1mほどの溝で画された屋敷L～Nがつくられる。全体の規模は南北約128m、東西が70m以上で、内部は東西溝によってほぼ等間隔(41～45m)に分割される。それぞれの区画には建物・井戸・土壙などの施設が配置されたとみられ、湿地には遺物包含層(S X1200)が形成される。遺物包含層の花粉分析の結果によると、第Ⅲ期の屋敷の周りには森林と呼べるものはなく、数種類の樹木が点在する光景が復元されている。

屋敷内部や遺物包含層から出土した土器・陶磁器の構成は、当時の政治的・宗教的・経済的中心地であった平泉に特徴的に認められるものである。また、遺物包含層から出土した鉄地銅象嵌巻の製作技法は平泉と共通しており、同地で製作されたものと考えられる。したがって、屋敷の主は平泉藤原氏とかかわりを持った多賀国府の在庁官人クラスの有力者とみられる。

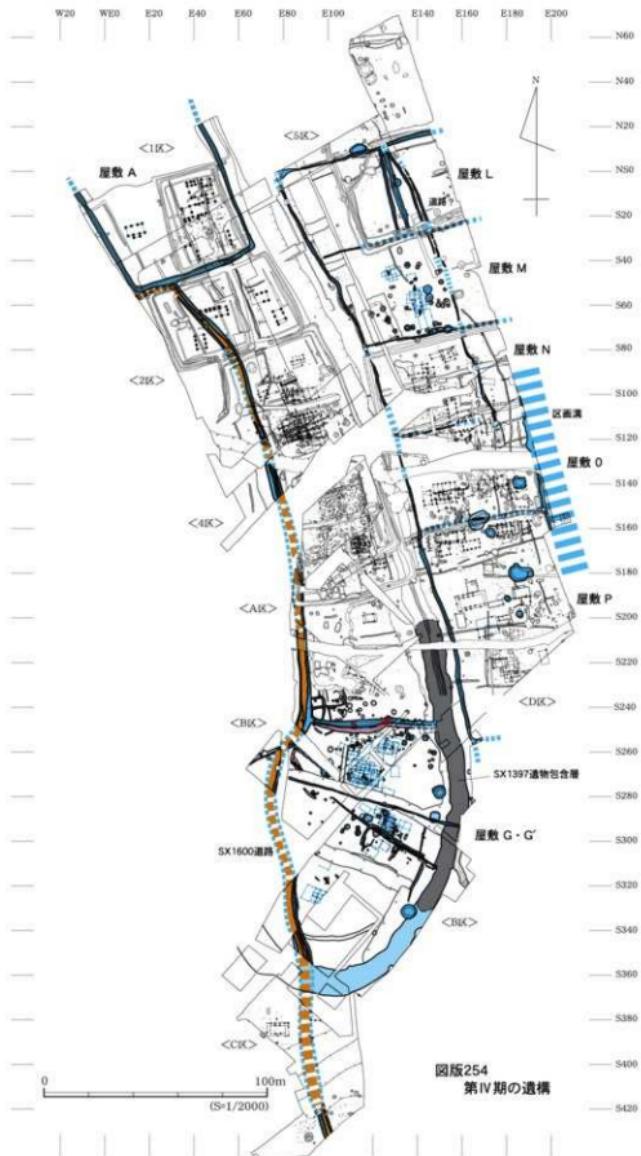
【第IV期】(図版254)

遺跡が最も整備された時期で、全体に遺構が認められる。年代は13～14世紀と考えられる。湿地右岸の南北に屋敷A・Gがつくられ、両者は自然堤防西縁を南北に延びるS X1600道路でつながる。

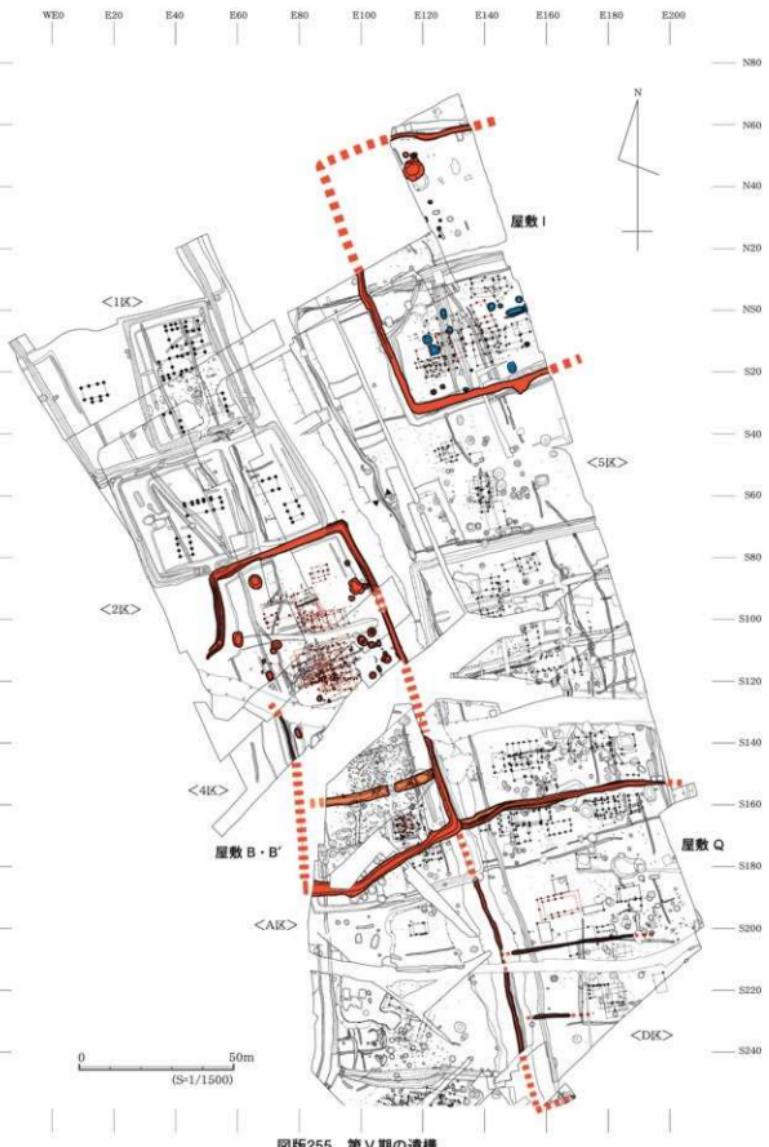
屋敷A・Gは幅が3mほどの溝で区画されている。平面形や規模は前者が方形で東西55～61m、南北59m以上、後者は北半が方形で南はすぼまる形をしており、規模は南北約108m、東西は北半で60～75mである。屋敷Gはほぼ全域を調査しており、内部の施設構成が具体的に検討できた。北半部は主屋を中心として前庭・副屋・北の付属建物といった建物や施設が配置され、区画の縁辺には井戸やゴミ穴とみられる大型土壙が分布する。このような主要施設の構成は、第V期以降の屋敷にも継承されており、屋敷内の場の使われ方は、固定的かつ継続的であったと考えられる。また、副屋南の三方を溝で囲まれた一角には、内部に柱を持たない方形建物が認められることから、特別な空間であった可能性が考えられる。こうした屋敷北半部のあり方に対し南半部は施設密度が極端に低い。

一方、湿地左岸は前代につくられた屋敷L～Nの南に新たにO・Pが付設される。区画溝の幅は1mほどである。屋敷Pの建物は西に片寄り、全体に散在する。屋敷Gのように主屋・副屋・付属建物がほぼ同位置で建て替えを繰り返し、その配置が固定的かつ継続的であったあり方とは明らかに異なる。また、屋敷GとPの間に位置する遺物包含層(S X1397)の出土傾向は、西側(=屋敷G側)から多く出土している。両者の違いは居住者の階層の違いを示しており、湿地の西に有力者の屋敷、東はその家臣や従者などの住まいとみられる。こうした屋敷を取り巻く環境は、遺物包含層の花粉分析の結果によると、前代と同じく周囲には森林と呼べるものはなく、数種類の樹木が点在していた。

新たに付設された屋敷O・Pは、北のL～Nに較べて遺物の出土量が多く、常滑産陶器とともに在地産陶器が安定して認められる。なかでも南端の屋敷Pの敷地面積は他の2倍あることから、湿地東側の屋敷群の中では、有力者の屋敷に近い屋敷Pの居住者の階層が高いとみられる。これに対し、湿地西側の屋敷AとG、S X1600道路に囲まれた区域は、東側と地形的な条件は同じであるのに、明確な遺構は認められない。このことは、集落内部の空間利用に明確な規制があったことを示すと考えられる。畠や馬場として利用された可能性を考えておきたい。



図版254
第IV期の遺構



図版255 第V期の遺構

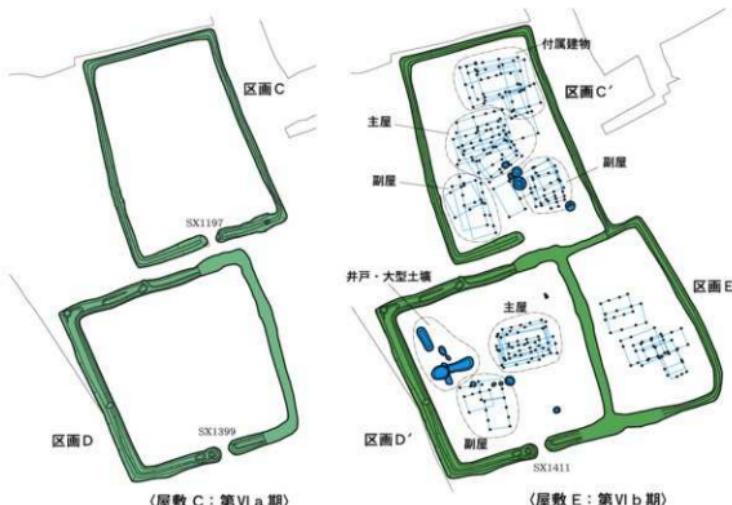
【第V期】（図版255）

幅3mの溝で囲まれる有力者の屋敷は、遺跡西側中央部（屋敷B・B'）と北東部（屋敷I）で認められる。年代は15世紀～16世紀後半とみられる。屋敷B・B'の平面形は西辺の一部が西へ張り出す長方形で、規模は南北101～108m、東西約43mである。中央に主屋、その北に付属建物が配され、周縁に井戸や大型土壌が分布しており、主要な施設の構成は屋敷G・G'とほぼ同じである。また、市教委1次調査区で中央に土橋をもつ東西溝跡が確認されている。位置からみて屋敷B・B'のある時期の南辺とみられ、第V期から屋敷の南正面に土橋が採用されたと考えられる。屋敷B・B'の南東に位置する屋敷Qは、前代の屋敷Pとほぼ同位置、同規模で、建物は西に片寄り、全体に散在するといった傾向も同じである。

S D 2241は屋敷B・B'の区画溝南東コーナーから南へ派生し、屋敷Qの西を画しつつさらに南へ延びている。区画溝の排水という機能とともに南に想定される水田への用水路としての機能を有していたと考えられる。また、屋敷Iは幅3mの区画溝が巡る屋敷として初めて遺跡東側につくられる。平面形は長方形で規模は東西45m以上、南北81～85mで、屋敷B・B'より小さい。第V期は遺跡中央部から北部に遺構は認められるが、遺跡南部に屋敷は當まらず、前代に較べて遺跡内の使う場所が縮小する。

【第VI期】（図版256・257）

遺跡北部の東西に幅3mの溝で囲まれた屋敷が認められるのみで、遺跡内の空間利用が最も縮小する。西側は区画C・Dで構成される屋敷Cから新たに区画Eが付け足される屋敷Eに変遷する。東側



※ 内部施設はa・b期への特定ができないため、b期でまとめて示した

図版256 屋敷C・Eの構成



図版257 第VI期の遺構

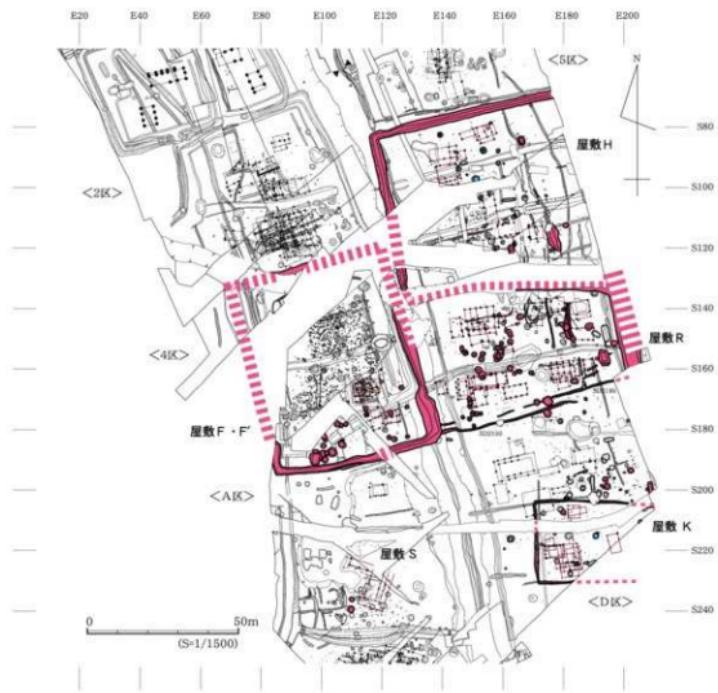
は屋敷Jが営まれる。年代は出土遺物がきわめて少ないため、前後の遺構期の年代観から16世紀後半から17世紀前半とみられる。区画の規模や平面形は、Cが南北39~40m、東西24~29mの長方形、Dは一辺が32~35mの方形、Eは南北35~38m、東西16~21mの長方形、Jは南北39~41m、東西45m以上の方形で北西隅が内側に入り込む。

屋敷C・Eは、本遺跡で初めて複数の区画で構成されるが個々の規模が小さく、大きい方の屋敷Eでも一つの区画からなる第IV期の屋敷G・G'、第V期の屋敷B・B'より小さい。また、屋敷Jは前代の屋敷Iの1/2以下に縮小している。こうした遺跡内の使用空間や屋敷の縮小、出土遺物がほとんどない点は、屋敷居住層の力が前代よりさらに縮小したことを示すと考えられる。

【第VII期】（図版258）

遺跡中央部の東西に幅3mの溝で囲まれた屋敷F・F'・H、南東部では幅1mの溝で囲まれた屋敷Kが認められる。また、F・F'の東には三方を区画溝、南を道路で囲まれた屋敷Rがあり、内部はさらに細分されるとみられる。年代は17世紀後半~19世紀である。屋敷の規模や平面形は、F・F'が南北約59m、東西約48mの方形、Hは南北52~61m、東西65m以上の方形、Rが南北30~41m、東西約63mの方形、Kが南北約26m、東西39m以上の方形である。

これらは屋敷や区画溝の規模、内部の建物構成とその重複状況、出土遺物に違いが認められ、屋敷F・F'→H→K→Rという階層性が指摘できる。屋敷F・F'の居住者は、出土遺物に高級品や奢侈品がきわめて少なく、日常雑器が主体を占めることから、有力農民層（豪農）とみられる。近世の



図版258 第VII期の遺構

農民は經營規模に階層性があることが指摘されており、前述した屋敷の階層性はこれを反映したものと考えられる。仙台藩領の近世農村の代表的な光景は、居久根林に包まれた大きな農家であるが、幅の広い溝で囲まれた屋敷F・F'・Hはこうした居久根林を持つ農家と考えられる。また、細分された屋敷Rは有力農民に隸属した名子や水呑の屋敷、もしくは借家とみられる。

第VII期の屋敷は、これら以外に遺跡北東部や南部でも認められ、南端では四面に庵もしくは縁を持つ東西棟の南に井戸、北に墓が検出されている（屋敷T）。第VII期は北西部を除いた区域で遺構が認められるが、継続して使われたのは中央部の屋敷Fと屋敷Rである。

以上、中野高柳遺跡で発見された遺構について概略を述べた。本遺跡の発掘は仙台市教育委員会の分を含めると11年にわたり、その結果、遺跡の約91%が調査されたことになった。

遺跡の利用は平安時代中期に始まる。この時期は遺跡の北部から中央部に畠や水田が営まれた。畠の面積は、第I期が12,300m²以上、第II期は8,900m²以上あり、一般集落に伴う畠と考えるには規模が大きすぎる。また、両時期とも耕作を行った人々の居住域が確認できず、周辺でも同時期の遺跡は

確認されていない^(註11)。のことから、本遺跡の畠は大規模な農地經營にかかわるもの可能性が想定されよう。

平安時代末期以降はほぼ継続して集落が営まれ、各時期の集落の空間構成=有力者とその家臣・従者といった人々の屋敷からなる集合体について、ある程度具体的に提示できたのが最大の成果といえる。屋敷は、居住者の階層によって規模や区画溝の大きさ、建物構成と建替えの回数、出土遺物の量や内容に違いが認められた。遺物では宮城県内でも出土例が少ない第Ⅲ期～第Ⅳ期(12世紀～14世紀)が注目される。遺物包含層を中心に土器・陶磁器・漆器・木製品・金属製品・石製品が出土しており、花粉分析、植物遺体や木製品の樹種同定も行ったことから、屋敷を取り巻く環境を含め当時の生活を復元する上で貴重な資料が得られた。

(註1) S X1397から出土した筋土が白い手づくねかわらけは、畠地の上流に位置する12世紀代のS X1200(『Ⅲ』)からの流れ込みと考えられる。

(註2) 北陸地方の唐器編年では、V-2期(12世紀後半)の唐椀は、従来の体部の開きが大きなタイプに加えて、身が内側する構造らしい新タイプが共伴すると指摘されている(四柳嘉章1997)。

(註3) 建物群は位置のまとまりから設定したもので、建物配置や出土遺物から同時代と認定可能な例は少ない。しかし、建物の方向に大きな違いは認められなかったことから、個々の建物群はある程度の時間幅(=大別遺構期)におさまるものと仮定して論を進める。

(註4) 建物の面積の算定にあたっては、発掘調査で知られた建物群の最も外側の柱列をつなぐ平面形の面積を計測した。また、60畳未満の建物は明瞭な境界が認められなかつたため、中・小型建物群と一緒に括る。

(註5) 区画の規模は廣の内法で計測した。内部の施設は年代が特定できる遺構が少ないと、出土遺物等から明らかに別時期と判断できるものを外した残りについては、基本的に施設が位置する区画に属すると考えた。屋敷の構成はこうした条件の下に検討した結果である。

(註6) 区画『J』は南辺に土塁を有するが、中野高解遺跡で土塁をもつ屋敷群は第V期～第VI期に認められる。

(註7) 6b建物群が建つ場所は、廣によって副屋とは記されており、建物は3棟中2棟が内部に柱のない方形建物であることから、他と異なる空間として認識されていたと考えられる。玉井哲雄氏は、松巻物や発掘調査の事例から中世武士の館内に持仮堂的な建物があった可能性は大きいと指摘している(玉井哲雄1996)。6b建物群の性格は持仮堂であった可能性も考慮しておきたい。

(註8) 12世紀前半の南庭穿孔クロカわらけ碗が2枚重なった状況で出土したS X1405(『Ⅲ』)は、S X1200の東岸で検出されている。こうした点も第Ⅲ期の屋敷が遺跡東部にあったことを示唆する。

(註9) 段階の呼称は、筆者が便宜的に設けた。

(註10) B段階の出土例としては、佐賀県武雄市みやこ遺跡SE104井戸跡出土品(武雄市教育委員会1986)が知られている。年代は、共伴遺物からみて下限が平安時代末期と考えられている(小松大秀1990)。A段階の中野高解例が13世紀前半～中頃、B段階のみやこ例が平安末期であることから、古代鞍から中世鞍への移行は、平安時代後期から鎌倉時代前期にかけて漸移的に行われたと考えられる。

(註11) 平安時代中頃に起きた2度の洪水によって旧地形が埋没・変改されたため、周辺の集落(道路)が認識できていない可能性は考えられる。

〈引用・参考文献〉 (著者別、五十音順)

- 秋田県教育委員会 (2000) 『洲崎遺跡』 秋田県文化財調査報告書第303集
- 飯村均 (1996) 「平泉から鎌倉へ出土かわらけからみえる東国」 (原稿) サントリー文化財研究助成報告書 pp. ~
- 飯村均 (1997) 「中世食器の地域生・東北南部一」 『国立歴史民俗博物館研究報告』第71集 pp. 58~76
- 飯村均 (1998) 「東国のかわらけ」 『中世土器の基礎研究』X 日本中世土器研究会 pp. 13~26
- 飯村均 (2002) 「中世奥州の村」 『鎌倉・室町時代の奥州』 奥羽史研究叢書4 高志書院 pp. 159~178
- 飯村均 (2004) 「土器から見る中世の成立」 『中世の系譜』 考古学と中世史研究1 高志書院 pp. 169~178
- 石黒伸一郎 (1998) 「仙台市東光寺出土の板碑と七北田川下流の板碑概観」 『東光寺遺跡 第1・2次調査』 仙台市文化財調査報告書第112集 pp. 110~137
- 和泉利則 (1991) 「多賀城付近の供養碑」 『多賀城市史 4 考古資料』 pp. 655~694
- 伊藤一義 (2000) 「鎌倉の御家人たち」 『仙台市史 通史編2—古代中世一』 仙台市史編さん委員会 pp. 214~236
- 八戸田宜夫・大石正編 (1992) 「よみがえる中世7—みちのくの都 多賀城・松島一』 平凡社
- 八戸田宜夫・大石正編 (2002) 『平家の世界』 奥羽史研究叢書5 高志書院
- 岩手県埋蔵文化財調査センター (1995) 「律之御所跡21・23・28・31・36・41次発掘調査報告書」 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第228集
- 岩手県埋蔵文化財調査センター (2000) 「志羅山遺跡第46・66・74次発掘調査報告書」 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第312集
- 宇野隆大 (1989) 「考古資料にみる古代と中世の歴史と社会」 真福社
- 宇野隆大 (1997) 「中世食器形式の意味するもの」 『国立歴史民俗博物館研究報告』第71集 pp. 377~428
- 馬の博物館 (1990) 『日本の漆芸 鞍と鏡』
- 馬の博物館 (2004) 「馬とともに結ぶもの 一駆の世界一』
- 及川司 (1998) 「岩手県における11~19世紀の土器かわらけを中心として」 『東北地方の在地土器・陶磁器II』 東北中世考古学会・福島県考古学会 pp. 65~69
- 及川司・杉沢昭太郎 (2003) 「陸奥北部1~岩手県」 『中世奥州の土器・陶磁器』 東北中世考古学会 pp. 37~48
- 大石直正 (1992) 「みちのくの都の中世」「くらしを支える市場」 『よみがえる中世7—みちのくの都 多賀城・松島一』 平凡社 pp. 28~37, 99~107
- 大石直正 (1995) 「平泉と多賀(国)」 『中世都市研究』第2号 中世都市研究会 pp. 73~102
- 大石直正 (1998) 「仙台市の板碑」 『仙台市史 特別編5—板碑一』 仙台市史編さん委員会 pp. 494~505
- 大石直正 (2000) 「深まる動亂」 『仙台市史 通史編2—古代中世一』 仙台市史編さん委員会 pp. 354~375
- 岡田清一 (2000) 「村と市と在家」 『板碑のこころ』 『仙台市史 通史編2—古代中世一』 仙台市史編さん委員会 pp. 237~257, 263~270
- 小野正敏編 (2001) 『図解・日本の中世地図』 東京大学出版会
- 小野正敏 (2004) 「中世武士の館、その植物系譜と景観」 『中世の系譜』 考古学と中世史研究1 高志書院 pp. 179~206
- 川根町教育委員会 (2002) 『河取城跡』 川根町文化財調査報告書第19集
- 久保智康 (2000) 「鶯鷺文刺象嵌鏡について」 『志羅山遺跡第46・66・74次発掘調査報告書』 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第312集 pp. 413~422
- 久保智康 (2002) 『飾金具』 日本の美術第437号 至文堂
- 熊谷公男 (2000) 「公民と蝦夷」 『仙台市史通史編2—古代中世一』 仙台市史編さん委員会 pp. 112~138
- 古代糸協会 (1984) 『法住寺殿跡』 平成京跡研究調査報告第13号
- 小林大秀 (1984) 「日本の櫛」 『东京国立博物馆紀要』第19号 東京国立博物館 pp. 81~168
- 小林大秀 (1990) 「日本の中世盤」 『日本馬具大鑑』第2卷中世 日本馬具大鑑編集委員会 pp. 1~23
- 近藤好和 (1994) 「乗馬と鞍」 「歴史を読みなおす 武士とは何だろうか」 日本の歴史別冊 朝日新聞社 pp. 31~33
- 斎藤利男 (1992) 「多賀(国)の都市プラン」 『よみがえる中世7—みちのくの都 多賀城・松島一』 平凡社 pp. 44~62
- 佐藤正人 (2003) 「陸奥南部2—宮城県」 『中世奥州の土器・陶磁器』 東北中世考古学会・高志書院 pp. 29~36
- 佐藤正人 (1992) 「東光寺廬所・町場の板碑」 『よみがえる中世7—みちのくの都 多賀城・松島一』 平凡社 pp. 130~161
- 柴田英夫ほか (2004) 「南魚沼地方山茶園研究の現在と課題」 文科省科学研究費・特別研究项目 (2)「中世土器・陶器編年研究と流通様相の年代的解明」 班
- 白島良一 (2003) 「多賀城から中世多賀(國)」 『白V國の詩』平成15年11月号 (通巻567号) pp. 4~13
- 白畠大 (2000) 「狂園と公園」 『仙台市史 通史編2—古代中世一』 仙台市史編さん委員会 pp. 176~187
- 木崎真准 (1999) 「馬から見る馬」 『研究紀要』第12号 馬の博物館
- 開拓道人 (1998) 「木製品・漆器」 『東北大理藏文化財調査年報9』 東北大理藏文化財調査研究センター pp. 208~231
- 開拓道人 (2000) 「陶磁器・土器の検討」 『東北大理藏文化財調査年報11』 東北大理藏文化財調査研究センター pp. 169~178
- 仙台市埋蔵文化財センター (2002) 「江戸時代の瀬戸窯」
- 仙台市教育委員会 (2000) 『下ノ郷遺跡』 仙台市文化財調査報告書第249集
- 仙台市史編さん委員会編 (1998) 『仙台市史 特別編5—板碑一』 仙台市
- 仙台市史編さん委員会編 (2000) 『仙台市史 通史編2—古代中世一』 仙台市
- 多賀城市教育委員会 (1990) 『新田遺跡 第4・11次調査』 多賀城市文化財調査報告書第23集
- 多賀城市教育委員会 (1991) 『山王道路 第9次調査報告書一』 多賀城市文化財調査報告書第26集

- 多賀城市教育委員会（1995）『高崎遺跡 第11次調査報告書一』 多賀城市文化財調査報告書第37集
- 武蔵市教育委員会（1986）『みやこ遺跡』『みやこ遺跡』 武蔵市文化財調査報告書第15集 pp. 73~240
- 太宰府市教育委員会（2000）『大宰府条跡XV・陶磁器分類編一』 太宰府市の文化財第49集
- 高桑登（2003a）「奥羽前半における『伊達氏系遺物』の分布について」『研究紀要』創刊号 山形県立歴史文化財調査センター pp. 136~145
- 高桑登（2003b）『東北』『中世土器研究の今日の課題―土器研究と中世史研究―』 日本中世土器研究会 pp. 5~18
- 高桑弘美（2003）『瓦質土器』『中世奥羽の土器・陶磁器』 東北中世考古学会編 高志書院 pp. 95~110
- 高橋信志（2002）『陶器生産・陶磁器流通』『鎌倉・室町時代の奥州』奥羽史研究叢書4 高志書院 pp. 228~249
- 田中則和（1992）『丘沿いの聚落群』『丘の上の世界』『よみがえる中世7~みのくの都 多賀城・松島一』 平凡社 pp. 93~98, 145~161
- 田中則和（1995）『仙台市域の中世城館・聚落跡』『中世都市研究』第2号 中世都市研究会 pp. 32~48
- 田中則和（2000a）『聚落と丘の跡から探る中世』『義理隠のまとうらし』『仙台市史 通史編2—古代中世一』 仙台市史編さん委員会 pp. 271~282
- 田中則和（2002）『陸奥国「国府城」の考古学的様相』『鎌倉・室町時代の奥州』奥羽史研究叢書4 高志書院
- pp. 50~77
- 玉井哲雄（1990）『武家住宅』『鎧巻物の建築を読む』 東京大学出版会 pp. 77~104
- 千葉孝幸（1992）『武士の屋敷の発見』『よみがえる中世7~みのくの都 多賀城・松島一』 平凡社 pp. 66~92
- 千葉孝幸（1995）『多賀城から府中へ』『中世都市研究』第2号 中世都市研究会 pp. 13~31
- 千葉孝幸（1997）『考古学からみた中世の多賀城』『多賀城市史1~原始・古代・中世一』 pp. 549~591
- 施設部教育委員会（1993）『防衛城跡 平成4年度発掘調査報告書』 築館町文化財調査報告書第6集
- 東北学院大学中世史研究会編（1994）『中世陸奥国府の研究』
- 東北大学埋蔵文化財調査研究センター（2006）『東北大学埋蔵文化財調査年報13』
- 東北中世考古学会編（1998）『東北地方の在地土器・陶磁器II』
- 東北中世考古学会編（2001）『建立と廃穴・中世遺構研究の課題一』 高志書院
- 中井さやか（1992）『近世の漆桶について』『貯戸の食文化』 江戸遺跡研究会編 吉川弘文館 pp. 180~204
- 仲友茂司（1999）『東国中世の漆桶』『考古学研究』第46巻第1号 考古学研究会 pp. 72~90
- 中野晴久（1994）『生産地における編年について』『中世常滑焼において』資料集 日本福祉大学知多平島総合研究所 pp. 7~181
- 中野晴久（1997）『瓷器系中世陶器の生産』『研究紀要』第5輯 潤戸市埋蔵文化財センター pp. 7~24
- 永原慶一編（1995）『常滑焼・中世社会』 小学館
- 日本考古学会2001年度盛岡大会実行委員会編（2001）『都市・平泉一成立とその構成一』 日本考古学会2001年度盛岡大会研究発表資料集
- 日本木彌馬会（1990）『日本馬具大図鑑』第3巻中世 日本馬具大図鑑編集委員会
- 日本木彌馬会（1991）『日本馬具大図鑑』第2巻古代下 日本馬具大図鑑編集委員会
- 日本中世土器研究会編（2003）『中世土器研究の今日の課題―土器研究と中世史研究―』
- 根津美術館学芸部（1996）『跡る鎌倉―跡跡発掘の成果と伝世の名品』 根津美術館
- 野中奈津子・松本秀明（2004）『阿武隈川下流冲積低地に発達する自然堤防―旧河床地形の形成時期と形成環境』『日本地理学会発表要旨集』65 pp. 216
- 羽柴直人（2001）『平泉遺跡のロクロカわらけについて』『岩手考古学』第13号 岩手考古学会 pp. 41~62
- 羽柴直人（2003）『平泉におけるカわらけの用途と機能』『中世奥羽の土器・陶磁器』 東北中世考古学会 pp. 289~302
- 馬事文化財团（1979）『日本の鞍』
- 兵庫県蔵鏡調査会（1994）『中世の出土鉄・出土銅の調査と分類一』
- 平安文化研究会編（1992）『奥州藤原氏と柳之御所跡』 吉川弘文館
- 平泉町文化財センター編（2000）『常設展示試験』 柳之御所資料館
- 平田敏文（2003）『陸奥南端一福島県一』『中世奥羽の土器・陶磁器』 東北中世考古学会 pp. 17~28
- 福島県考古学会中近世部会編（1996）『かわらけ編年』『再検討-11世紀から19世紀- (その1)』『福島考古』第37号 pp. 65~85
- 福島県考古学会中近世部会編（1997）『かわらけ編年』『再検討-11世紀から19世紀- (その2)』『福島考古』第38号 pp. 67~85
- 福島県考古学会中近世部会編（2000）『東北地方南部における中世集落の諸問題-掘立柱建物跡を中心として-』
- 藤原良祐（1996）『中世瀬戸窯の動態』『古瀬戸をめぐる中世陶器の研究』 資料集 潤戸市埋蔵文化財センター
- 藤原良祐（1997）『中世瀬戸窯の動態』『研究紀要』第5輯 潤戸市埋蔵文化財センター pp. 43~58
- 藤原良祐（1997）『中・近世瀬戸焼の編年』『東北地方の在地土器・陶磁器I』 東北中世考古学会
- 藤沼邦彦（1991）『東北地方出土の常滑焼・美濃焼について』『知多平島の歴史と現在』No.3 校倉書房 pp. 29~56
- 藤沼邦彦（1992）『石巻市水沼塙跡の再検討』『古瀬戸をめぐる中世陶器の研究』 資料集 潤戸市埋蔵文化財センター
- 北側中世考古学研究会（2001）『中世北側の井戸』
- 堀江格（2003）『岸塙跡』『中世奥羽の土器・陶磁器』 東北中世考古学会編 高志書院 pp. 255~266
- 松木建連（1993）『柳之御所跡出土カわらけ編年試案』『紀要』XIII 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター pp. 53~60
- 松木建連（1994）『ロクロカわらけと手づくねカわらけ』『岩手考古学』第6号 岩手県考古学会 pp. 23~44

- 松本建連 (1996) 「平泉のかわらけと平安京のかわらけの比較」『紀要』XV 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター pp. 72~82
- 松本建連 (1996) 「駁輪物に見る器とその解釈」『物質文化』第60号 pp. 46~59
- 松本建連 (2002) 「かわらけは語る—平泉の窯—」『古代日本の窯』平成14年4月号(通巻548号) pp. 4~11
- 松本秀明 (1984) 「海岸平野に見られる丘堤地と完新世後期の海水準変動」『地理学評論』57 pp. 720~738
- 松本秀明・伊藤晶文 (1998) 「宮城県沖積平野に於ける後冰期の海面変動」『日本地理学会発表要旨集』53 pp. 392~393
- 松本秀明・野中奈津子 (2005) 「仙台平野北部、七北田川下流域に於ける自然堤防地形の形成年代と湖面埋積過程」『日本地理学会発表要旨集』67 pp. 233
- 馬鹿和雄 (1997) 「中世食器の地域性—鎌倉一」『国立歴史民俗博物館研究報告』第71集 pp. 311~330
- 宮城県教育委員会 (1990) 「花山寺跡」「大貫館山廬跡ほか」宮城県文化財調査報告書第137集 pp. 127~148
- 宮城県教育委員会 (1995) 「山王遺跡II 一多賀町地区構築」宮城県文化財調査報告書第167集
- 宮城県教育委員会 (1998A) 「山王遺跡II地区の調査」宮城県文化財調査報告書第175集
- 宮城県教育委員会 (1998B) 「一本柳遺跡I」宮城県文化財調査報告書第178集
- 宮城県教育委員会 (1999) 「発掘ダイジェスト—山王・市川橋遺跡—」
- 宮城県教育委員会 (2001) 「一本柳遺跡II」宮城県文化財調査報告書第185集
- 宮城県教育委員会 (2003) 「中野高柳遺跡I」宮城県文化財調査報告書第194集
- 宮城県教育委員会 (2004) 「中野高柳遺跡II」宮城県文化財調査報告書第197集
- 宮城県教育委員会 (2005) 「中野高柳遺跡III」宮城県文化財調査報告書第201集
- 宮城県多賀城跡調査研究所 (1982) 「多賀城跡 一枚谷略本文編一」
- 宮城県多賀城跡調査研究所 (1988) 「第50回調査」『月報1987』 pp. 3~47
- 村田晃一・吉野武 (2002) 「中野高柳遺跡」『木簡研究』第24号 pp. 76~77
- 村田晃一 (2004) 「中野高柳遺跡の中世道路跡と屋敷敷地」『中世みちの研究会第7回研究集会』資料 pp. 39~54
- 村田晃一・吉野武「竹ノ内遺跡」『木簡研究』第26号 pp. 140~141
- 村田晃一 (2005) 「沖積地の道路と自然災害—仙台市中野高柳遺跡の一例—」『七北田川下流域 陸奥国多賀城周辺の人類遺跡と地表面環境の変化』資料 東北地理学会一般公開シンポジウム2005
- 八重澤忠郎 (1994) 「常滑・瀬戸窯窓盤の12世紀後半における変遷—国窯窓盤・括窓窓事例から—」『沿手考古学』第6号 pp. 34~44
- 八重澤忠郎 (2001) 「東北における中世初期磁器の分布」『都市・平泉—成立とその構成—』日本考古学協会2001年度盛岡大会研究発表資料集 pp. 67~76
- 八重澤忠郎 (2002) 「平泉藤原氏の支配領域」『平泉の世界』奥羽史研究叢書3 高志書院 pp. 112~126
- 八重澤忠郎 (2003) 「奥羽における輸入陶磁器の受容」『中世奥羽の土器・陶磁器』東北中世考古学会 高志書院 pp. 269~278
- 柳原敬明・飯村均編 (2002) 『鎌倉・室町時代の奥州』奥羽史研究叢書4 高志書院
- 山形県埋蔵文化財調査センター (1997) 「東川I 2遺跡発掘調査報告書」 山形県埋蔵文化財調査センター調査報告書第43集
- 山形県埋蔵文化財調査センター (1999) 「米沢城跡発掘調査報告書」 山形県埋蔵文化財調査センター調査報告書第66集
- 山形市史編さん委員会編 (1968) 『山形市史別巻1 島遺跡』
- 吉岡朝輔 (1994) 『中世須恵器の研究』吉川弘文館
- 四柳嘉章 (1996b) 「漆器」『鐵器・中世の土器・陶磁器』中世土器研究会 pp. 522~538
- 四柳嘉章 (1997b) 「北緯の漆器考古学」『北緯の漆器考古学—中世とその前後—』第1分冊 北緯中世土器研究会 pp. 1~41
- 米沢市教育委員会 (1998) 「東屋敷塚跡」米沢市埋蔵文化財調査報告書第58集
- Saito, Y., Matsumoto, E. and Kashima, K. (1989) Sea level of the Last Graciation Maximum based on in-place sediments on the shelf off Sendai, Northeast Japan. 「第四紀研究」28 pp. 111~119.

たけのうちいせき
第IV章 竹ノ内遺跡



SD 12区画溝跡出土木簡

目 次

A. 遺跡の概要と調査の方法・経過.....	315
B. 発見した遺構と遺物	
(1) 古代.....	316
(2) 近世.....	318
C. まとめ.....	330

調 査 要 項

遺跡名：竹ノ内遺跡（宮城県遺跡登録番号 01152）

遺跡記号：R B

所在地：宮城県仙台市蒲生字竹ノ内地内

発掘対象面積：11,600m²

発掘面積：1,850m²

調査期間：平成15年8月4日～10月14日

調査担当：宮城県教育庁文化財保護課

調査員：村田晃一

A. 遺跡の概要と調査の方法・経過

1. 概要

竹ノ内遺跡は仙台平野の北東部にあり、標高2mの浜堤に立地する。遺跡の南0.7mを七北田川が東へ流れ、約2kmで河口に至る。遺跡は東西に細長く、規模は最も広い部分で南北約80m、東西約190mあり、面積は約11,600m²である。

2. 調査の方法

測量原点（第X系国家座標 X = -192,633,000 Y = 13,829,000）は、遺跡のほぼ中央に位置し、それをもとに東西・南北に基準線を延長して調査区全域に3m方眼を設定した。方向は真北を基準とし、グリッドの呼称は原点からの東西・南北方向の距離で表した（図版1）。

検出した遺構の実測図は、平面図がトータルステーションを用いてパソコンの画面で描画を行い、断面図は從来通り縮尺1/20で実測図を作成した。遺構写真は通常6×7cmモノクロフィルムとデジタルカメラで撮影し、重要度が高いものについては6×7cmカラーリバーサルフィルムを用いた。

3. 調査の経過

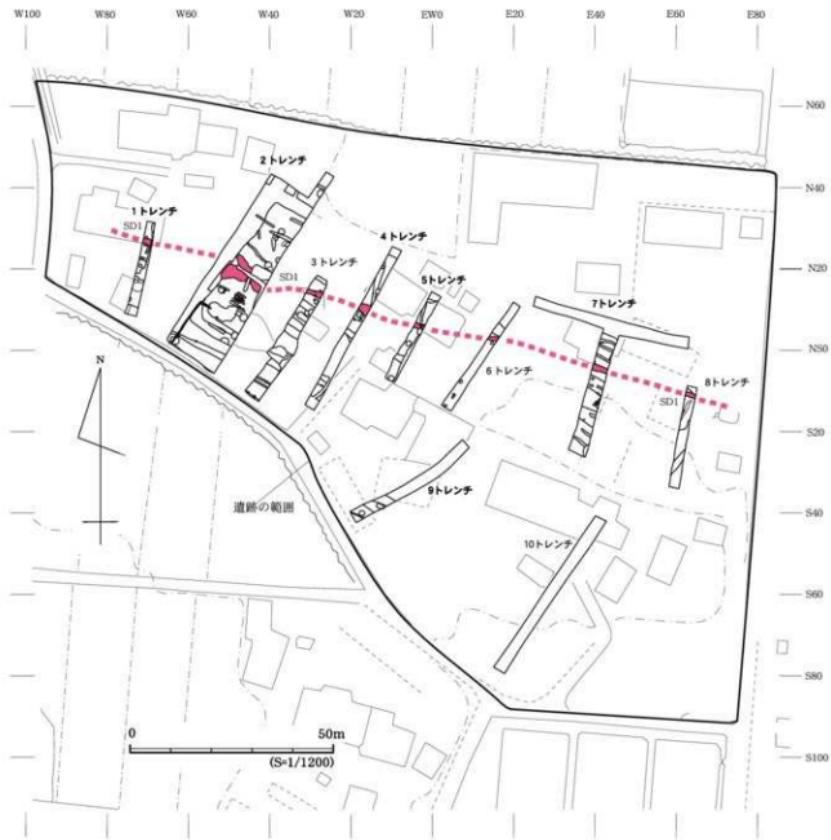
本遺跡は平成13年度の確認調査により、堆積土に灰白色火山灰が認められる古代の東西溝跡（SD1溝跡）と柱穴跡、土壙、溝跡などが確認された。また、柱穴跡や土壙、溝跡は古代の溝跡より新しく、出土遺物のほとんどが近世陶磁器であったことから、遺構の主体は近世以降であると予想された。

平成15年度の発掘調査は、前回の未調査部分について確認調査を実施し、遺跡全体の内容を把握することを目的とした。トレンチは、移転の完了していない神社の東に8本（面積：約860m²）、西に2本（面積：770m²）を設定した。8月4日から重機で表土剥ぎを行い、21日からトレンチ内の遺構確認作業を行った。その結果、中世以前の遺構はSD1溝跡を除いて認められず、SD1についても遺跡を東西に横断して遺跡外へと延びること、上幅が一定せず、断面形が浅い皿形であることから自然流路の可能性が高いと考えられた。こうした成果を受け、県文化財保護課で竹ノ内遺跡の取り扱いについて協議を行ったところ、本遺跡の発掘調査はSD1がトレンチで検出した部分についてのみ精査を行い、他の遺構は確認に止めることとなった。

9月30日からは、神社部分（面積：220m²）の表土剥ぎと遺構確認を行ったが、遺構の内容は他と同じであった。本遺跡は、浜堤上に立地するため地山や遺構の堆積土が柔らかく、また、発掘中は雨に祟られることが多かった。このため、遺構堆積土を予定より深く下げるケースがあり、遺物の多くはこうした作業によって出土した。10月1日からは、トータルステーションによって遺構平面図を作成し、14日に発掘調査を終了した。

B. 発見した遺構と遺物

竹ノ内遺跡の発掘調査は、遺跡全体の遺構の把握を目的として10本のトレンチを設定した。これらは、西から1・2……10トレンチと呼称する（図版1）。調査の結果、古代の東西溝跡と柱穴跡、土壙、溝跡などを確認した。遺構は遺跡西側の神社付近に多く認められ、東へ行くほど密度が希薄となる。南東部の10トレンチは、現代の搅乱が最もひどかったこともあり、遺構は確認できなかった。こ



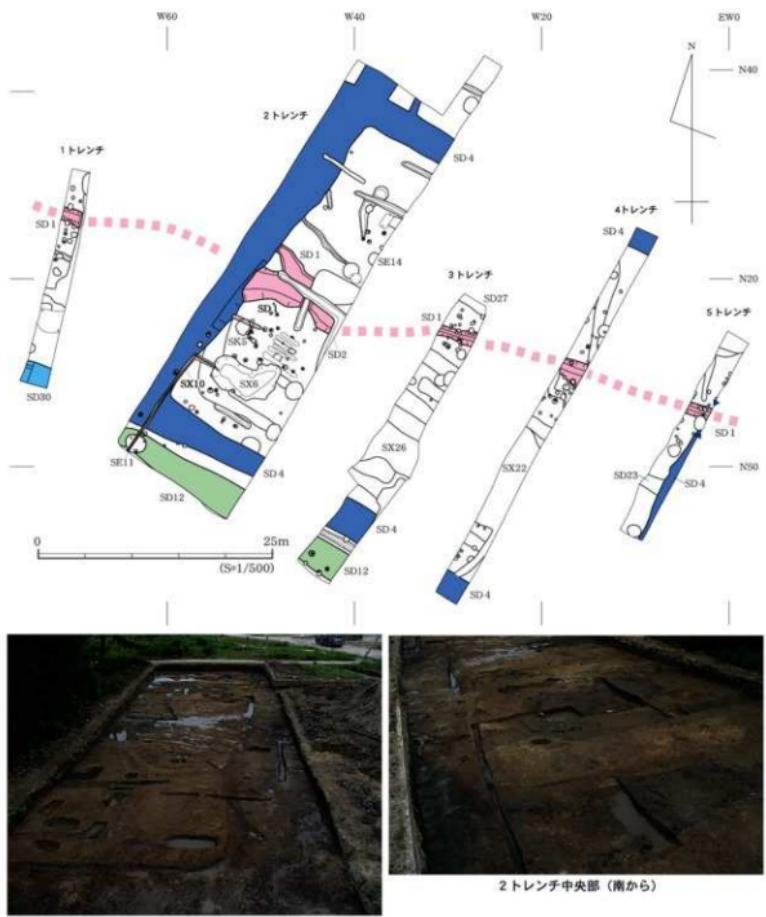
図版1 遺跡の範囲とトレンチの位置

これらのほとんどは近世以降であり、遺構が集中する神社付近には、幅4m前後の溝で囲まれた屋敷跡が存在したことがわかった。

(1) 古代

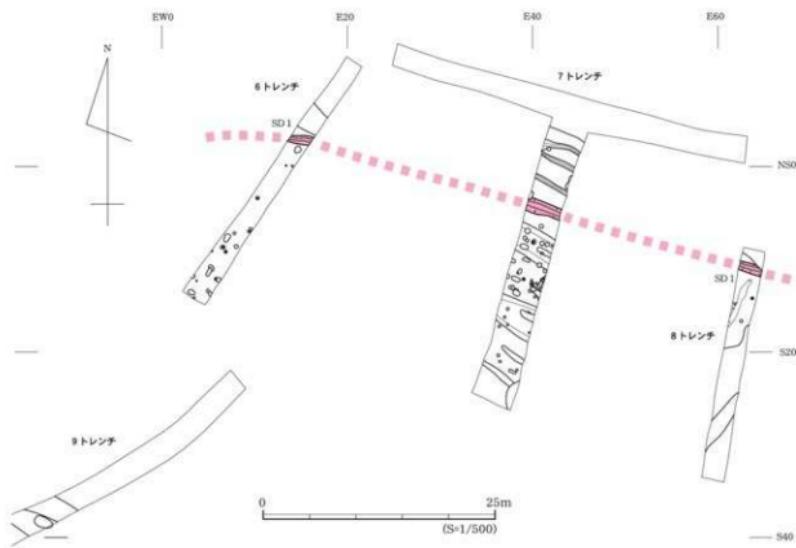
【SD1溝跡】(図版1～5)

遺跡を東西に横断する溝跡で、1～8トレンチで確認した。検出長は141.6mで、重複するすべての遺構より古い。上幅1.9～3.0m、下幅1.5～2.0m、深さは0.2mほどである。方向はE-10°～20°-S、断面形は皿形である。堆積土は5層に分けられるが、いずれも自然堆積である。底面もしく



図版2 1～5トレンチの検出遺構

はそれを覆う薄い層の上に灰白色火山灰の再堆積層が認められる。2トレンチでは二股に分かれることと、上幅や下幅が一定しないこと、断面形が皿状であることから、自然流路跡の可能性が高い。堆積土から平安時代の土師器がわずかに出土した。



2トレンチ全景（南から）



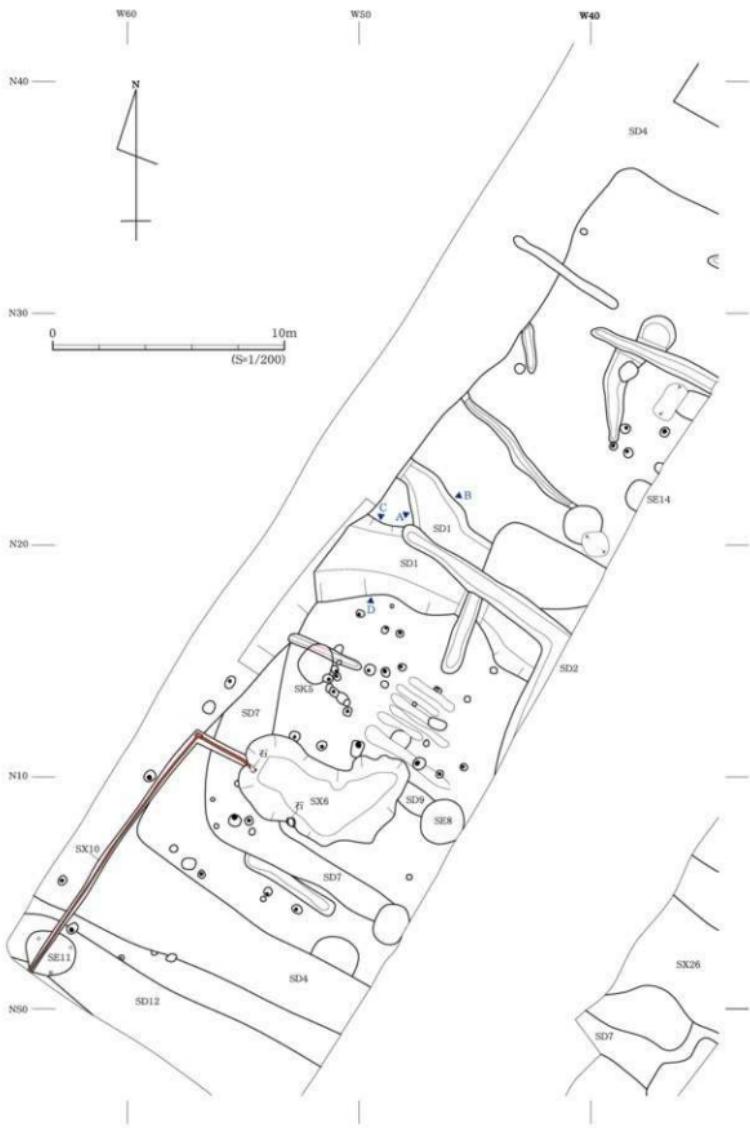
7トレンチ北半部（東から）

図版3 6～9トレンチの検出遺構

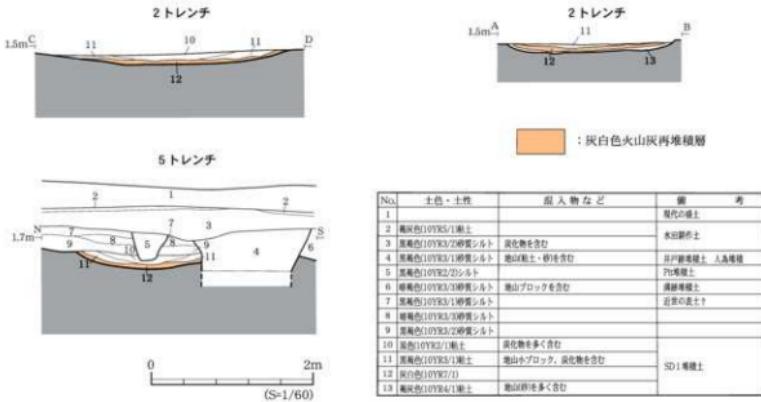
（2）近世

【SD4区画溝跡】（図版2・4）

2～4トレンチで確認したコ字形の溝跡である。東西は南辺で40.0m、北辺で37.6m、南北は西辺で42.4m確認した。5トレンチで確認したSD24南北溝跡は一連の遺構とみられ、その場合、東西約48m、南北約36mの範囲を区画する。SD1溝跡より新しく、SD7溝跡やSX10暗渠跡より古い。上幅は南辺で4.2m、西辺で4.8m以上、北辺で3.3mある。方向は西辺でN-36°-E前後である。ま



図版 4 2 トレンチの検出遺構



A-B断面写真（東から）



断面写真（7トレンチ）（西から）

図版5 SD 1溝跡

た、北西コーナーから北へ延びる上幅3.9mの溝や1トレンチ南端で確認したSD 50溝跡は一連の遺構である可能性がある。

堆積土から土師質土器皿（7-11）・灯明皿、瓦質土器火鉢（8-10）・火消壺蓋（7-8）、軟質施釉陶器熔培、陶器甕（8-2）、提梁陶器甕（8-1）、岸産陶器香炉（7-1）・鉢（7-3）、大堀相馬産陶器香炉（7-4）・土瓶（7-7）、肥前産陶器碗（7-2）・皿・急須・播鉢・甕、瀬戸産染付磁器碗（7-10）・仏飯器（7-6）、肥前産染付磁器皿（7-9）、磁器碗・皿（7-5）、瀬戸産陶器瓶子、硯、キセル（8-8）、刀子、不明鉄製品（8-6・7・9）、錢貨「元豊通寶」（初鑄1078年）（8-3）・「元祐通寶」（初鑄1086年）（8-4）・「紹聖元寶」（初鑄1094年）（8-5）、砥石、転用砥・軒瓦、棧瓦などが出土した（図版7・8）。

【SD 12区画溝跡】（図版2・4）

2・3トレンチで確認した東西溝跡で、27m分を検出した。SE 11井戸跡やSX 10暗渠跡より古い。



SX10層曲部（西から）



SX6池跡とSX10暗渠跡（南から）



SX10層曲部の木箱

図版 6 SX 6 池跡と関連施設

上幅3.6mで、方向はE-30° - S前後である。1トレンチ南端で確認したSD30溝跡は一連の遺構である可能性がある。堆積土から土師質土器灯明皿・瓦質土器火鉢・瓦灯、陶器碗・擂鉢、磁器碗、連歛下駄(10-2・3・4)、差歛下駄(10-1)、漆椀(14-8)、木筒(10-5)、砥石、錢貨「寛永通寶」(14-6)、モモ核などが出土した(図版9・10・14)。

木筒は直径20cm、長さ30cmほどの丸太の外縁部を縦に割り、平らに削った面に文字が記されている。裏面は樹皮を剥いだだけである。4行にわたって文字が記されており、「此かしこ 藤 □ □ 右者 宝永□□〔七年か〕」と判読できた。釈文中の「藤 □ □」は、中世期、本遺跡の周辺に存在した八幡荘内の地名である「藤木田」を指す可能性がある。

【SD2溝跡】(図版4)

2トレンチで確認したL字形の溝跡である。検出長は東西8.7m、南北7.4mである。SD1溝跡より新しい。上幅は0.8~1.1mで、方向は北辺で測るとE-35° - S前後である。堆積土から土師質土器皿(9)、軟質施釉陶器焙烙(8)、小野相馬産陶器端反皿(2)、陶器小坏(6)・碗・皿・擂鉢・甕、平清水産染付磁器碗(3)、瀬戸産染付磁器小碗(4・5)、肥前産染付磁器皿(1)、磁器碗・皿、瀬戸産陶器瓶子(7)、鬼瓦、軒瓦、棧瓦、梵鐘(鐘座)鋳型(10)などが出土している(図版11)。

【SX6池跡、SD9溝跡、SX10暗渠跡】(図版4・6)

SX6は、2トレンチで確認した池跡である。SD7溝跡より新しい。平面形はL字形で、東西6.



(单位: cm)

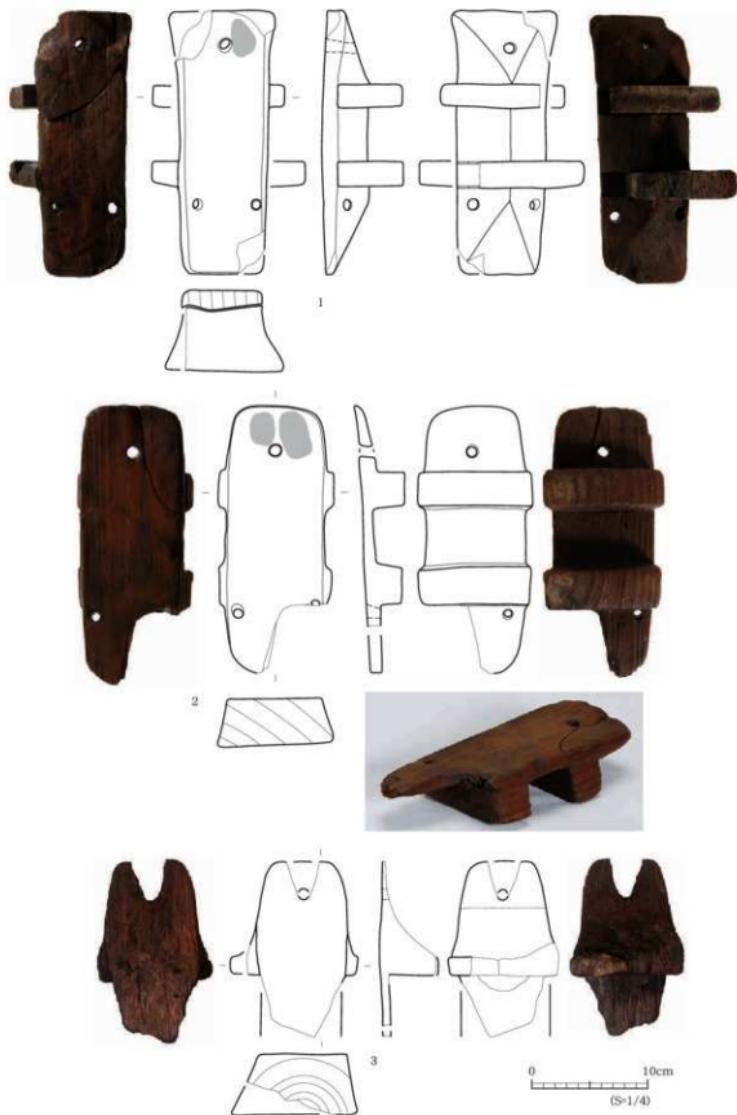
No.	出土層位	種別	器種	尺度	特徴	備註
1	堆積土	陶器	香炉	中	口径6.1 高径9.2 腹高2.4/5 残存: 1/5 回転角切 【17世紀半～18世紀半】	03320
2	堆積土	陶器	碗	肥桃	口径10.8 高径10.1 腹高2.2 残存: 2/5 【17世紀半～後期】	03321
3	堆積土	陶器	碗	中	口径18.0 高径1/3 内面目盛り丸型 【17世紀半～18世紀半】	03332
4	堆積土	陶器	香炉	大壺相馬	口径11.1 高径3.8 腹高3.8 残存: 1部 【18世】	03322
5	堆積土	陶器	皿	肥前	口径12.8 高径4.2 腹高3.7 残存: 1/3 【17世紀～18世紀半】	03335
6	堆積土	陶器	弘前器	中	口径10.5 腹高4.1 高台付3.8 残存: 1/2 コバルト青 【19世紀中頃】	03336
7	堆積土	陶器	土瓶	中	口径12.0 折口付4.7 高台付3.7 【19世紀半】	03326
8	堆積土	陶質土器	A系(香炉付土器)	不明	口径21.2 高径11.4 腹高4.7 残存: 1/3 内外面付環状 距: 回転角切	03333
9	堆積土	美術	皿	肥前	高径8.2 残存: 一部 【18世紀半】	03338
10	堆積土	陶器	碗	中	口径10.0 高台付4.0 腹高5.6 残存: 1/3 内外文様(コバルト青) 高台織紋付蓋 【19世紀半】	03334
11	堆積土	土瓶質土器	皿	中	口径17.9 高径12.7 腹高3.5 残存: ほぼ完形	03315

図版7 SD4区画溝跡出土遺物 (1)

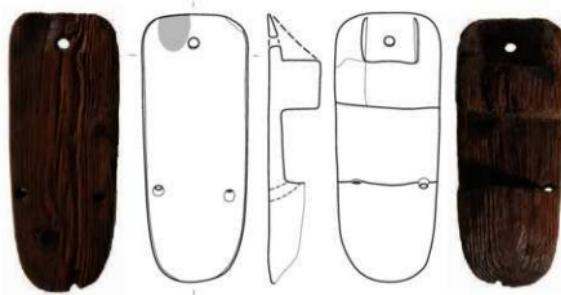


No.	出土標記	種別	質種	発地	等		量	登録番号
					現存	復存		
1	地植土	陶器	甕		口径(26.4)	現存: 1/3		03328
2	地植土	陶器	甕		口径(18.5)	現存: 1/3		03327
3	地植土	新製品	瓦質		「元豐通寶」(昭和107年)			03344
4	地植土	新製品	瓦質		「元祐通寶」(昭和106年)			03343
5	地植土	新製品	瓦質		「紹聖通寶」(昭和109年)			03343
6	地植土	新製品	不明鉄製品		長7.0 幅0.9 厚0.6 高さ1.6の近似値(複数)があり、上下を茎、中央の断面形状が頭み、3カ所でビス止めしている			03346
7	地植土	新製品	不明鉄製品		長(7.3) 幅(2.3) 厚(0.6)			03348
8	地植土	新製品	セセル		長7.0 大径径1.4 口径0.9 (確定一概現存)			03347
9	地植土	新製品	不明鉄製品		高3.1 幅1.4 厚1.3			03349
10	地植土	瓦質土器	火鉢		輪上面 直(5.0) 幅(4.8) 高(2.1)			03319

図版8 SD4区画溝跡出土遺物 (2)



图版9 SD12区画溝跡出土遺物 (1)



No.	出土層位	種別	記 種	特	圖	登録
1	埴地土	木製品	透彫下駄	長22.6 幅12.7 高7.1 残存:4/5		03367
2	埴地土	木製品	透彫下駄	長23.0 幅10.0 高5.1 残存:9/10		03368
3	埴地土	木製品	透彫下駄	残存長15.1 幅9.4 高5.1 残存:2/5		03370
4	埴地土	木製品	透彫下駄	長22.6 幅9.0 高4.4 残存:1/2(定形)		03369
5	埴地土	木製品	木物	長31.3 幅15.8 厚4.2		03364

図版10 SD12区画溝跡出土遺物（2）

8m、南北は東側で5.1m、西側で3.5m、深さは0.8mある。南岸中央に方形（50×40cm）で平らな石が置かれていた。SD 9溝跡は、SX 6の北東に接続する上幅1.0mの溝跡である。SX 10暗渠跡は、SX 6の西壁に接続する暗渠跡で、西へ2.5m延びたのち、南へ折れて12.8m以上続く。SE 11井戸



(単位: cm)

No.	出土層位	種別	断面	原地	特 徴	圖 版	登 録
1	埴輪土	染付	皿	肥前	口徑12.1 高台径4.0 腹高3.4 残存: 4/5 【17c後半】	1	03306
2	埴輪土	陶器	縦反屈	小野相馬	口徑12.8 高台径6.0 腹高3.6 残存: 2/5 内面底部印有文【18c中期】	2	03305
3	埴輪土	染付	皿	平瀬水	口徑10.8 合併3.8 腹高1.3 内外輪コバルト青、底部に文字焼で判別不可【19c後半】	3	03302
4	埴輪土	染付	小鉢	鹿戸	口径8.0 高台径3.8 邪角4.0 残存: 2/3、外面文様(コバルト青、斜板転写)【19c中期】	4	03303
5	埴輪土	染付	小鉢	鹿戸	口徑8.4 高台径3.0 邪角3.9 残存: 2/5、外面文様【19c中期】	5	03304
6	埴輪土	陶器	小杯	鹿戸	口径5.4 高台径2.8 腹高3.0 残存: 3/5	6	03307
7	埴輪土	陶器	瓶	鹿戸	底径10.2 【漆厚2mm】	7	03308
8	埴輪土	土師質土器	鉢			8	03309
9	埴輪土	土師質土器	皿		底径0.3 壁厚0.2cm	9	03310
10	埴輪土	陶器	瓶		口径10.4 厚2.4	10	03311

図版11 SD2溝跡出土遺物

跡、SD 4・12溝跡より新しい。掘方は上幅50cm前後、深さは50~60cmで、断面形は箱形である。底面の上に径10cmの節を抜いた竹が連接して埋設されている。南へ折れる部分は、内部がL字に刺り抜かれた30×20cmの木製の箱が置かれ、そこに竹を差し込んで連結していた(図版6)。また、SX 6との接続部は、竹の先が10cmほど池内に延び、その上には竹を固定するための幅70cm、厚さ30cmの繩が置かれていた。SD 7とSX 10の底面レベルと周辺の地形から、SD 9はSX 6の給水施設、SX 10は配水施設と考えられる。

SX 6の堆積土から土師質土器灯明皿(13-2・3)、瓦質土器火鉢(12-9)、大堀相馬産陶器碗(12-1)・香炉(12-2)、小野相馬産陶器碗(12-4)、陶器擂鉢、染付磁器皿(12-3)、磁器皿・皿、漆椀(12-5・7)・小杯(12-6)、差歛下駄、燭台用の木製小皿(12-8)、不明木製品(13-1・5・6)、羽口(13-8)、砥石、硯、碁石、鰐口(13-4)、五徳?(13-7)モモ核、SX 10の埋土から土師質土器灯明皿、陶器碗、磁器碗などが出土している(図版12・13)。



図版12 SX6池跡出土遺物(1)



No.	出土層位	種別	器種	特 徴	登 録
1	堆積土	木製品	不明木製品	長26.2 幅9.3 厚4.5 厘米	03358
2	堆積土	土師質土器	灯明皿	口径10.7 底径7.0 高さ(2.1) 残存: 完形 内外面油煙付着	03378
3	堆積土	土師質土器	灯明皿	口径(10.9) 底径(6.4) 高さ(2.3) 残存: 1/2 底部穿孔	03379
4	堆積土	鐵製品	鉗口	鉗(11.1) 幅(4.2) 厚0.3	03386
5	堆積土	木製品	不明木製品	長9.3 幅2.0	03361
6	堆積土	木製品	不明木製品	長4.5 幅厚1.5	03360
7	堆積土	鐵製品	五種力	鉗 長30.7 幅(1.0~2.4) 厚0.7	03387
8	堆積土	土製品	羽口	長(2.5) 幅(2.4)	03384

図版13 SX6池跡出土遺物 (2)

No.	出土施物・施色	種別	器種	產地	号	量	量
1	SK13 地植土	瓦質土器	瓦灯		口徑12.0、高さ14.0、底径16.4 残存: 2/3		03399
2	SX22 地植土	陶器	上風	大槻相馬	口徑8.3、高さ9.6、底径14.5 残存: 2/3 【19c中期】		03403
3	SX21 地植土	陶器	海付	肥前(草津左衛門?)	口徑14.2、高さ15.8、底径4.5 残存: 1/3 【19c前半～中期】		03402
4	SD21 地植土	陶器	弘法器	小野相馬	高台径4.2、残存: 1/3、洗部: 回転水切 【16c末～19c初】		03406
5	SD25 地植土	陶器	灯明皿		口径12.0、底径10.0、高さ2.1		03404
6	SD17 地植土	御製品	酒呑		「酒呑香山」(昭和63年)		03397
7	SK6 地植土	新潟地	瓶		肩(1.3)、幅8.8、厚0.6		03372
8	SD12 地植土	新潟	瓶		高台径6.0、残存高5.1、残存: 2/3、内外底部: 赤色唐使り		03365
9	SD12 地植土	新潟	瓶		高台径5.2、残存高3.1、残存: 1/3、内外底部: 赤色唐使り		03363

図版14 その他の遺構出土遺物

C. まとめ

1. 竹ノ内遺跡は標高2mの浜堤に立地する。遺跡は最も広い部分で南北約80m、東西約190mあり、面積は約11,600m²である。
2. 検出した遺構は、幅4m前後の屋敷区画溝跡、柱穴跡、土壙、溝跡などである。このうち、堆積土に灰白色火山灰が入るSD1溝跡は、自然流路とみられる。他の遺構については、堆積土出土の土器・陶磁器・漆器・瓦・金属製品からみて近世以降と考えられる。
3. SD4・24溝跡は、東西約48m、南北約36mの範囲を区画する。屋敷の居住者は、区画溝から出土した遺物が日常雑器を主体としていることから、有力農民層とみられる。
4. 近世屋敷より新しいSX6池跡と関連施設は、池跡出土遺物の中に餉口が含まれることからみて、本遺跡の上に建っていたとされる天台宗「耳取山冷徳寺」に関わる遺構とみられる。

附編 中野高柳遺跡の古環境および植物利用等の分析

三村昌史・新山雅弘・植田弥生（パレオ・ラボ）

仙台市宮城野区に位置する中野高柳遺跡では、遺跡北部から平安時代末頃～戦国時代の在地領主層の屋敷跡や平安時代中頃の烟跡・水田跡が、遺跡南部からは鎌倉時代～室町時代の屋敷跡が検出されている。ここでは、平成13・14年度発掘調査で出土した植物質遺物の調査を通じて当時の暮らし振りの一端を復元することとしたい。分析は花粉・種実・木製品の3項目であり、花粉分析により12世紀～13世紀頃の遺跡周辺の古植生を、種実及び木製品の分析により12世紀～近世に至る植物利用・木材利用をそれぞれ明らかにすることを目的として行った。以下では、花粉・種実・木製品のそれぞれの分析及び考察を順次記すと共に、末尾に総合的な考察を加えたい。なお、それぞれの分析及び考察は花粉・種実を新山が、木製品を三村と植田がそれぞれ担当した^(註1)。

第1節 花粉分析

I. 試料と方法

花粉分析による花粉化石群集の検討は、遺跡北部の4区SX1200遺物包含層の下層（17層）（試料1）と下層（19層）（試料2）、遺跡南部のB区SX1397遺物包含層の中層（23層）（試料3）の堆積物合計3試料について行った（図1参照）^(註2)。

深度(m)

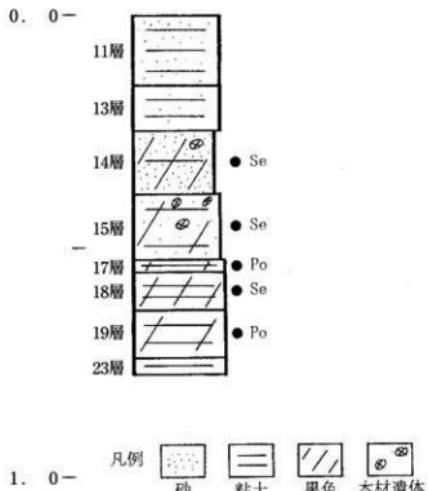


図1 4区SX1200の地質柱状図と試料採取層準

（●:サンプル、Po:花粉分析、Se:種実分析）

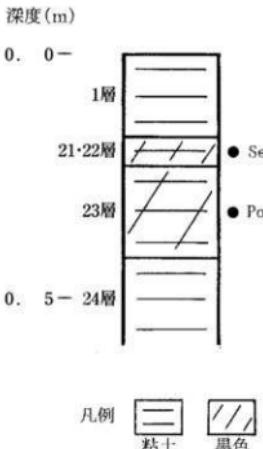


図2 B区SX1397の地質柱状図と試料採取層準

（●:サンプル、Po:花粉分析、Se:種実分析）

分析対象の4区S X1200の下層(17層)と下層(19層)の堆積物は黒褐色粘土で植物遺体を含む。B区S X1397の下層(24層)の堆積物は黒褐色粘土で炭化物を含み褐鉄鉱が認められる。時代については4区S X1200が12世紀、B区S X1397が13世紀と考えられており、その時代における本遺跡周辺の古植生の復元を試みる。

花粉化石の抽出は、試料約2～3gを10%水酸化カリウム処理(湯煎約15分)による粒子分離、傾斜法による粗粒砂除去、フッ化水素酸処理(約30分)による珪酸塩鉱物などの溶解、アセトリシス処理(水酢酸による脱水、濃硫酸1に対して無水酢酸9の混液で湯煎約5分)の順に物理・化学的処理を施すことにより行った。なお、フッ化水素酸処理後、重液分離(臭化亜鉛を比重2.1に調整)による有機物の濃集を行った。プレパラート作成は残渣を蒸留水で適量に希釈し、十分に攪拌した後マイクロビペットで取ってグリセリンで封入した。検鏡はプレパラート全面を走査し、その間に出現した全ての種類について同定・計数した。その計数結果をもとに、各分類群の出現率を樹木花粉は樹木花粉総数を基数とし、草本花粉およびシダ植物胞子は花粉・胞子総数を基数として百分率で算出した。ただし、クワ科、バラ科は樹木と草本のいずれをも含む分類群であるが、区別が困難なためここでは便宜的に草本花粉に含めた。なお、複数の分類群をハイフンで結んだものは分類群間の区別が困難なものである。

II. 結果

同定された分類群数は、樹木花粉26、草本花粉27、形態分類を含むシダ植物胞子3である。以下に各試料の花粉化石群集の記載を示す。

4区S X1200(12世紀頃)の花粉化石群集

下層(17層)(試料1)は樹木花粉の占める割合が約12%と非常に低率である特徴がある。その中でブナ属が約25%で最優占し、次いでコナラ亜属が約18%と高率である。比較的高率なのは、ハンノキ属・アカガシ亜属の約11%、クマシデ属-アサダ属の約8%、カバノキ属の約6%である。他にマツ属単維管束亜属・スギ属・クリ属が各4%、トネリコ属が約2%、クルミ属・ユズリハ属・シラキ属・トチノキ属・ブドウ属などが約1%以下で出現する。草本花粉では、イネ科が約49%と最も高率であり、次いで、ヨモギ属が約13%、クワ科が約12%である。他に、ガマ属-ミクリ属が約4%とやや目立ち、カヤツリグサ科、アカザ科-ヒユ科が約2%、ヒルムシロ属・ギシギシ属・サンエタデ節-ウナギツカミ節・コウホネ属・ヒツジグサ属・ツリフネソウ属・セリ科・ナス属・オオバコ属・ゴキヅル属・他のキク亜科・サンショウウモなどが1%未満で出現する。

下層(19層)(試料2)も同様に樹木花粉の占める割合が約21%と非常に低率である。その中で、ブナ属が約25%で最優占し、次いでコナラ亜属が約17%と高率である。比較的高率なのは、ハンノキ属の約12%、スギ属の約11%、クマシデ属-アサダ属の約10%である。他に、マツ属単維管束亜属・ヤナギ属・アカガシ亜属・ニレ属-ケヤキ属が約3～4%、モミ属・クリ属・ユズリハ属・ブドウ属などが1%未満で出現する。草本花粉ではヨモギ属が約36%と最も高率であり、次いでイネ科が約33%である。他に、カヤツリグサ科が約4%、ガマ属-ミクリ属・ヒルムシロ属・オモダカ属・サンエ

和名	学名	1	2	3
樹木				
モミ属	<i>Abies</i>	1	1	-
マツ属単維管束系属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Haploxyylon</i>	6	6	-
マツ属複維管束系属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxyylon</i>	1	1	-
マツ属(不明)	<i>Pinus</i> (Unknown)	2	5	-
スギ属	<i>Cryptomeria</i>	5	24	-
イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	T.- C.	-	1	-
ヤナギ属	<i>Salix</i>	-	8	-
サワグルミ属	<i>Pterocarya</i>	1	-	-
クルミ属	<i>Juglans</i>	2	-	-
サワグルミ属-クルミ属	<i>Pterocarya-Juglans</i>	-	1	-
クマシデ属-アサガ属	<i>Carpinus - Ostrya</i>	13	23	3
ハシバミ属	<i>Corylus</i>	-	4	-
カバノキ属	<i>Betula</i>	10	10	1
ハンノキ属	<i>Alnus</i>	19	26	7
ブナ属	<i>Fagus</i>	41	56	1
コナラ属コナラ亜属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>	30	37	3
コナラ属アカガシ亜属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	18	10	-
クリ属	<i>Castanea</i>	6	1	-
ニレ属-ケヤキ属	<i>Ulmus - Zeikova</i>	1	5	-
ユズリハ属	<i>Daphniphyllum</i>	1	1	-
シラキ属	<i>Sapium</i>	1	-	-
カエデ属	<i>Acer</i>	1	-	-
トチノキ属	<i>Aesculus</i>	2	-	-
ブドウ属	<i>Vitis</i>	1	1	-
エゴノキ属	<i>Styrax</i>	-	1	-
トネリコ属	<i>Fraxinus</i>	4	-	-
草本				
ガマ属-ミクリ属	<i>Typha - Sparganium</i>	54	6	-
ヒルムシロ属	<i>Potamogeton</i>	12	4	-
オモダカ属	<i>Sagittaria</i>	-	1	-
イネ科	<i>Gramineae</i>	699	351	3
カヤツリグサ科	<i>Cyperaceae</i>	34	38	-
クワ科	<i>Moraceae</i>	176	-	-
ギンギシ属	<i>Rumex</i>	6	-	-
サナエタデ節-ウナギツカミ節	<i>Polygonum</i> sect. <i>Persicaria-Echinocaulon</i>	9	4	-
タデ属イタドリ節	<i>Polygonum</i> sect. <i>Reynoutria</i>	-	1	-
アカサザ-ヒユ科	<i>Chenopodiaceae - Amaranthaceae</i>	24	14	-
ナデシコ科	<i>Caryophyllaceae</i>	-	1	-
コウホネ属	<i>Nuphar</i>	1	4	-
ヒツジグサ属	<i>Nymphaea</i>	1	1	-
キンボウゲ科	<i>Ranunculaceae</i>	1	-	-
アブラナ科	<i>Cruciferae</i>	9	-	-
バラ科	<i>Rosaceae</i>	4	-	-
ツリフネソウ属	<i>Impatiens</i>	1	5	-
フサモ属	<i>Myrsinaceae</i>	-	1	-
アリノトウグサ属	<i>Haloragis</i>	-	4	-
セリ科	<i>Umbelliferae</i>	7	4	-
ミツガシワ属-イワイチョウ属	<i>Menyanthes - Fauria</i>	-	1	-
ナス属	<i>Solanum</i>	6	-	-
オオバコ属	<i>Plantago</i>	4	1	-
ゴキヅル属	<i>Actinostemma</i>	7	1	-
キュウリ属	<i>Cucumis</i>	-	1	-
ヨモギ属	<i>Artemisia</i>	183	378	9
他のキク科	other <i>Tubuliflorae</i>	1	4	-
シダ植物				
サンショウモ	<i>Salvinia natans</i> All.	5	11	-
單孔型孢子	Monolete spore	7	4	3
二条型孢子	Trilete spore	2	1	-
樹木花粉	Arboreal pollen	187	223	15
草本花粉	Nonarboreal pollen	1239	825	12
シダ植物孢子	Spores	14	16	3
花粉・孢子总数	Total Pollen & Spores	1420	1664	30
不明花粉	Unknown pollen	28	12	9

表1 花粉化石一覧表

試料1:4区SX1200下層(17層)、試料2:4区SX1200下層(19層)、試料3:B区SX1397下層(24層)

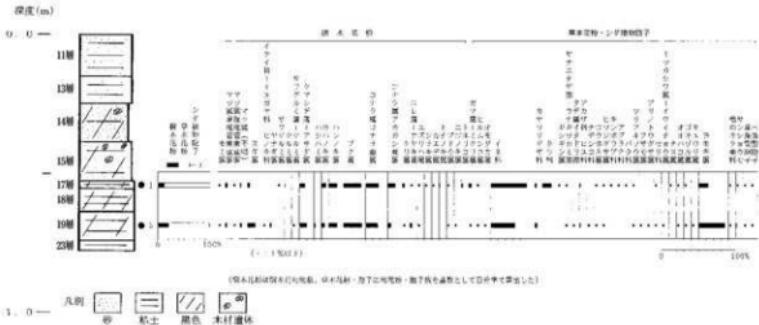


図3 4区SD1200の花粉化石分布図

タデ節—ウナギツカミ節・アカザ科ヒユ科・コウホネ属・ヒツジグサ属・ツリフネソウ属・フサモ属・セリ科・ミツガシワ属・イワイチョウ属・オオバコ属・ゴキブル属・キュウリ属・他のキク亞科・サンショウウモなどが約1%以下で出現する。

B区 S X1397 (13世紀頃) の花粉化石群集

十分な花粉化石が産出せず、花粉化石分布図として示すことができなかつた(表1参照)。ハンノキ属、クマシデ属—アサダ属、コナラ亞属がやや目立ち、カバノキ属、ブナ属が僅かに産出した。草本花粉では、イネ科とヨモギ属のみが得られた。

III. 考察

12世紀の遺跡周辺には、ブナ属、コナラ亞属が優勢でハンノキ属、クマシデ属—アサダ属、カバノキ属を主要な構成要素とした落葉広葉樹林が成立していたと予想される。他に、針葉樹のスギ属、常緑広葉樹のアカガシ亞属も生育していたと思われる。しかし、樹木花粉の占める割合は極めて低率であり、また、大型植物化石でも木本の種類・個数は共に少なく、上記した分類群に対応するものはコナラ属芽が1個体出土しているのみである。従って、比較的多産した分類群の花粉化石の大半は、遠方からの飛来花粉によるものではないかと思われ、上記したような森林は、周辺丘陵地など遺跡からやや離れた場所に成立していたのではないかと予想される。周辺の遺跡の一つである山王遺跡では植物遺体の検討が行われており(辻誠一郎ほか1994)、古墳時代中期と本遺跡より時期は古いものの、花粉群の産状からイヌブナ、ブナ、クマシデ属、ケヤキを主とする落葉広葉樹林が分布していたと考えられている。本遺跡と比較すると、大きな違いとしては、スギ属、イチイ科—イヌガヤ科—ヒノキ科、コナラ亞属、アカガシ亞属の出現率の差があると思われる。コナラ亞属は12世紀になってより人間活動が活発化し、二次林要素として分布を拡大した可能性が考えられる。また地域による差もあるかもしれないが、少なくとも12世紀の本遺跡周辺においては、イチイ科—イヌガヤ科—ヒノキ科はあまりみられず、逆にスギ属、アカガシ亞属は普通の要素であったと思われる。

一方、草本類については大型植物化石と同様に多様な水生植物が出現している。具体的には、湿地

性ないし抽水植物のガマ属—ミクリ属、オモダカ属、ツリフネソウ属、ミツガシワ属—イワイチョウ属、ゴキヅル属、浮葉ないし沈水植物のヒルムシロ属、コウホネ属、ヒツジグサ属、フサモ属、サンショウウモなどである。S X1200はもともと河川であったものが12世紀代に氾濫によって埋没し、その後湿地化したものと考えられており、これら水生植物花粉の検出はそうした背景と同調的である。多産するイネ科の花粉も、おそらくこれら水生植物と共に河川や湿地に生育していた種から由来したものではないだろうか。

なお、13世紀の試料であるS X1397の下層（24層）（試料3）は十分な花粉化石が産出せず、周辺植生の推定はできなかった。

第2節 出土種実の分析

I. 試料と方法

分析試料の一覧を表2に示した（土層断面図は図1参照）。

これらの資料のうち、洗い出しが行われていない4区S X1200遺物包含層の下層（14層）、下層（15層）、下層（18層）およびB区S X1397の中層（23層）の堆積物については、堆積物から各約200ccを取り出して0.25mm目の篩を用いて水洗篩い分けを行った。その他の試料は既に洗い出し済みであり、種実のみ、あるいは篩目に残った種実や種実以外の残渣がタッパー・袋・プラスチックケースに入れられた状態であった。ただし、4区S X1200の6層は処理済のものとは別に堆積物試料も処理した。これらの大型植物化石を实体顕微鏡下で同定した。

II. 結果

出土した大型植物化石の一覧を表3～5に示した。なお、A区S E1643井戸跡については複数の試料があったため、便宜的に1～21の通し番号を付けた。ただし、大型植物化石として同定し得るもの

調査区	遺構	出土層位	年代or遺構期	状態	堆積物の処理量	篩目
2	S K1205	5層	第VI期	処理済	54×34×14cm	最小1mm
2	S D1140	埋土	第VI期	処理済		
2	S E1212	3層	第VI期	処理済		
2	S K1235	埋土	第V期	処理済		
4	S K1282	ベルト	第V期	処理済		
4	S D1284	埋土	第V期	処理済		
4	S X1200	上層（9～10層）	12世紀後半	処理済		
4	S X1200	上層（12層）	12世紀後半	処理済		
4	S X1200	下層（14層）	12世紀前半	堆積物	200cc	0.25mm
		下層（15層）		堆積物	200cc	0.25mm
		下層（14～17層）		処理済	54×34×14cm	最小1mm
4	S X1200	下層（18層）	12世紀前半	堆積物	200cc	0.25mm
4	S X1200	下層（19層）	12世紀前半	処理済	54×34×14cm	最小1mm
4	S X1200	下層（19層）	12世紀前半	処理済	54×34×14cm	最小1mm
B	S K1310	埋土	13世紀	処理済		
B	S K1310	7層	13世紀	処理済	54×34×14cm	最小1mm
B	S K1311	6層	13世紀	処理済	54×34×14cm	最小1mm
B	S X1397	下層	13世紀前半～中頃	堆積物	200cc	0.25mm
		中層		処理済	54×34×14cm	最小1mm
		上層		13世紀後半	処理済	
B	S D2474	埋土	第IV期？	処理済		
B	S D1501B	埋土	第IV期	処理済		
B	S E1543	埋土	第VII期	処理済		
A	S E1643	埋土	第VII期	処理済		

表2. 大型植物化石分析試料一覧

を全く含んでいなかった2試料については、一覧表から省いた。以下に、出土した大型植物化石を記載する。

2・4 区から出土した大型植物化石（表3）

（1）2区

S K1205土壤5層は、木本ではニワトコ1個体のみが出土した。草本ではサナエタデ近似種、ホタルイ属A、イボクサ、ヒシ、ドクゼリ属またはセリ属が多産ないし目立った産状を示し、イネ、イヌビエーヒエ、エノコログサ属、アサ、ヤナギタデ近似種、ヒメビシ、シロザ近似種、ナス、メナモミなどが少量出土した。S D1140区画溝跡、S E1212井戸跡、SK1235土壤では、モモ核のみが少量出土した。

（2）4区

S K1282土壤はモモ核（完形）1個体、S D1284区画溝跡はオニグルミ核（破片）2個体のみが出土した^(註3)。

S X1200遺物包含層は、下層（19層）でミクリ属やイネが多産し、ヒルムシロ属、オオムギ、イヌビエーヒエ、イボクサ、サナエタデ近似種、ヤナギタデ近似種、イヌコウジュ属またはシソ属、ナスが比較的目立った。他に、コムギ、ホタルイ属A、ホタルイ属B、アサ、サデクサ、シロザ近似種、ヒュ属、ドクゼリ属またはセリ属、シソ属、イヌコウジュ属、メロン仲間、モモ核（完形、破片）などが出土し、コウホネ属、マメ科なども僅かに出土した。

下層（18層）では、イネが圧倒的に多産し、特に炭化胚乳が目立った。他にはイヌビエーヒエ、ホタルイ属Bも多産し、ミクリ属、コムギ、オオムギ、ホタルイ属A、イボクサ、ヤナギタデ近似種、イヌタデ近似種、シロザ近似種、ヒュ属、ナスも比較的目立った。他に、クリ、モモ、アサ、マメ科、ヒシ属、シソ属、メロン仲間なども出土した。

下層（14～17層）では、イネ、イヌビエーヒエ、ヒシ属が非常に多産し、クリ、モモ、オオムギ、ホタルイ属B、サナエタデ近似種、ヤナギタデ近似種、シロザ近似種、シソ属などが比較的目立った。他に、ウメ、コムギ、アサ、マメ科、ナス、メロン仲間なども出土した。

下層（14～17層）については、14層と15層の堆積物試料を処理したが、15層ではイネが多産し、イヌビエーヒエ、ヒシ属がやや目立った。14層ではヒュ属がやや目立ち、イネ、オオムギ、アサなどが出土した。上層（12層）では、モモとヒシ属のみが僅かに出土した。上層（9～10層）では、モモ核のみが少量出土した。

B区から出土した大型植物化石（表4）

S K1310土壤は、7層でイネが非常に多産し、オオムギ、イヌビエーヒエも比較的多産した。他に、モモ、コムギ、アサ、マメ科、シソ属などが出土した。S K1311土壤は、6層でイネ、オオムギ、イヌビエーヒエ、ホタルイ属A、アサ、ヤナギタデ近似種、シロザ近似種、ヒュ属が比較的多産ないし目立った。他に、ウメ、コムギ、カナムグラ、サナエタデ近似種、ギシギシ属、ナデシコ科、メナモミなどが出土した。S D2474溝跡はモモのみが出土し、S D1501 B区画溝跡及びS E1543井戸跡では、モモ核の縫合線に沿って半分に割れた片方が1個体ずつ出土した。

分類群・部位 \ 地区・遺構・層位	2 区		4 区		4 区																	
	SD1205	SD1140	SE1212	SK1238	SK1282	SD1284	S X1290															
							5層	3層	ベルト	上層(9~10)	上層(12)	下層(14)	下層(15)	下層(16~17)	下層(18)	下層(19)						
セミ属															(1)	(1)						
オニグルミ															(1)	(1)						
コナラ属															1							
クリ															(78)	(18)						
コブシ															1							
キイチゴ属															1	(2)						
クモ															1							
ヤシノウ																(2)						
ブドウ属															1(3)							
ヒサカキ															(1)							
タマノミズキ																						
ニワトコ															1							
ミクリ属															6	37	194					
ヒルムシロ属															5	34						
ヘラオモダカ															1							
オモダカ科															1							
未炭化組(基部)	2														1	51	135	344				
イネ															2	20(10)	63(4)	1				
炭化胚乳	1														2(1)	1	511(120)	1680(537)	109(37)			
炭化胚乳(基部)	3(2)														1	4	252	152	1			
コムギ															2	1	41	10				
オオムギ															4		19	3				
未炭化組	2														5	14	24	25(1)				
ヒルムシロ属	1														1	5	108(46)	9(8)	1			
エヌビニヒニ															1	1	191(64)	43	6			
炭化胚乳	3														1	721	364(8)	30(1)				
エノコログサ属															18							
炭化胚乳															9							
スダ属															2	1			1			
カヤツリグサ属															9	1	2					
ウキヤウラ															9	39	15					
ホタルア属A															120(3)							
ホタルア属B																	145	241	14(1)			
イボクサ															34		45	30	28			
アサ															1(2)	2(1)	4(20)	1(16)				
カナムグラ																		(1)				
ミゾバ																		1				
サザクサ																		1(2)				
炭化葉茎																		10				
ナデシコ科															202(46)							
コウホネ属																	99	10(1)	19(11)			
マメ科															2	81	49	48(6)				
カタバミ属															2		33	6(1)				
エヌキダラ															1							
ソロヂア属															1							
ヒユ属															1							
ナデシコ科															2		10	55	9			
コウホネ属															2		3					
マメ科															2(23)				1			
ヒシ															1				(3)			
ヒメビヒ															15(17)							
ヒシ属																	(3)	(18)	(1400)	(3)		
ドクゼリ属またはセリ属															70		(2)		2	11		
シソ属																		45(27)	6(16)	10(6)		
イヌコクジョウ属															1				9(10)			
イヌコクジョウ属またはシソ属																						
ナス															1				5(18)	43(16)	22(2)	
ナス属															3		32(9)	1	3			
ヒヨウタン仲間																						
メロン仲間																						
タカサゴロウ																						
メナモミ															6				1	1		
オナモミ																					(2)	

表3. 2・4区の大型植物化石一覧表

数字は個数、()内は半分ないし破片の数を示す

分類群・部位	地区・遺構・層位	B区						
		SK1310	SK1311	SX1397			SD2474	SD1501B
				7層	6層	下層		
オニグルミ	(核(打撃痕))							
イヌシテ	果実		(1)					
ヨイチゴ属	核			(1)		(4)		
ツメ	炭化穎			(1)				
モモ	核	7(9)	1(3)			3(6)	14(4)	6(2)
トチノキ	種子					(1)		(1)
ブドウ属	種子			4(4)				
不明	葉		1					
	未炭化穎(基部)			2				
イネ	炭化胚乳	527(188)	49(34)	1(2)	705(199)			
	炭化穎(基部)			1	1	4		
コムギ	炭化胚乳	12	8			9		
オオムギ	炭化穎果			1		9(4)		
コムギまたはオオムギ	炭化胚乳	142(15)	19(7)	1	66			
イヌビエーヒエ	炭化穎果	2(3)						
エノコログサ属	穎			2				
ホタルイ属A	果実		11	2(4)				
ホタルイ属B	果実		1			3		
イボクサ	炭化穎果					1		
アサ	種子			1				
カナダグラ	炭化種子		1					
サンエタデ近似種	果実	6(5)		2(7)				
サンギタデ近似種	果実		2	6(6)		9		
ヌタデ近似種	果実			1	52(9)			
ヨシギシ属	果実				10(1)			
シロザ近似種	種子		7	88				
ヒユ属	種子			48				
ナシ科	種子			18				
オニバス	種子				1			
マメ科	炭化種子	6(8)			(4)			
ニノキグサ	種子			1				
ノブドウ	種子		1(2)		(4)			
ヒシ属	果実					2(3)		
シソ属	果実		6(1)			9(4)		
イヌコウジ属	果実		2(1)	1(1)				
イヌコウジ属またはシソ属	果実	6(1)						
タヌ	種子				(1)			
ナス属	炭化種子		1					
ズメウリ	種子		3					
ヒヨウタン仲間	果実					(3)		
ナモモ	果実		6(5)					

表4. B区の大型植物化石一覧表

数字は個数、()内は半分ないし破片の数を示す

S X1397遺物包含層は上層（14～20層）でモモ、オニグルミ、ヒヨウタン仲間が出土し、モモはやや目立った。中層（21～23層）では、イネが非常に多産し、オオムギ、イヌビエーヒエも比較的多産した。他に、モモ、コムギ、アサ、オニバス、マメ科、ヒシ属、シソ属、ナスなどが出土した。下層（24層）は、イネとオオムギのみが僅かに出土した。

A区 S E1643井戸跡から出土した大型植物化石（表5）

木本は稀で、ケヤキ、クワ属、バラ科刺？、サンショウ、ブドウ属が僅かに出土した。草本は、分類群数（27分類群）・個数ともに多かった。圧倒的に多産したのは、イネであり、炭化胚乳が6000個余り、炭化穎果が3000個程度であった。穎（初穎）の小片も多産し、特に炭化したものが多かった。次いで多産したのは、ヒエであり、未炭化穎が100個余り、炭化穎果が300個余りであった。比較的多産したのは、オオムギ炭化穎果、アワ（炭化穎果が多い）、ホタルイ属、ツユクサ属、アサ未炭化種子、ヤナギタデ、タデ属、シロザ近似種、ヒユ属、マメ科炭化種子、シソ近似種未炭化果実であり、中でもアサ、マメ科が多かった。他は稀で、ヘラオモダカ、エノコログサ属、ウキヤガラ、サンエタデ近

分類群・部位\試料番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	
カヤク	果実								1													
クワ属	種子																				1	
モモ	種子																					
バラ科?	刺											28										
サンショウ	種子								1													
ブドウ属	種子								1											1		
ヘラオモダカ	果実																				1	
	未炭化果									(2)												
イネ	炭化果果										166									213(71)	(小片多枚)	
	炭化果																			2696(71)		
	炭化胚乳																			(284)	(小片極多枚)	
オオムギ	炭化果果																			6172(284)	10(14)	
	炭化胚乳																			29(1)		
ヒエ	未炭化果								2(1)	29(2)	3		3(1)								24(10)	
	炭化果果								1	30										8	10	
アワ	未炭化果																					
	炭化果果	1																			3	
	炭化胚乳	1																				
エノコログサ属	果																				1	
エノキヤガラ	果実																					
エタルイ属	果実																				2	
ブクサ属	種子																					
アサ	種子																					
サナエタデ近似種	果実																					
ポンクトタデ	果実																					
ヤナギタデ	果実																					
タデ属	炭化果実	5							1												4	
シロザ近似種	種子	25																			8	
ヒユ属	種子	15																				
マメ科	炭化種子								2(1)		1			57(28)	1						(1)	
エノキギサ	種子	2							1													
シソ近似種	果実									7												
イヌコウジュ属	未炭化果実																				2	
	炭化果実																					
イヌコウジュ属主	果実																				1	
たはシソ属	種子																					
ナス属	種子																					
メロン仲間	種子		1									(4)										
ヒョウタン仲間	種子											(4)										
メナモミ	果実																				1	
ベニバナ	炭化種子																					
キク科	果実																				1	

表5. A区SE1643井戸跡の大型植物化石一覧表 数字は個数、()内は半分ないし破片の数を示す

似種、ポンクトタデ、エノキギサ、イヌコウジュ属（未炭化果実・炭化果実）、イヌコウジュ属またはシソ属未炭化果実、ナス属、メロン仲間、ヒョウタン仲間種子、メナモミ、ベニバナ、キク科が出土した。

III. 考察

平安時代末期（12世紀頃）の栽培・利用状況および周辺植生（4区S X1200）

出土したもののうち、栽培植物と考えられるものは、ウメ、モモ、イネ、コムギ、オオムギ、アサ、シソ属、ナス、ヒョウタン仲間、メロン仲間であり、イヌビエーヒエ、マメ科もその可能性が考えられる。他に、オニグルミ、クリも利用されていたであろう。河川は氾濫によって埋没した後に湿地化し、ゴミ捨て場となった（S X1200）と推定されているが（村田晃一2001、村田晃一・茂木好光2002）、これら栽培・利用植物は、利用後に投棄されたものと予想される。なお、周辺の遺跡の山王遺跡では、6世紀後半から10世紀前半にかけての大型植物遺体が検討されている（阿部美和・辻誠一郎2001）。これと比較すると、栽培・利用植物は概ね類似しており、本遺跡で出土した栽培・利用植物は、この地域一带に普及していたのではないかと思われる。しかし、山王遺跡のスマモ、ソバ、ベニバナは本遺跡では出土せず、逆に本遺跡で比較的多産するイヌビエーヒエは、山王遺跡ではヒエ？とされ

ているものが1個体出土している程度といった違いもある。両遺跡では対象としている時期が異なるので、はつきりとしたことは言えないが、スモモ、ソバ、ベニバナ、イヌビエーヒエといった一部の分類群については、両遺跡間に栽培・利用状況の差異があった可能性も考えられる。

古植生についてみると、草本において多様な水生植物が目立つ特徴がある。具体的には、湿地性ないし抽水植物のミクリ属、ヘラオモダカ、オモダカ科、ウキヤガラ、ホタルイ属A、ホタルイ属B、イボクサ、ミゾソバ、サデクサ、サナエタデ近似種、ヤナギタデ近似種、ツリフネソウ、ドクゼリ属またはセリ属、タカサゴロウ、浮葉ないし沈水植物のヒルムシロ属、コウホネ属、ヒシ属である。これらは、河川や湿地に生育していたと考えられるが、ヒルムシロ属、コウホネ属、ヒシ属の出土から、幾分水深のある水域が存在していたことが予想される。緩やかな流水中に生育する分類群を含むヒルムシロ属は下層（19層）では比較的目立つが、下層（18層）では減少し、17層より上では全く出土しなくなる。これは、堆積層が下層（14～17層）から砂質に変化することに対応している。

一方、エノコログサ属、カナムグラ、シロザ近似種、ヒユ属、カタバミ属、エノキグサ、メナモミ、オナモミなども出土しており、畑地や路傍のような幾分乾き気味の場所も存在していたことが予想される。木本については、ゴミ捨て場に投棄されたと予想されるオニグルミ、ウメ、モモを除くと、下層（19層）でモミ属、キイチゴ属、サンショウ、ブドウ属、ヒサカキ、下層（18層）でキイチゴ属、下層（14～17層）でコナラ属、コブシ、クマノミズキが僅かに出土したのみである。これらが付近に生育していたと思われるが、出土分類群数・個数共に少なく、森林植生についての情報は乏しい。このような状況から、S X1200遺物包含層の付近には森林と呼べるほどの林分はみられなかった可能性が考えられる。

鎌倉時代～南北朝時代（13～14世紀頃）の栽培・利用状況および周辺植生（B区 S K1310・S K1311、S X1397）

出土した栽培・利用植物は、クリ、メロン仲間が出土していないことを除いて12世紀と同様である。これらは鎌倉時代～南北朝時代（13～14世紀代）を中心とした屋敷跡（屋敷G・G'）に関わる遺構土したが、直接投棄されたものや、生活の場で投棄されたものが流入したと予想される。古植生については、S X1397遺物包含層の中層からホタルイ属B、サナエタデ近似種、オニバス、ヒシ属が出土しており、湿地跡にこれらが生育していたと考えられる。オニバス、ヒシ属の出土から、幾分水深のある水域も存在していたであろう。

S K1310・1311土壤では、ホタルイ属A、ホタルイ属B、イボクサ、ナエタデ近似種、ヤナギタデ近似種、スズメウリが出土しており、湿地跡からの流入や遺構自体が水溜りのような環境であったことが予想される。また、エノコログサ属、ギシギシ属、シロザ近似種、ヒユ属、エノキグサ、メナモミは、特にS K1311で目立つ為、これらの生育に適した幾分乾き気味の場所も存在していたと予想される。木本では、オニグルミ、ウメ、モモは利用後に投棄されたと考えられ、トチノキもその可能性がある。これらを除くと、S K1310でイヌシデ、S K1311でキイチゴ属、ブドウ属、S X1397中層でキイチゴ属が僅かに出土したのみであり、森林植生についての情報に乏しく、これら遺構の付近には森林と呼べるほどのものはみられなかった可能性が考えられる。

室町時代(15~16世紀後半頃)の栽培・利用状況および周辺植生(2区SK1205、4区SD1284)

4区SD1284区画溝跡はオニグルミ、その他はモモを出土したのみであった。2区SK1205土壌では、栽培植物としてイネ、アサ、ナスが出土したが、個数としては多くはない。多産ないし目立つのは、ホタルイ属A、イボクサ、サナエタデ近似種、ヒシ、ドクゼリ属またはセリ属であり、これらが生育するような湿地がみられ、ヒシの出土から若干水深のある場所もみられたであろう。また、エノコログサ属、シロザ近似種、イヌコウジュ属、メナモミが生育するような路傍ないし畠地といった幾分乾き気味の場所もみられたであろう。木本についてはニワトコが1個体出土したのみであり、森林植生についての情報は乏しい。

江戸時代(17世紀後半以降)の栽培・利用状況および周辺植生(A区SE1643)

出土したもののうち、栽培植物ないしその可能性が高いものは、イネ、オオムギ、ヒエ、アワ、アサ、マメ科、シソ近似種、メロン仲間、ヒヨウタン仲間、ベニバナである。ムギ類ではオオムギは出土したがコムギが出土せず、キビ族ではヒエ、アワは出土したがキビが出土しない特徴があり、このことはムギ類・キビ族の栽培・利用状況を反映している可能性が考えられる。マメ科については大半がササゲ属(アズキやリョクトウの類)と考えられる。また、採油用などとして栽培・利用されるベニバナが1点と少ないながら出土したことは注目される。

周辺植生については、木本は出土分類群数・個数ともに少なく、森林植生についての情報量に乏しい。出土したのは、落葉広葉樹のケヤキ、クワ属、サンショウ、蔓性のブドウ属であった。草本類についてみると、湿地ないし抽水性のヘラオモダカ、ウキヤガラ、ホタルイ属、サナエタデ近似種、ポントクタデ、ヤナギタデが出土することから、水位の低い湿地ないし水溜りの存在が予想されるが、イネが多産していることから水田が存在していた可能性も考えられる。また、エノコログサ属、シロザ近似種、ヒニ属、エノキグサ、メナモミなどが出土することから、路傍ないし畠地のような乾いた場所もみられたと考えられる。

第3節 出土木製品の分析

ここでは、本遺跡から出土した木製品のうち計121点についての樹種同定結果を報告する。対象とする木製品の器種は、遺跡北部および南部の井戸、土坑、区画溝跡、遺物包含層などから出土した櫛・漆器類・折敷・曲物・柄杓・エブリ・横槌・下駄(差歛・連歛)・木鍤・井戸枠・棺桶など多岐にわたっており、これらの木製品の樹種を比較することで、器種別の用材選択がより明瞭になることが期待される。また、これら木製品の時代は12世紀~17世紀以降までと様々であり、時代的な樹種選択の変容についても注目される。特に今まで宮城県内では類例の少なかった12世紀・13世紀代の木製

調査区	道 標	点数
2	S B1358(S1-#1)	1
	SD1209南辺	1
	S E1211	2
	SK1205	1
	SK1241	1
	SD1202	1
3	SD1100	1
	SK1260	2
	SK1260	1
4	S X1200	39
	SD1284	1
	SK1285	3
5	SE1455	3
	SE1456	1
	SK1454	13
	SK1458	5
	SK1471	1
	SD1494	2
A	SD1633	1
	SD1633 A	3
	SE1652	1
	SE1643	3
B	SD1319	1
	SD1501 B	1
	SE1534	4
	SE1539	8
	SK1310	1
	S X1397-中層	7
	S X1397-上層	4
	SD2241	2
C	SE1604	1
	SE1611	1
	S X1607	1
	S X1616	3
計		121

表6. 樹種同定対象一覧

品が含まれているということは、資料の蓄積という面においても貴重であるといえる。

I. 方法

出土木製品から直接、剃刀を用いて破損面などを中心に横断面・放射断面・接線断面の3断面の切片を作成し、ガムクロラール(アラビアゴム、抱水クロラール、グリセリン、蒸留水の混合液)で封入してプレパラートとした。検鏡は光学顕微鏡を用いて40~400倍で行い、同定は現生標本との対照に拠った。なお、井戸枠材の中には樹皮の残存が認められるものがあった為、作成した切片の最外年輪および形成層の状態により、伐採季節の推定を行った。同定したプレパラートはMIG-の頭文字と通し番号を付してパレオ・ラボに保管した(MIG-1093~1213)。

保管番号MIG-	番号	調査区	遺構名	層位	器種	登録No.	樹種	時代
1093	1	B	S X1397	中層	楓櫟	01201	コナラ節	13世紀
1094	2	2	S D1209-南辺	底面付近	不明	01202	クマノミズキ類	16世紀後半~17世紀前半
1095	3	2	S B1358(S1-W1)	柱材		01203	クリ	16世紀後半~17世紀前半
1096	4	4	S X1200	下層(19層)	杓子	01204	モミ属	12世紀前半
1097	5	4	S K1285	堆積土	漆蘆下駄	01205	ケヤキ	15世紀~16世紀後半
1098	6	3	S K1260	堆積土	漆椀	01206	ブナ属	15世紀~16世紀後半
1099	7	2	S D1233	堆積土	漆椀	01207	ブナ属	15世紀~16世紀後半
1100	8	4	S D1284	堆積土	皿	01208	ブナ属	15世紀~16世紀後半
1101	9	4	S X1200	下層(14~17層)	不明	01209	モミ属	12世紀前半
1102	10	4	S X1200	下層(14~17層)	不明	01210	モミ属	12世紀前半
1103	11	2	S K1205	堆積土	建築部材	01211	モクレン属	15世紀~16世紀後半
1104	12	B	S X1397	中層	鞘	01212	モミ属	13世紀頃
1105	13	B	S X1397	中層	漆鉢	01213	ケヤキ	13世紀頃
1106	14	B	S X1397	中層	不明	01214	アサダ	13世紀頃
1107	15	B	S X1397	中層	建築部材	01215	コナラ節	13世紀頃
1108	16	B	S X1397	中層	円形曲物底板	01216	モミ属	13世紀頃
1109	17	B	S X1397	上層	漆椀	01217	ケヤキ	13世紀頃
1110	18	4	S X1200	下層(14~17層)	漆甌	01218	モミ属	12世紀前半
1111	19	4	S X1200	下層(14~17層)	箸	01219	モミ属	12世紀前半
1112	20	3	S K1260	6層	底板楓円形曲物底板	01220	ヒノキ科	15世紀~16世紀後半
1113	21	2	S K1241	堆積土	井戸枠(削抜き)	01221	サワグルミ	15世紀~16世紀後半
1114	22	B	S K1310	堆積土	漆小皿	01222	ケヤキ	13世紀頃
1115	23	4	S X1200	下層(18層)	漆	01223	イスノキ	12世紀前半
1116	24	4	S X1200	下層(14~17層)	漆	01224	モッコク	12世紀前半
1117	25	4	S X1200	下層(18層)	漆	01225	イスノキ	12世紀前半
1118	26	4	S X1200	下層(14~17層)	鞘	01226	ヒノキ	12世紀前半
1119	27	B	S X1397	上層	手火	01227	スキ	13世紀頃
1120	28	B	S X1397	上層	薪(曲物底板or折枝)	01228	アカマツ	13世紀頃
1121	29	4	S X1200	下層(14~17層)	曲物側板	01229	モミ属	12世紀前半
1122	30	B	S X1397	上層	不明	01230	ケヤキ	13世紀頃
1123	31	B	S D1319	堆積土	柄or部材	01231	モミ属	15世紀~16世紀後半
1124	32	B	S D2241	堆積土	盆	01232	ケヤキ	15世紀~16世紀後半
1125	33	2	S E1211	堆積土	建築部材	01233	ナシア科	16世紀後半~17世紀前半
1126	34	2	S E1211	堆積土	部材(波化材)	01234	ブナ属	16世紀後半~17世紀前半
1127	35	4	S X1200	下層(18層)	板材	01235	モミ属	12世紀前半
1128	36	4	S X1200	下層(18層)	手火	01236	アカマツ	12世紀前半
1129	37	4	S K1285	堆積土	火薬棒のオサ工具?	01237	モミ属	15世紀~16世紀後半
1130	38	4	S K1285	堆積土	折枝	01238	モミ属	15世紀~16世紀後半
1131	39	4	S X1200	下層(14~17層)	手火	01239	アカマツ	12世紀前半
1132	40	4	S X1200	下層(14~17層)	手火	01240	アカマツ	12世紀前半
1133	41	4	S X1200	下層(14~17層)	薪	01241	アカマツ	12世紀前半
1134	42	B	S D2241	堆積土	手火	01242	カラマツ属	15世紀~16世紀後半
1135	43	3	S K1260	堆積土	漆椀	01243	ブナ属	15世紀~16世紀後半
1136	44	B	S X1397	中層	部材	01244	モミ属	13世紀頃
1137	45	4	S X1200	下層(14~17層)	部材	01245	コナラ節	12世紀前半
1138	46	4	S X1200	下層(14~17層)	部材	01246	コナラ節	12世紀前半
1139	47	4	S X1200	下層(14~17層)	部材	01247	イヌシデ節	12世紀前半
1140	48	4	S X1200	下層(14~17層)	薪	01248	タヌギ属	12世紀前半
1141	49	4	S X1200	下層(14~17層)	手火	01249	スキ	12世紀前半
1142	50	4	S X1200	下層(14~17層)	手火	01250	アカマツ	12世紀前半
1143	51	3	S D1100	河床	自然木	01251	ヤナギ属	11世紀以前

表7. 中野高柳遺跡出土木製品の樹種同定結果一覧

(2001年度委託分)

保管番号/MIG	番号	調査区	遺構名	層位	樹種	登録No.	樹種	木取り	時代
1144	1	A	S E1643	堆	漆樹	02201	ブナ属	横木取り	17世紀以降
1145	2	4	S X1200	中層(13)	漆樹下駄	02202	クリ	横木取り(絞目)	12世紀中頃
1146	3	4	S X1200	上層(9・10)	漆樹	02203	ケヤキ	横木取り	12世紀後半
1147	4	5	S K1458	3層	木鍛	02210	ナシ亜科	芯持	14世紀前半
1148	5	5	S K1458	3層	樹皮製底板	02211	ケヤキ	板目	14世紀前半
1149	6	5	S E1455	4層	硝内・側底板	02218	モミ属	板目	
1150	7	5	S E1455	4層	硝内・底板	02219	モミ属	板目	
1151	8	5	S K1454	堆	木鍛	02220	クリ	芯去	15世紀後半
1152	9	5	S K1454	堆	木鍛	02221	クリ	芯去	15世紀後半
1153	10	5	S K1454	堆	木鍛	02222	クリ	芯去	15世紀後半
1154	11	5	S K1454	堆	木鍛	02223	クリ	芯去	15世紀後半
1155	12	A	S D1633A	堆	漆樹	02226	ブナ属	横木取り	17世紀以降
1156	13	C	S E1604	底面	折敷・底板	02235	スギ	板目	13世紀?
1157	14	5	S K1454	堆	漆樹	02245	ブナ属	横木取り	15世紀後半
1158	15	5	S K1458	2層	漆樹	02246	リケン	横木取り	14世紀前半
1159	16	5	S K1454	堆	漆大皿	02247	トチノキ	横木取り	15世紀後半
1160	17	5	S E1456	下層	漆樹	02248	ブナ属	横木取り	13世紀
1161	18-1	4	S X1200	上層(9・10)	折敷・底板	02249	スギ	斜め	12世紀後半
1162	18-2	4	S X1200	折敷・側板	02249	スギ	板目		
1163	19	5	S K1458	3層	エブリ	02250	モクレン属	板目	14世紀前半
1164	20	5	S E1455	3層	硝内	02251	タヌキ善	芯去	
1165	21	4	S X1200	上層(9・10)	硝内	02252	コナラ属	板目	12世紀後半
1166	22	4	S X1200	上層(9・10)	漆樹	02204	ケヤキ	横木取り	12世紀後半
1167	23	5	S K1454	堆	横櫛	02205	ツツジ科	横木取り(絞目)	15世紀後半
1168	24	4	S X1200	上層(12)	横櫛	02206	イスノキ	横木取り(絞目)	12世紀後半
1169	25	5	S K1471	堆	武板	02207	クロベ	板目	
1170	26	4	S X1200	上層(9・10)	吗?	02208	モミ属	芯持	12世紀後半
1171	27	4	S X1200	上層(9・10)	エブリ?	02209	コナラ属	板目	12世紀後半
1172	28	5	S K1454	上層(9・10)	不明(高状)	02212	アスナロ	板目	15世紀後半
1173	29	5	S K1454	堆	硝内・側板	02213	アスナロ	板目	15世紀後半
1174	30	5	S K1454	堆	横櫛	02214	ブナ属	芯持?	15世紀後半
1175	31	4	S X1200	上層(9・10)	硝	02215	ケンボナシ属	芯去	12世紀後半
1176	32	5	S K1458	2層	折敷・底板	02216	クロベ	板目	14世紀前半
1177	33	5	S K1454	堆	木鍛	02224	クリ	芯去	15世紀後半
1178	34	A	S E1652	底面	漆樹下駄(衛)	02227	ケヤキ	板目	17世紀以降
1179	35	A	S D1633A	堆	漆樹	02229	ブナ属	横木取り	17世紀以降
1180	36	C	S X1616	堆	數珠	02230	カキノキ属	削り出し	17世紀以降
1181	37	B	S D1501B	堆	不明(球状)	02232	ヒノキ	削り出し	13~14世紀頃
1182	38	C	S X1607	堆	漆樹	02241	ケヤキ	横木取り	13世紀頃
1183	39	5	S K1454	堆	漆樹	02242	トチノキ	横木取り	15世紀後半
1184	40	4	S X1200	上層(12)	硝内・底板	02244	スギ	板目	12世紀後半
1185	41	4	S X1200	上層(9・10)	漆樹	02216	ケヤキ	横木取り	12世紀後半
1186	42	5	S K1454	堆	武板	02225	クロベ	板目	15世紀後半
1187	43	A	S D1633A	堆	硝内	02228	ケンボナシ属	芯去	17世紀以降
1188	44	C	S E1611	堆	草履	02231	アスナロ	板目	
1189	45	4	S X1200	イカク	曲物・側板	02223	モミ属	板目	12世紀後半?
1190	46	4	S X1200	イカク	手火	02234	モクヅラ	半裁状	12世紀後半?
1191	47	4	S X1200	上崩(12)	手火	02236	マツ属難管束直属	芯去り	12世紀後半?
1192	48	4	S X1200	上崩(9・10)	武板	02237	モミ属	板目	12世紀後半
1193	49	4	S X1200	上崩(9・10)	不明(挿棒)	022378	スギ	板目	12世紀後半
1194	50	A	S D1633	上崩(12)	漆小皿	02240	—	17世紀以降	
1195	51	4	S X1200	上崩(12)	折敷・側板	02243	スギ	角状(二方絞)	12世紀後半
1196	52	B	S E1534	埋	砂模様・東	02253	17世紀以降?	芯持	17世紀以降?
1197	53	B	S E1534	埋	砂模様・西	02254	エゴノキ属	芯持	17世紀以降?
1198	54	B	S E1534	埋	砂模様・南	02255	カエデ属	芯持	17世紀以降?
1199	55	B	S E1539	埋	砂上段模様・東	02256	コナラ属	芯持	17世紀以降?
1200	56	B	S E1539	埋	砂上段模様・西	02257	クリ	芯持	17世紀以降?
1201	57	B	S E1539	埋	砂上段模様・南	02258	クリ	芯持	17世紀以降?
1202	58	B	S E1539	埋	砂上段模様・北	02259	クリ	芯持	17世紀以降?
1203	59	B	S E1539	埋	砂下段模様・東	02260	クリ	半裁	17世紀以降?
1204	60	B	S E1539	埋	砂下段模様・西	02261	クリ	半裁	17世紀以降?
1205	61	B	S E1539	埋	砂下段模様・南	02262	クリ	みかん割(四分割)	17世紀以降?
1206	62	B	S E1539	埋	砂下段模様・北	02263	クリ	みかん割(四分割)	17世紀以降?
1207	63	C	S X1616	埋	硝桙底板	02264	マツ属難管束直属	斜め	17世紀以降?
1208	64	C	S X1616	埋	硝桙側板	02265	針葉樹材	板目	17世紀以降?
1209	65	A	S E1643	堆	底板	02266	ハンノキ属直属	板目	17世紀以降?
1210	66	A	S E1643	堆	直孔鉢	02267	ユズリハ属類似種	板目	17世紀以降?
1211	67	5	S D1494	堆	漆樹下駄(衛)	02268	ケヤキ	板目	17世紀以降
1212	68	5	S D1494	堆	不明(内柱状)	02269	ケヤキ	板目	17世紀以降
1213	69	B	S D1534	堆	砂側板	02239	タケ苗科	板目	17世紀以降?

表8. 中野高柳遺跡出土木製品の樹種同定結果

(2002年度委託分)

II. 結果

樹種同定の結果の一覧を表7・8に示す。樹種同定の結果検出された分類群は計31分類群で、内訳は針葉樹材でカラマツ属・アカマツ・クロマツ・モミ属・スギ・ヒノキ・クロベ・アスナロの計8分類群、広葉樹材でサワグルミ・ヤナギ属・ハンノキ亜属・イヌシデ節・アサダ・ブナ属・コナラ節・クヌギ節・クリ・ケヤキ・モクレン属・モッコク・イスノキ・ナシ亜科・カエデ属・トチノキ・ケンボナシ属・クマノミズキ類・ツツジ科・カキノキ属・エゴノキ属の計22分類群、そのほかタケ亜科である。なお、伐採季節についてはMIG-1196・1197・1198の井戸枠材は夏に伐採されており、MIG-1199の井戸枠材は早春にそれぞれ伐採されていた。下に、検出された分類群の解剖学的な記載を行って同定の根拠を提示するとともに、写真図版に代表的な切片の光学顕微鏡写真を掲げる。なお、記載に示さないもので、表中にマツ属複維管束亜属とあるのはアカマツ・クロマツのどちらの材か、ニレ科としたものはケヤキ・エノキ属・ニレ属のいずれの材か、ヒノキ科としたものはヒノキ・サワラ・アスナロ・クロベ・ビャクシン属のいずれの材か、それぞれ材組織の乾燥や保存不良などで区別がなし得なかったものである。また対象とした木製品のうち、MIG-1194の漆盃は皮膜のみで木胎部が残存しておらず、切片の採取が不可能であった。

III. 考察

器種別の構成樹種の傾向

ここでは、主な器種別にその樹種構成の特徴とその背景についてみていくこととする。

(1) 樅

まず櫛には、5点中3点とイスノキが最も多く見出されている（表9）。イスノキは日本産の木材の中でも最も重硬かつ強靭な部類の材で、非常に割れにくいので櫛の用材として優れており、各地で出土例がある。木取りも製作過程で割れにくく

器種(点数)	樹種(検出数)	12世紀頃	15世紀後半
櫛(5)	イスノキ(3)	3	
	モッコク(1)	1	
	ツツジ科(1)		1

表9. 櫛の用材

ように繊維方向を製品の縦方向に取った縦木取りである。イスノキは現在の分布からみても過去に本遺跡周辺に自生していた可能性は考えられなく、製品（あるいは木材）自体が搬入されたものであることを示唆している。その他では、イスノキ製のものと同時期のものでモッコクの材が、また15世紀後半のものでツツジ科の材がそれぞれ1点ずつみだされており、イスノキには及ばないもののいずれも緻密で肌目が細かく、硬く割れにくい材が用いられていることがわかる。モッコクも時として櫛の用材として見出される材で、イスノキ製のものと同様に分布からみて搬入品であると考えられる。一方ツツジ科の材が櫛に見出されることは珍しく、こちらは木材が現地調達された可能性が残されている。なお、同じツツジ科の材利用としては、仙台市高田B遺跡出土の下駄にヨウラクツツジ属が用いられている事例がある（鈴木三男・能城修一2000）。

周辺の遺跡における櫛の樹種同定例を参照してみると、多賀城市市川橋遺跡においてイスノキ、ツゲ、カナメモチが（松葉礼子2001a）、仙台市下飯田遺跡や仙台市中在家南遺跡においてイスノキが（高橋利彦1995、鈴木三男ほか1996）、多賀城市山王遺跡多賀前地区でツゲが見出されており（松葉礼子・

鈴木三男1996)、イスノキ製の櫛が見出されているという点で共通性を有するものの、モッコクやツツジ科製の櫛が使用されていた点は特徴的であるといえる。

(2) 手火・薪

手火としては12世紀・13世紀頃のものが出土しており、アカマツ・クロマツ・カラマツ属・マツ属複維管束亜属といった火付きが良く樹脂分の多い針葉樹材が多く用いられている(表10)。このなかで

器種(点数)	樹種(検出数)	12世紀頃	13世紀頃
手火(9)	アカマツ(4)	4	
	カラマツ属(1)		
	クロマツ(1)	1	
	スギ(2)	1	1
薪(3)	マツ属複維管束亜属(1)	1	
	アカマツ(2)	1	1
	クヌギ節(1)	1	

表10. 手火・薪の用材

注目されるのはカラマツ属である。母植物はカラマツと考えられるが、現在の分布からみると県内的一部の高海拔地域にしか生育していない。周辺の遺跡における手火の用材としてもアカマツやクロマツといったマツ類が圧倒的に多く用いられており(例えば、松葉礼子・鈴木三男1996、松葉礼子 2001a)、本遺跡の結果はこれらと調和的である。

薪としては3点中2点とアカマツが、その他にクヌギ節が1点用いられている。クヌギ節の材は燃料材として最も典型的なもの一つで、原本の乾燥により広放射組織(木口面で放射方向に走る髓線として確認される)に沿って割れが入り、そのため火付きがよい特徴がある。木材の採取という観点からは、クヌギ節(クヌギと考えられる)の樹種は高い萌芽特性を有し、幹が株立ち状になることが多いことから薪を採取し易かつたことも想定される。アカマツはクヌギ節の樹種のように栄養繁殖はないので幹が株立ち状になることはないが、植生への過度の干渉により周辺で増加し始めており、薪の採取に適度な個体もみられたものと想定される。

(3) 挽物・剣物

挽物・剣物の類としては椀・大皿・小皿・鉢・盃・盆があり、ほとんどは漆塗りの製品である。これらの製品に使用されていた樹種は広葉樹材のケヤキ・トチノキ・ブナ属で、かつ日本における剣物・挽物の用材として最も典型的なものである(表11)。ケヤキ・トチノキ・ブナ属の材はいずれも均質な材質を有し、また木目が美しいことで知られている。全体でみるとケヤキが最も多く、椀・小皿・鉢・盆など形状的にも様々な製品に用いられている。材質に着目してみると、椀には硬く回転成形に適するケヤキ・ブナ属材が用いられているのに対して、大皿には軽軟で削り容易なトチノキ材が見出されていて対称的であり、製作過程で要求される材質に見合った樹種が選択されているといえる。

器種(点数)	樹種(検出数)	12世紀頃	13~14世紀頃	15~16世紀後半	17世紀以降
漆椀(13)	ケヤキ(4)	3	2		
	ブナ属(7)		1	3	3
	トチノキ(1)			1	
漆小皿(2)	ケヤキ(1)		1		
	ニレ科(1)		1		
漆鉢(2)	トチノキ(1)			1	
	ケヤキ(1)		1		
漆盆(1)	ケヤキ(1)			1	
	ブナ属(1)				1

表11. 挽物・剣物の用材

(4) 農具・漁撈具

木鍤にはクリ、ナシ亜科といった重い材質の樹種が選択されており、木鍤の使用法を考えれば納得のいく樹種選択である。6点中5点とクリが多用されていることや、またその法量が揃っていることは、なるべく同じ重さのもので揃えようとした結果とみられる。木取りは芯を外してあり、おそらく

一本の原木から効率よく取られたものであろう。対してナシ亜科のものは芯持であるが、これはナシ亜科に小高木程度の樹種が多く適度な幹材をそのまま利用で

器種(点数)	樹種(検出数)	12世紀頃	13~14世紀頃	15~16世紀後半	17世紀後半以降
木錐(6)	クリ(5)			5	
	ナシ亜科(1)		1		
横柾(2)	コナラ節(1)		1		
	ブナ属(1)			1	
堅杵(1)	クヌギ節(1)			1	
櫂(1)	コナラ節(1)	1			
鎌柄(1)	ケンボナシ属(1)				1
エブリ(1)	モクレン属(1)		1		
エブリ?(1)	コナラ節(1)	1			

表12. 農具・漁撈具の用材

きたことや幹の中心が空洞になることもほとんどない樹種であることが要因に考えられる。一般に、木錐には決まった樹種が選択されるわけではないが、このように重い材質のものがその用材に選択される傾向にある。

横柾にはコナラ節・ブナ属といった樹種が、堅杵にクヌギ節の材が、櫂にはコナラ節の材が用いられていた。いずれも重硬な弹性のある材であり、これらの製品の使用法を考慮した用材選択が認められる。

鎌柄にはケンボナシ属の材が用いられているが、これは珍しい結果とも考えられる。ケンボナシ属の材質はケヤキやヤマグワなどに似て韌性があり、材質からみれば柄の用材として選択されていても不思議ではない。これ以外にも本遺跡では柄にケンボナシ属の材が見出されている(表16)。時代は異なるが高田B遺跡出土の弥生中期のもので直柄平鉢未製品と農具の柄とみられる製品に用いられている例が知られている(鈴木三男・能城修一2000)。

エブリにはコナラ節、モクレン属が各1点ずつ見出されている。コナラ節の材は重硬かつ弹性に富む材質を有するので耕起に耐え得るよう丈夫な材が選択されていると考えられる。コナラ節の材はクヌギ節に比べれば圧倒的に少ないと県内では古くからこうした農具の用材に認められている。対してモクレン属の材は概して軽軟であり、材質のみからみると物足りない面があるが、操作性を意図して軽快な作りにしたのか、また時代的には12~14世紀頃と考えられており耕起の面で時代的な差異が影響しているのか今のところ不明である。

(5) 曲物・柄杓・折敷その他の食膳具

曲物・柄杓・折敷といった容器・食膳具の類にはそのほとんどに針葉樹材が用いられているという点で、一般的な傾向に合致する結果である。広葉樹材はケヤキとハンノキ亜属の材が各1点ずつ見出されているのみであり、いずれも底板に用途が限定されている。用いられていた針葉樹材はモミ属・スギ・アスナロ・クロベと実に様々な樹種が用いられており、こうした針葉樹材が通直かつ板目・杣目のどちらにも割裂容易で板材をとり易いことから用いられたのであろう。モミ属材の多用は山王遺跡多賀前地区や市川橋遺跡といった近隣の遺跡において確認してきた傾向であり(松葉礼子・鈴木三男1996、松葉礼子 2001 a)、またスギ材の多用は本遺跡と離れた一本柳遺跡において確認してきた傾向であるが(松葉礼子1998・2001 b)、本遺跡ではモミ属とスギの材がほぼ同等に用いられている特徴が認められる。また、クロベの材が用いられている点も本遺跡の特徴として挙げられる。周辺の遺跡でクロベが見出されている事例は少なく、押口遺跡・高田B遺跡などに限られる(鈴木三男ほか1996、鈴木三男・能城修一 2000)。

木取りをみると、曲物・柄杓の側板は柾目取りされているのに対し、曲物・柄杓・折敷の底板では板目取り・柾目取り・斜め取り（追柾目）と一般的な傾向ではなく、木取りに限定されていないことがわかる。側板に柾目板が用いられているのは、板目に取ると比べて薄板にし易く、また曲げやすい為であろう。

器種(点数)	樹種(検出数)	12世紀頃	13~14世紀	15~16世紀後半	17世紀後半以降
曲物・側板(2)	モミ属(2)	2			
円形曲物底板(1)	モミ属(1)		1		
楕円形曲物底板(1)	ヒノキ科(1)			1	
柄杓・側板(1)	モミ属(1)			1	
柄杓・側板(1)	アスナロ(1)			1	
柄杓・底板(2)	スギ(1)	1			
	モミ属(1)			1	
折敷(1)	モミ属(1)			1	
折敷・側板(1)	スギ(1)	1			
折敷・底板(4)	クロベ(2)		1	1	
	スギ(2)	2			
底板(1)	クロベ(2)			1	
	ハンノキ属(1)				1
	モミ属(1)	1			
樹皮製底板(1)	ケヤキ(1)		1		
竿(1)	モミ属(1)	1			
漆箋(1)	モミ属(1)	1			
杓子(1)	モミ属(1)	1			

表13. 曲物・柄杓・折敷・その他の食膳具の用材

(6) 履物類

これまで県内で確認されてきた下駄の用材としてはケヤキが多く、その次にクリが多い傾向があり、また中には差

器種(点数)	樹種(検出数)	12世紀	15~16世紀後半	17世紀後半以降	時期不明
差歛下駄(2)	ケヤキ(2)			2	
連歛下駄(2)	クリ(1)		1		
	ケヤキ(1)			1	
板草履(1)					1

表14. 履物の用材

歛下駄（特に歛）にはケヤキが多く、連歛下駄にはクリが多い傾向も認められる（例えば、高橋利彦1994、松葉礼子1998 b・2001 b）。本遺跡の結果においてもケヤキは多用されており、また差歛下駄にはすべてケヤキが、連歛下駄にはケヤキだけでなくクリが見出されており、県内の一般的な傾向に付随するものであるといえる。

板草履としてはアスナロが見出されている。こちらも用材としてはスギ・ヒノキ属・モミ属といった針葉樹材が用いられており（高橋利彦1995、松葉礼子1998 b・2001 b）、針葉樹材が用いられているという点で共通性が見出せる。こうした傾向は、製作過程での板材への製材のし易さや、材が軽いことから軽快な作りにできるなど影響しているものとみられる。

(7) 井戸枠

対象とした井戸枠材は、2区SK1241土坑が1点、B区SE1534井戸跡が3点、B区SE1539井戸跡が9点である。S

遺構	器種(点数)	樹種(検出数)	15~16世紀後半	17世紀後半以降
S K1241	井戸枠(削ぎき)(1)	サワグルミ(1)	1	
SE 1534	井戸枠(横桟)(4)	エゴノキ属(1) カエデ属(2)		1 2
SE 1539	井戸枠(横桟)(8)	コナラ節(1) クリ(7)	1 7	
	井戸枠(1)	タケシ科(1)	1	

表15. 井戸枠の用材

K1241の井戸枠は削ぎきの井戸側材で、切削り加工の容易なサワグルミの材が用いられていた。サワグルミは通直な伸長をし、かつ大径になる為、材質と合わせて削ぎきの井戸枠を製作する条件を備え

ているといえる。遺跡周辺の低地や丘陵の溪畔にはそうしたサワグルミがみられたのであろう。

S E 1534とS E 1539の構造は共通する。タケ亜科(竹苞類)の材を簾状に組み、数段の横桟で保持している。S E 1534の横桟は3点中カエデ属の材が2点、エゴノキ属の材が1点用いられており、丈夫な材が用いられている。木取りは芯持材を加工したものである。なお、この井戸枠材はすべて夏の伐採であり、このことはおそらく原木が同じ林で採取されたことを示唆しているのであろう。

S E 1539は2段分の横桟で、全8点中7点とほとんどにクリが用いられている。残りの1点はコナラ節で、いずれも丈夫な材である。特にクリの材は水質に対する耐性が高いことで知られている。木取りをみると斎一ではなく、芯持、半裁、みかん割材から加工した材が用いられている。これは、例えばたまたま大径のクリ材があつてその分割材を井戸材に用いたのではなく、わざわざ比較的小径の原木を少なくとも数本用いていることを意味しており、クリ材の重点的な使用の背景には丈夫で水質に強いクリの材質への認識と嗜好性が働いたものと考えられる。なお、7点あるクリ材のうち、1点は早春に伐採されており、コナラ節の1点は夏に伐採されている。仮に残りの6点のクリ材が同じ時期に伐採され、それほど時間をおかず井戸枠が構築されたのならば、コナラ節の材が1点のみ用いられているのは補修されたことを示している可能性もある。

(8) その他

棺桶は側板・底板が1点ずつあり、そのうちの1点は材組織の保存が悪く針葉樹材であることまで

器種(点数)	樹種(検出数)	11世紀以前	12世紀	13~14世紀	15~16世紀後半	16世紀後半	17世紀後半以降	不明
宿桶側板(1)	針葉樹材(1)						1	
宿桶底板(1)	マツ風複管束胚属(1)						1	
柄(1)	ケンボナシ属(1)			1				
柄or部材(1)	モミ属(1)						1	1
柄(2)	ヒノキ(1)		1					
	モミ属(1)				1			
數珠(1)	カキノキ属(1)						1	
弓?(1)	モミ属(1)		1					
火薬件のオサ工具?(1)	モミ属(1)				1			
自在鉤(1)	ユズリハ属類似種(1)						1	
柱材(1)	クリ(1)					1		
建築部材(3)	コナラ節(1)			1				
	ナシ亜科(1)					1		
	モクレン属(1)					1		
部材(5)	イヌシデ節(1)		1					
	コナラ節(2)		2					
	モミ属(1)			1				
	ブナ属(1)					1		
不明(円柱状)(1)	ケヤキ(1)						1	
不明(球状)(1)	ヒノキ(1)			1				
不明(筒状)(1)	アスナロ(1)				1			
不明(棒状)(1)	スギ(1)		1					
不明(5)	アサダ(1)			1				
	ケヤキ(1)			1				
	クマノミズキ類(1)					1		
	モミ属(2)		2					
自然木(1)	ヤナギ属(1)		1					

表16. その他の器種の用材

しか同定し得なかったが、もう一方の1点（底板）にはマツ属複維管束亜属の材が用いられており、対朽性を意図した使用が伺える。柄or部材とされたものにはモミ属が見出されているが、材質は軽軟であり樹種のみからみれば柄よりも部材であろうか。刀の鞘にはヒノキ・モミ属が各1点ずつ見出されている。ヒノキは宮城県内には分布しない為、製品あるいは木材の搬入が示唆される。同様にヒノキが用いられ搬入品と考えられるものに球状の不明木製品がある。

建築材や柱材には、コナラ節・クリ・ナシ亜科といった丈夫な材が多い。自在鉤には粘りのあるユズリハ属とみられる材が選択されていた。数珠にはカキノキ属の材が用いられていたが、カキノキ属の材は硬く光沢が出るほか色の濃淡に富み、また板目面（接線断面）でリップルマークを呈し、心材部分ではしばしば黒色の縞が入り混じって独特の紋様となる。作成した切片の色からみると出土した数珠に心材部分は用いられてはいないが、材が硬いことから数珠にしたときに数珠玉が突き合う音も良く、また独特の美しい材色を有するために数珠に用いたときに映えることから選択されたのであろう。S X1200が湿地化する前の河川跡 S D1100河川跡出土の自然木は河畔に多いヤナギ属であり、周囲の環境と整合的な結果である。

時代別の変遷の特徴

時代別の変遷で注目されるものに、椀の用材の変容が挙げられる。用材としては12～14世紀頃にはケヤキが用いられていたに対し、15世紀以降になるとブナ属がケヤキにとって変わらようになる特徴がある。このように挽物の用材がケヤキから次第にブナ属への移行することは県内における中世の遺跡において特徴的に認められるようである。例えば、ブナ属材が用いられているのは最も早いもので山王遺跡多賀前地区出土の9世紀末～10世紀初頭の漆器があり、それ以前にはケヤキが用いられているのみでブナ属は用いられていない（松葉礼子・鈴木三男1996）。また市川橋遺跡における10世紀後半以降の漆器、仙台市中田南遺跡における中世後半の漆器、および山王遺跡町地区における近世の漆器はすべてブナ属材が用いられており（松葉礼子1998a・2001a、高橋利彦1994）、仙台市高田B遺跡では近世の漆器のほとんどにブナ属材が用いられている（鈴木三男・能城修一2000）。したがって、現在蓄積されている資料に鑑みると、およそ10世紀前後を境にして挽物へのブナ属材の導入が開始されていることがわかる。

この変化の要因として平地林としてのケヤキが開発により失われたため、より遠方の材が用いられるようになったという考えがある（松葉礼子1998b）。このように現在の植生からみて、一見県内の比較的高標高の山城からもたらされたと考えられる材は今回の調査で他にもいくつか検出されており、手火に用いられていた13世紀頃のカラマツ属の材、折敷などの底板に用いられていた15世紀～16世紀後半頃のクロベの材がある。しかしながら、本遺跡では10世紀以降も13世紀頃までケヤキが挽物に見出されており、それ以降も底板や下駄にケヤキが見出されている。また、山王遺跡町地区や高田B遺跡では近世の下駄（差歛の歯・台、連歛含む）にケヤキが多用されている例もある（松葉礼子1998a、鈴木三男・能城修一2000）。その上、今回同時に行われた花粉分析結果や数例の花粉分析結果（古環境研究所1996a・1996b、守田益宗2000）からは、かつては低標高の丘陵にもブナやイヌブナが生育してい

たことが読み取れ、ブナ属材を用いていることがそのまま遠距離材の使用を示しているものではないことがわかる。同様にクロベもかつてはより低標高の丘陵に生育していた可能性があり、カラマツについても現在の自生地よりも近辺に単木的に分布していたとしてもおかしくない。したがって、単に短距離材の使用から遠距離材の使用という一面では説明しきれない部分がある。本遺跡において13世紀以降になってブナ属・カラマツ属・クロベの材が見出されるようになるのは、中世多賀国府の存在とそれに伴う工人や木地屋といった職人の活動に関連しており、15世紀以降における柵の用材の変化についてはそれ以外に本遺跡の遺構の変遷に関連していることも考えられる。

その他では、いくつかの器種を除いてこれまで宮城県内で行われてきた用材の傾向とほぼ調和的な結果であるといえる。

第4節 まとめ

ここでは、花粉・種実・木製品の各分析での考察を踏まえて、遺跡を取り巻く古環境や、遺跡の人々の栽培植物・木材利用について、12世紀～16世紀における遺構の変遷と併せて総合的に考察したい（註4）。

遺跡およびその周辺の古植生

まず、遺跡を取り巻く古植生であるが、12世紀頃における遺跡の周囲には森林は広がっていない、数種類の樹木が点在していたに過ぎなかつたと考えられる。ただし、遺跡と距離のある周辺の丘陵部には、ブナ・イヌブナ・ナラ類(コナラ・ミズナラなど)を始めとして、シデ類(イヌシデ・サワシバなど)やケヤキなどの落葉性の広葉樹林が広がつており、そこには常緑広葉樹のカシ類(アカガシなど)や、常緑針葉樹のスギも混生していたと考えられる。

13世紀以降の遺跡を取り巻く古植生については、花粉がほとんど産出しなかつたことや、分析対象外であることから詳細については明らかでないが、種実分析から推測すると引き続き遺跡の周囲には森林と呼べるようなものではなく、開発の進んだ環境であったとみられる。

次に、局所的な植生についてであるが、多くの遺物が出土した遺跡北部の12世紀頃に相当する湿地跡(S X1200)には、岸辺～岸辺上部を中心にヤナギタデ・イヌタデ・サナエタデなどのタデ科植物が生育しており、より湿り気のある岸辺を中心にガマ類やヨシ・オギ・カサスグといったイネ科やカヤツリグサ科の高茎草本が生育していたのではないかとみられる。

これらの植物にさほど覆われないやや水深のある場所にはミクリ類やミツガシワなどが、またぬかるんだ場所にはヘラオモダカ・ツリフネソウ類などの比較的低茎の草本が生育していた。やや岸辺から離れたより水深のある場所には、ヒシ類・ヒルムシロ類・コウホネ類・ヒツジグサ・オニバス・サンショウモなどの多様な水生植物の葉が浮いていたとみられる。これら植物の中には現在希少な種も多く含まれているが、かつてはこうした立地にふつうにみられたのであろう。コウホネ類・ヒツジグサ・ヒルムシロ類・オニバスの生育から水の流れはあってもそれほど早いものではなかつたとみられるが、その後、分析地点周囲は堆砂が進み、多様な水生・湿生植物は減少したものとみられる。遺跡南部の13世紀頃に相当する湿地跡(S X1397)には、やはりオニバスやヒシといった水生植物が生育し

ており、やや水深があり、流れはあっても緩やかであったとみられる。

また、土坑内やその周囲には周囲に比べて比高が低いことを反映して、ヤナギタデやサナエタデなどのタデ科、フトイやサンカクイなどのホタルイ属といったやや湿った立地を好む植物が時代を通じて繁茂していたと考えられる。道端などのやや乾燥した立地にはギシギシ・オナモミ・メナモミ・オオバコなど、現在でもそうした立地に身近な植物がみられたと考えられる。

栽培植物利用・木材利用

栽培植物の検出の傾向は、12～14世紀頃と15～16世紀頃とで異なっていた特徴がある。12～14世紀頃における栽培植物、あるいはその可能性のある植物としては、ウメ・モモ・イネ・コムギ・オオムギ・アサ・シソ属・ナス・ヒヨウタン仲間・メロン仲間・イヌビエーヒエ・マメ科・ヒシ属・クリ・オニグルミなどがあり、種類・量ともにかなり多いといえるのに対し、15～16世紀頃のものは種類・量ともに僅かである。また、木製品においてもいくつかの器種の用材が12～14世紀頃と15～16世紀頃とで異なっていた。例えば、櫛では12世紀のものはイスノキ、モッコクといった分布圏外の樹種が見出され、15～16世紀頃のものにはそうした樹種ではなく、現地で調達された可能性があるツツジ科の材が用いられていた。同様に分布圏外の樹種としてはヒノキがあり、用いられていたのは刀鞘と不明木製品（球状）で、時代はやはり12世紀頃と13世紀頃のものに限られる。また、梳では12～14世紀頃にはケヤキが用いられていたのに対し、15世紀以降はブナ属の材が用いられていた傾向も認められた。

こうした傾向は、本遺跡の遺構の変遷と深くかかわっていると考えられる。本遺跡では12世紀頃の居住施設は遺跡北東部（屋敷L～N）、13～14世紀頃は、南部（屋敷G・O・P）と北部（屋敷A・L～N）で確認されている。北部のS X1200遺物包含層の出土遺物は、屋敷L～Nの居住者により廃棄され、また同様に南部のS X1397遺物包含層出土遺物は主として屋敷Gの居住者である在地領主層によって廃棄された。したがって、多種類・多量の栽培植物はこうした人々によって大規模に栽培され、流入あるいは利用後廃棄されたものと考えられ、特に近辺で栽培されていた可能性が高い。

例えば、12世紀頃においては、北部の湿地跡からキュウリ属の花粉が検出されている。種子ではメロン仲間に対応するキュウリ属の花粉は、虫媒性であり、その花粉の検出は近辺で花をつけた個体が成育していた、つまり栽培されていたことを指し示しているからである。15世紀頃以降になるとこうした栽培植物がほとんど検出されなくなるのは、この時期のものが北部の武士階級の屋敷跡に伴う遺構から出土したものであるためとみられ、栽培植物は利用されてはいたが量的にも種類的にも少なく、栽培されていても屋敷内の一部で細々としたものであった可能性がある。

同様に木材利用の時代別の特徴も遺構の変遷と併せてみてみると興味深い。12～14世紀の在地領主層とみられる人々は折敷などの木製品の器種からみてもある一定以上の生活水準にあったことは間違いないなく、櫛などは搬入品を使用していたとみられる。対して、15世紀以降の人々は明確に遠方からの搬入品といえるものは使用しておらず、県内で材が調達されて製作された製品を使用していたとみられる。本遺跡においてブナ属材が挽物の用材に見出されるのは15世紀以降であるが、周辺遺跡である山王遺跡の多賀前地区や市川橋遺跡ではそれよりも早い時期の10世紀前後から確認されており、ずれ

がある。これらの遺跡はいずれも多賀城周辺の都市的な場の遺跡であり、多賀城内には工房跡とみられる地区も確認されていることから、ブナ属材を提供する木地師の存在が想定されるところである。

本遺跡の北約3kmには中世多賀国府が想定されている地域があり、そこでは轍轤師・塗師・木地師といった職人が活動していたと考えられる。12~14世紀における木製品の豊富な器種構成やその中に遠隔地からの搬入品が認められることは、こうした多賀国府の存在を抜きに語ることができないであろう。これに対し、15世紀以降の木製品の樹種構成には特徴的な変化がみられ、明確な遠方からの搬入品がないことを考慮すると、請負生産的な契約を結んだ職人から製品が供給されていた可能性も想定される。

(註1) 本稿は、㈱パレオ・ラボから平成15年3月に授受したものである。その後、中野高柳遺跡の報告書は『II』・『III』を刊行しているが、発掘調査の事実報告を優先したため、本書への収録となつた。このため、遺構の解釈や時期については編集者が校正を行つた。(註2) は、パレオ・ラボからの報告にはなかったものであるが、必要に応じて編集者が新たに設けた。

(註2) S X1200とS X1397の層位は、前者が『中野高柳遺跡III』の図版54、後者は、本書の図版67に対応する。下層(18層)の場合、最初の層名は大別層、()の中は図版の細別層位を示す。

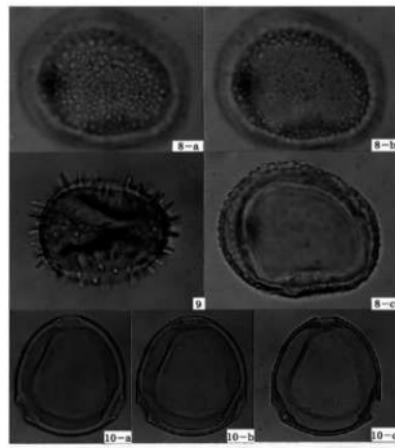
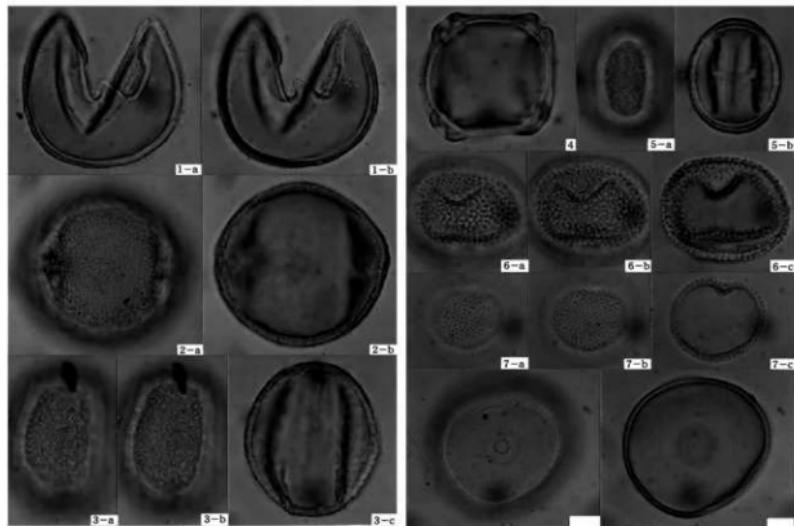
(註3) S D1284は、「中野高柳遺跡I」で報告しているが、その後の検討でSD1289と同一の遺構であり、区画Bの西を画する区画溝跡と考えられた。

(註4) 12~14世紀は原地に遺物包含層が形成されたが、15~16世紀(第V期)は調査区内に遺物包含層が確認できなかつた。このため、両者の木製品や植物遺体の出土量に大きな違いがみられた。今回の検討は、こうした状況に基づくものであることをあらかじめお断りしておく。

〈引用文献〉

- 阿部美和・辻 誠一郎(2001)山王遺跡の古代植物遺体群。「山王遺跡八幡地区の調査―県道『泉一坂並線』開通遺跡調査報告書IV―古墳時代後期SD20500河川縁編」宮城県教育委員会、pp.181-206
- 古環境研究所(1996a)山王遺跡第24次調査の花粉分析、「多賀城市文化財調査報告書第45集 山王遺跡I・仙塙道路建設に係る発掘調査報告書」多賀城市教育委員会・建設省東北地方建設局、pp.174-179
- 古環境研究所(1996b)中在家南遺跡の花粉分析、「仙台市文化財調査報告書第213集 中在家南遺跡他 仙台市荒井土地区画整理事業関係遺跡発掘調査報告書 第2分冊 分析・考察編」仙台市教育委員会、pp.25-38
- 鈴木三男・能城修一・松葉礼子(1996)仙台市中在家遺跡群出土木材の樹種。「仙台市文化財調査報告書第213集 中在家南遺跡他 仙台市荒井土地区画整理事業関係遺跡発掘調査報告書 第2分冊 分析・考察編」仙台市教育委員会、pp.339-413
- 鈴木三男・能城修一(2000)仙台市高田B遺跡出土木材の樹種と木材利用。「仙台市文化財調査報告書第242集 高田B遺跡 第2分冊 分析・考察編」仙台市教育委員会・宮城県道路公社、pp.1-66
- 高橋利彦(1994)仙台市中田南遺跡出土材の樹種。「仙台市文化財調査報告書第182集 仙台市中田南遺跡-古代・中世の集落跡の調査-」仙台市教育委員会、pp.406-422
- 高橋利彦(1995)仙台市下飯田遺跡出土材の樹種。「仙台市文化財調査報告書第191集 下飯田遺跡発掘調査報告書」仙台市教育委員会・日本道路公团、pp.271-289
- 高橋利彦(2000)仙台市王ノ塙遺跡出土材の樹種。「仙台市文化財調査報告書第249集 仙台市王ノ塙遺跡 一都市計画道路「川内・柳生線」開通遺跡I 発掘調査報告書 I 第2冊 分析・写真図版編」仙台市教育委員会、pp.41-48.

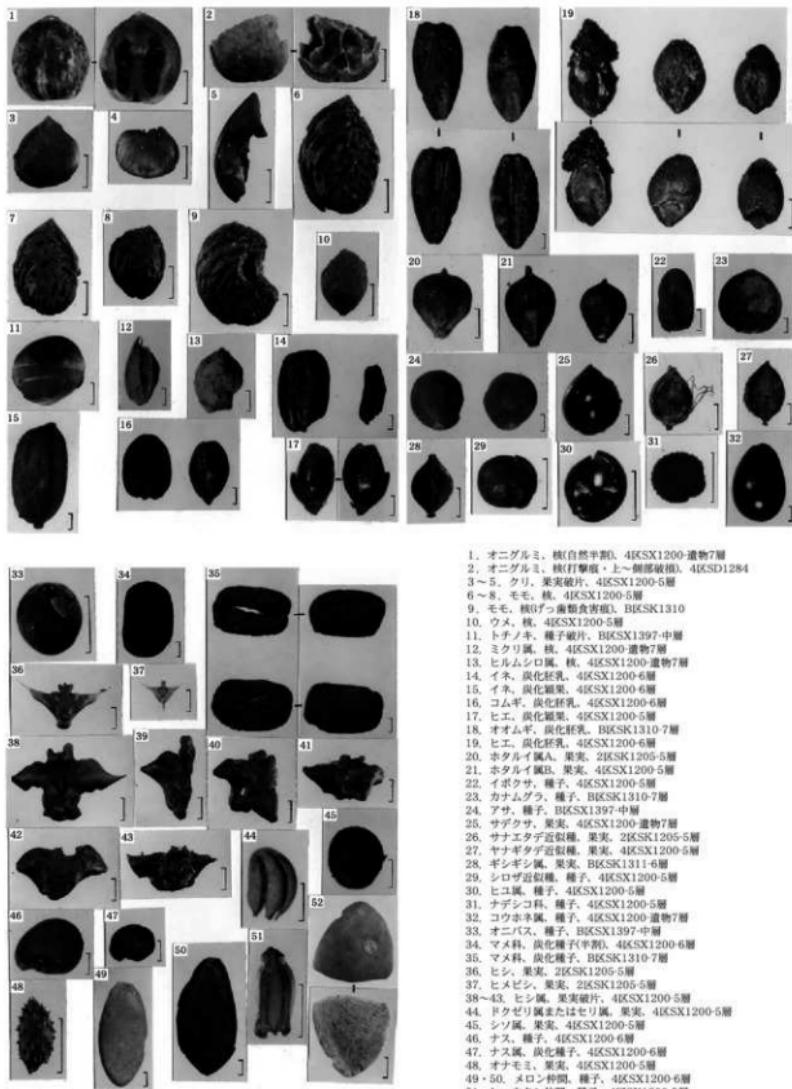
- 辻 誠一郎・住田雅和・伊藤由美子・植田秀生(1994)植物遺体とその産状、「山王遺跡Ⅰ—仙塩道路建設関係遺跡発掘調査報告書—古墳時代中期遺物包含層編」、宮城県教育委員会, pp. 86-92
- 藤下典之(1984) 出土遺体よりみたウリ科植物の種類と変遷とその利用法、「古文化財に関する保存科学と人文・自然科学一総括報告書」同朋社, pp. 638-654
- 松葉礼子・鈴木三男(1996) 宮城県多賀城市山王遺跡多賀前地区出土木材の樹種、「宮城県文化財調査報告書第170集 山王遺跡Ⅲ—仙塩道路建設関係遺跡発掘調査報告書—多賀前地区遺物編」宮城県教育委員会・建設省東北地方建設局, pp. 239-289, 国版479-495
- 松葉礼子(1997) 船場遺跡出土木質遺物の樹種同定、「宮城県文化財調査報告書第173集 船場遺跡ほか」宮城県教育委員会, pp. 67-68
- 松葉礼子(1998a) 山王遺跡町地区出土木製品の樹種同定、「宮城県文化財調査報告書第175集 山王遺跡町地区的調査—県道塙釜線開通調査報告書Ⅱ」宮城県教育委員会, pp. 197-202, 国版256-260
- 松葉礼子(1998b) 一本桟遺跡出土木製品の樹種、「宮城県文化財調査報告書第178集 一本桟遺跡Ⅰ」宮城県教育委員会・建設省東北地方建設局, pp. 115-123
- 松葉礼子(2001a) 木製品の樹種同定、「宮城県文化財調査報告書第184集 市川施遺跡の調査—県道「泉一塙釜線」開通調査報告書Ⅲ—第一部：本文編」宮城県教育委員会・宮城県土木部, pp. 304-339
- 松葉礼子(2001b) 一本桟遺跡出土木製品の樹種同定、「宮城県文化財調査報告書第185集 一本桟遺跡Ⅱ」宮城県教育委員会・国土交通省東北地方整備局, pp. 35-376
- 村田晃一(2001) 仙台市中野高柳遺跡、「平成13年度宮城県遺跡成果発表会発表要旨」宮城県考古学会, pp. 49-54
- 村田晃一・茂木好光(2002) 仙台市中野高柳遺跡、「平成14年度宮城県遺跡成果発表会発表要旨」宮城県考古学会, pp. 99-102
- 守田益宗(2000) 高田B遺跡の花粉分析、「仙台市文化財調査報告書242集 高田B遺跡 第2分冊 分析・考察編」仙台市教育委員会・宮城県道路公社, pp. 93-106



1. スギ属、試料2(4KSX1200-遺物7個)、PAL. MN 1601
2. ブナ属、試料2(4KSX1200-遺物7個)、PAL. MN 1603
3. コナラ属コナラ亜属、試料1(4KSX1200-5個)、PAL. MN 1604
4. ハンノキ属、試料2(4KSX1200-遺物7個)、PAL. MN 1602
5. ガマ属—ミクリ属、試料1(4KSX1200-5個)、PAL. MN 1606
6. ヒルムシロ属、試料1(4KSX1200-5個)、PAL. MN 1607
7. イネ科、試料1(4KSX1200-6個)、PAL. MN 1608
8. ヒツジグサ属、試料2(4KSX1200-遺物7個)、PAL. MN 1600
9. コウホネ属、試料2(4KSX1200-遺物7個)、PAL. MN 1599
10. キュウリ属、試料2(4KSX1200-遺物7個)、PAL. MN 1598

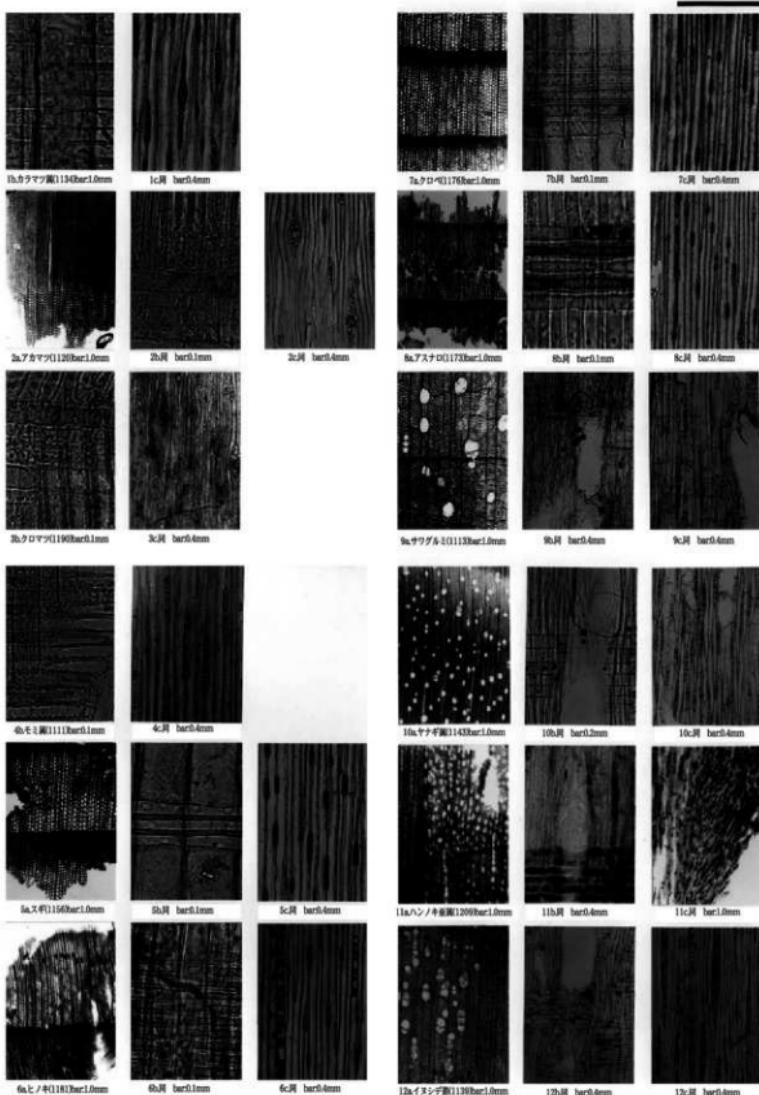
(scale bar : 10 μm a : 1~9 b : 10)

図版1 産出した花粉化石



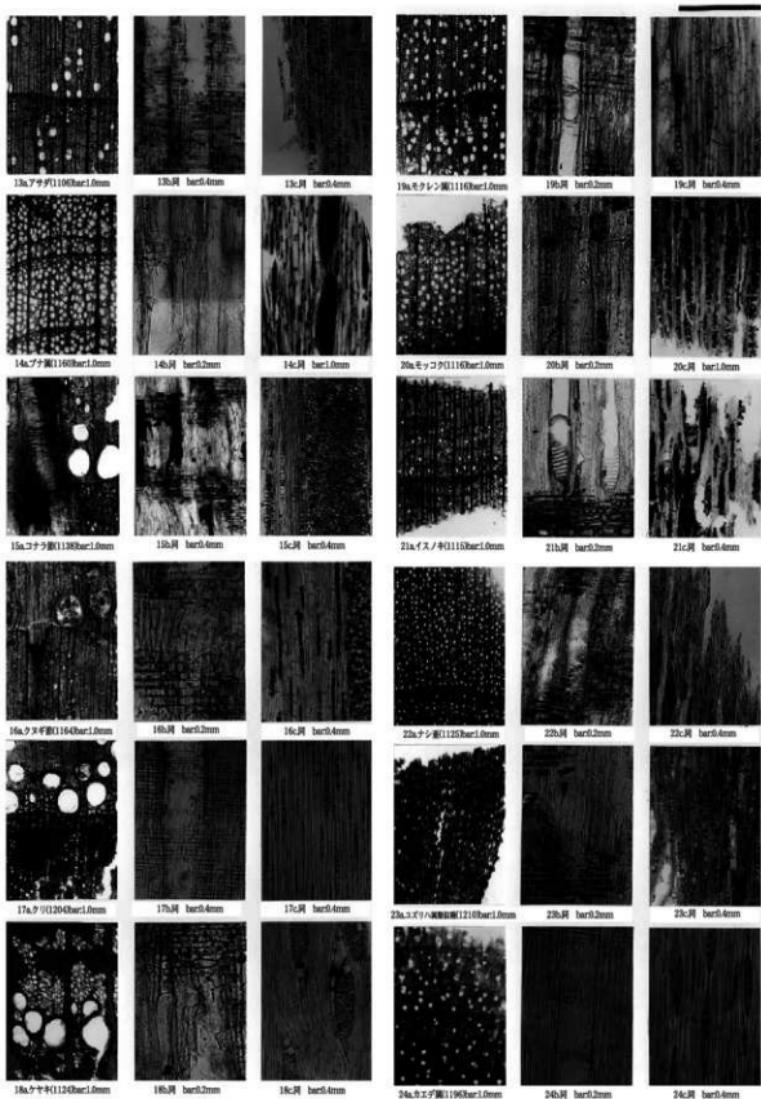
スケールは1~11、33、36~43、51、52が1mm、12~32、34、35、44~50が1mm

図版2 出土した大型植物化石



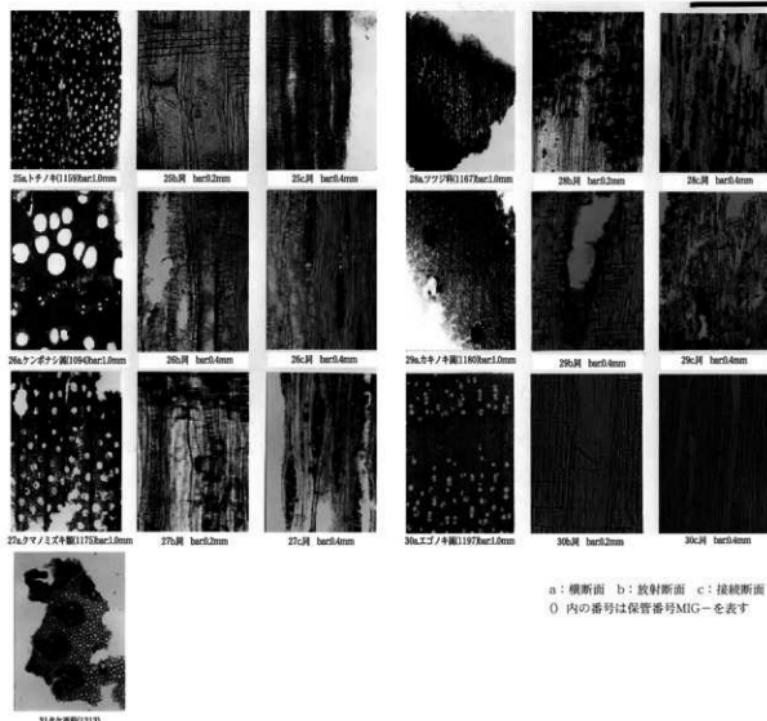
図版3 出土木製品の樹種同定 (3)

a : 横断面 b : 放射断面 c : 接続断面
○ 内の番号は保管番号MIG-を表す



図版4 出土木製品の樹種同定（4）

a:横断面 b:放射断面 c:接続断面
○内の番号は保管番号MIG-を表す



a: 横断面 b: 放射断面 c: 接続断面
○ 内の番号は保管番号MIG-を表す

図版5 出土木製品の樹種同定（3）

附編

中野高柳遺跡の動物遺体

種	部位	LR	部分	登録No.	遺構期	検出箇	備考	
1 S.D1129	5層		同定不能骨片	00101	IV期	1		
2 S.D1129	6層		ウマ	00102	IV期	1		
3 S.D1106			上顎歯	L P3-M2	00103	IV期	1	
4 S.D1106			上顎歯	L P3-M2	00104	IV期	1	
5 S.D1106			同定不能骨片		00105	IV期	1	
6 S.D1129			ウマ	L M3	00106-1	IV期	1 火熱を受けて白化	
7 S.D1129			ウマ	L M3?	00106-2	IV期	1 咬耗はほとんど進んでいない、若齢	
8 S.D1129			ウマ	R P2	00106-3	IV期	1 咬耗はほとんど進んでいない、若齢	
9 S.D1129			同定不能骨片		00107	IV期	1 大型歯骨片	
10 S.D1109	貝塚		同定不能骨片		00108		1 大型歯骨片	
11 S.X1600B 東唐	埋積土		ウマ	骨破片	01581	IV期	1 上顎歯	
12 S.X1600B 東唐	埋積土		ウマ	上顎歯	R P3-M2	01582	IV期	
13 S.E1211			同定不能骨片		01583	IV期	1 小破片多数	
14 2.K-Pitt			ウマ	上顎歯	L P3-M2	01584		
15 S.X1255			ウマ	上顎歯	R P3-M2	01585	V期?	
16 S.D1140	1層		ウマ	上顎歯	R M3	01586	VI期	
17 S.X1397	中層(遺物A堆)	ドブガイ?	鰓蓋皮?	?	骨頭部	01587-1	IV期	
18 S.X1397	中層(遺物A堆)	ドブガイ?	鰓蓋皮?			01587-2	IV期	
19 S.X1397	中層(遺物A堆)	同定不能骨片				01574	IV期	
20 S.X1397	上層(遺物B堆)	貝?	鰓蓋皮片?			01571	IV期	
21 S.X1397	上層(遺物B堆)	同定不能骨片				01576	IV期	
22 S.X1397	中層(遺物A堆)	ウシ/シカ	大腸骨	R 骨幹	01587-1	IV期	1 近位側スパイラル割れ	
23 S.X1397	中層(遺物A堆)	シカ	角	9	01587-2	IV期	1 切歯痕	
24 S.X1397	埋積土	ウマ	下顎歯	L P3-M2	04072-1	IV期		
25 S.X1397	埋積土	ウマ	下顎歯	L P3-M2	04072-2	IV期		
26 S.X1657			同定不能骨片		02319	IV期	1 小破片・火熱(白一赤) 多数	
27 S.D1501B	埋積土		同定不能骨片		02318	IV期	1 火熱を受けて白化	
28 S.D1501B	上層		同定不能骨片		02416	IV期	1 火熱を受けて白化	
29 S.D1501B			ウマ	骨破片	02413	IV期		
30 S.D1501			遺傳歴		02414	IV期	1 火熱を受けて白化	
31 S.D1501			遺傳歴	ウマ	上／下顎歯	9 I	02415-1	IV期
32 S.D1501			遺傳歴	ウマ	上／下顎歯	9 I	02415-2	IV期
33 S.D1501			遺傳歴	ウマ	上顎歯	R P2	02415-3	IV期
34 S.D1501			遺傳歴	ウマ	上顎歯	L P3-M2	02415-4	IV期
35 S.D1501			埋積土		02471	IV期	1 火熱を受けて白化	
36 S.D1321			埋積土	ウマ	上顎歯	R P3-M2	01577-1	IV期?
37 S.D1321			埋積土	ウマ	上顎歯	R P3-M2	01577-2	IV期?
38 S.D1321			埋積土	ウマ	上顎歯	R P3-M2	01577-3	IV期?
39 S.D1321			埋積土	ウマ	上顎歯	R P3-M2	01577-4	IV期?
40 S.D1709	1層		同定不能骨片		03285		1 大型歯、保存不良	
41 S.E1603	埋積土		ウマ	下顎歯	R P2	02417-1		
42 S.E1603	埋積土		ウマ	上顎歯	L P3-M2	02417-2		
43 S.E1603			同定不能骨片		02418		1 大型歯四枚骨片	
44 S.E1603			同定不能骨片		02419		1 大型歯四枚骨片	
45 S.E1011	3層	ウシ	下顎歯	? M1/M2	04079	IV期		
46 S.K1018	埋積土	ウマ	上顎歯	R P3-M2	04080-1	遺構Ⅱ終		
47 S.K1018	埋積土	ウマ	上顎歯	R P3-M2	04080-2	遺構Ⅱ終		
48 S.K1018	直面	ウマ	上顎歯	L 中間部破片	04081-1	遺構Ⅱ終	1 P3, P4, M1, M2, 土ごと採取	
49 S.K1018	直面	ウマ	上顎歯+下顎歯	L-R 前部破片	04081-2	遺構Ⅱ終	1 上下の齿が並んで出土 土ごと採取	
50 S.K1018	直面	ウマ	下顎歯	L P2-M2	04081-3	遺構Ⅱ終		
51 S.K1018	直面	ウマ	下顎歯	L P2-M2	04081-4	遺構Ⅱ終		
52 S.K1018	直面	ウマ	下顎歯	R P2-M2	04081-5	遺構Ⅱ終		
53 S.K1018	直面	ウマ	下顎歯	R P2-M2	04081-6	遺構Ⅱ終		
54 S.K1013	3・4層	ツルの一穂	椎骨	L 連合	04086	IV期	1 化骨化、タンチョウよりやや小さい	
55 S.K1310	埋積土	シカ?	骨	R 骨幹	01578	IV期	1 近位側イヌの歯?	
56 S.K1310	埋積土	ウシ/ウマ	上顎歯	L 骨幹	01579	IV期	1 近位側イヌの歯?	
57 S.K1310	直面部	ウシ/ウマ	前歯	R 近位	01580	IV期	1 化骨化	
58 S.K1504	埋積土	同定不能骨片			02317	IV期?	1 大型歯、火熱を受けて白化	
59 S.X1200	下層(遺物7層)	ハマグリ	殻	L 骨頭部破片	01573-1	III期	1 貝の発育プロック	
60 S.X1200	下層(遺物7層)	ハマグリ	殻	L 骨頭部破片	01573-2	III期	1 貝の発育プロック	
61 S.X1200	下層(遺物7層)	ハマグリ	殻	L 骨頭部破片	01573-3	III期	1 貝の発育プロック	
62 S.X1200	下層(遺物7層)	ハマグリ	殻	L 骨頭部破片	01573-4	III期	1 貝の発育プロック	
63 S.X1200	下層(遺物7層)	ハマグリ	殻	L 骨頭部破片	01573-5	III期	1 貝の発育プロック	
64 S.X1200	下層(遺物7層)	ハマグリ	殻	L 骨頭部破片	01573-6	III期	1 貝の発育プロック	
65 S.X1200	下層(遺物7層)	ハマグリ	殻	L 骨頭部破片	01573-7	III期	1 貝の発育プロック	
66 S.X1200	下層(遺物7層)	ハマグリ	殻	L 骨頭部破片	01573-8	III期	1 貝の発育プロック	
67 S.X1200	下層(遺物7層)	ハマグリ	殻	L 骨頭部破片	01573-9	III期	1 貝の発育プロック	
68 S.X1200	下層(遺物7層)	ハマグリ	殻	L 骨頭部破片	01573-10	III期	1 貝の発育プロック	
69 S.X1200	下層(遺物7層)	ハマグリ	殻	L 骨頭部破片	01573-11	III期	1 貝の発育プロック	
70 S.X1200	下層(遺物7層)	ハマグリ	殻	L 骨頭部破片	01573-12	III期	1 貝の発育プロック	
71 S.X1200	下層(遺物7層)	ハマグリ	殻	L 骨頭部破片	01573-13	III期	1 貝の発育プロック	
72 S.X1200	下層(遺物7層)	ハマグリ	殻	L 骨頭部破片	01573-14	III期	1 貝の発育プロック	
73 S.X1200	下層(遺物7層)	ハマグリ	殻	L 骨頭部破片	01573-15	III期	1 貝の発育プロック	
74 S.X1200	下層(遺物7層)	ハマグリ	殻	L 骨頭部破片	01573-16	III期	1 貝の発育プロック	
75 S.X1200	下層(遺物7層)	ハマグリ	殻	L 骨頭部破片	01573-17	III期	1 貝の発育プロック	

第1表 中野高柳遺跡出土の動物遺体(1)

体	遺 墓	出 土 領 域	出 土 領 域	部 位	LR	分	遺 論%	遺 論	板	書
76	S X1200	下層(遺物7層)	ハマグリ	歯	L	骨質部破片	01573-18	Ⅲ期	遺	日の夜景ブロック
77	S X1200	下層(遺物7層)	ハマグリ	歯	L	骨質部破片	01573-19	Ⅲ期	遺	日の夜景ブロック
78	S X1200	下層(遺物7層)	ハマグリ	歯	L	骨質部破片	01573-20	Ⅲ期	遺	日の夜景ブロック
79	S X1200	下層(遺物7層)	ハマグリ	歯	R	骨質部破片	01573-21	Ⅲ期	遺	日の夜景ブロック
80	S X1200	下層(遺物7層)	ハマグリ	歯	R	骨質部破片	01573-22	Ⅲ期	遺	日の夜景ブロック
81	S X1200	下層(遺物7層)	ハマグリ	歯	R	骨質部破片	01573-23	Ⅲ期	遺	日の夜景ブロック
82	S X1200	下層(遺物7層)	ハマグリ	歯	R	骨質部破片	01573-24	Ⅲ期	遺	日の夜景ブロック
83	S X1200	下層(遺物7層)	ハマグリ	歯	R	骨質部破片	01573-25	Ⅲ期	遺	日の夜景ブロック
84	S X1200	下層(遺物7層)	ハマグリ	歯	R	骨質部破片	01573-26	Ⅲ期	遺	日の夜景ブロック
85	S X1200	下層(遺物7層)	ハマグリ	歯	R	骨質部破片	01573-27	Ⅲ期	遺	日の夜景ブロック
86	S X1200	下層(遺物7層)	ハマグリ	歯	R	骨質部破片	01573-28	Ⅲ期	遺	日の夜景ブロック
87	S X1200	下層(遺物7層)	ハマグリ	歯	R	骨質部破片	01573-29	Ⅲ期	遺	日の夜景ブロック
88	S X1200	下層(遺物7層)	ハマグリ	歯	R	骨質部破片	01573-30	Ⅲ期	遺	日の夜景ブロック
89	S X1200	下層(遺物7層)	ハマグリ	歯	R	骨質部破片	01573-31	Ⅲ期	遺	日の夜景ブロック
90	S X1200	下層(遺物7層)	ハマグリ	歯	R	骨質部破片	01573-32	Ⅲ期	遺	日の夜景ブロック
91	S X1200	下層(遺物7層)	ハマグリ	歯	R	骨質部破片	01573-33	Ⅲ期	遺	日の夜景ブロック
92	S X1200	下層(遺物7層)	ハマグリ	歯	R	骨質部破片	01573-34	Ⅲ期	遺	日の夜景ブロック
93	S X1200	下層(遺物7層)	ハマグリ	歯	R	骨質部破片	01573-35	Ⅲ期	遺	日の夜景ブロック
94	S X1200	下層(遺物7層)	ハマグリ	歯	R	骨質部破片	01573-36	Ⅲ期	遺	日の夜景ブロック
95	S X1200	下層(遺物7層)	ハマグリ	歯	R	骨質部破片	01573-37	Ⅲ期	遺	日の夜景ブロック
96	S X1200	下層(遺物7層)	ハマグリ	歯	R	骨質部破片	01573-38	Ⅲ期	遺	日の夜景ブロック
97	S X1200	下層(遺物7層)	ハマグリ	歯	R	骨質部破片	01573-39	Ⅲ期	遺	日の夜景ブロック
98	S X1200	下層(遺物7層)	ハマグリ	歯	R	骨質部破片	01573-40	Ⅲ期	遺	日の夜景ブロック
99	S X1200	下層(遺物7層)	ハマグリ	歯	R	骨質部破片	01573-41	Ⅲ期	遺	日の夜景ブロック
100	S X1200	下層(遺物7層)	ハマグリ	歯	R	骨質部破片	01573-42	Ⅲ期	遺	日の夜景ブロック
101	S X1200	下層(遺物7層)	ハマグリ	歯	R	骨質部破片	01573-43	Ⅲ期	遺	日の夜景ブロック
102	S X1200	下層(遺物7層)	ハマグリ	歯	R	骨質部破片	01573-44	Ⅲ期	遺	日の夜景ブロック
103	S X1200	下層(遺物7層)	ハマグリ	歯	R	骨質部破片	01573-45	Ⅲ期	遺	日の夜景ブロック
104	S X1200	下層(遺物7層)	ハマグリ	歯	R	骨質部破片	01573-46	Ⅲ期	遺	日の夜景ブロック
105	S X1200	下層(遺物7層)	ハマグリ	歯	R	骨質部破片	01573-47	Ⅲ期	遺	日の夜景ブロック
106	S X1200	下層(遺物7層)	ハマグリ	歯	R	骨質部破片	01573-48	Ⅲ期	遺	日の夜景ブロック
107	S X1200	下層(遺物7層)	ハマグリ	歯	R	骨質部破片	01573-49	Ⅲ期	遺	日の夜景ブロック
108	S X1200	下層(遺物7層)	ハマグリ	歯	R	骨質部破片	01573-50	Ⅲ期	遺	日の夜景ブロック
109	S X1200	下層(遺物7層)	ハマグリ	歯	R	骨質部破片	01573-51	Ⅲ期	遺	日の夜景ブロック
110	S X1200	下層(遺物7層)	ハマグリ	歯	R	骨質部破片	01573-52	Ⅲ期	遺	日の夜景ブロック
111	S X1200	下層(遺物7層)	ハマグリ	歯	R	骨質部破片	01573-53	Ⅲ期	遺	日の夜景ブロック
112	S X1200	下層(遺物7層)	ハマグリ	歯	R	骨質部破片	01573-54	Ⅲ期	遺	日の夜景ブロック
113	S X1200	下層(遺物7層)	ハマグリ	歯	R	骨質部破片	01573-55	Ⅲ期	遺	日の夜景ブロック
114	S X1200	下層(遺物7層)	ドブダイ	歯	R	繊維	01573-56	Ⅲ期	遺	日の夜景ブロック
115	S X1200	上層(遺物1層)	クマ	下顎骨	L	中間部破片	02465-1	Ⅳ期	遺	P3, P4, M1, M2, M3
116	S X1200	上層(遺物1層)	クマ	下顎骨	R	中間部破片	02465-2	Ⅳ期	遺	P3, P4, M1, M2, ほとんど傷のみ
117	S X1200	上層(遺物3層)	クマノクシ	大顎骨	R	邊縁部破片	02466	Ⅳ期	遺	
118	S X1200	上層(遺物1層)	クマ	中手骨	L	骨幹	02467-1	Ⅳ期	遺	
119	S X1200	上層(遺物1層)	クマ	中手骨	R	中間部	02467-2	Ⅳ期	遺	
120	S X1200	上層(遺物1層)	同北不動骨片	骨	R	骨破片	02467-3	Ⅳ期	遺	大型歯四肢骨脊椎、化骨化
121	S X1200	上層(遺物1層)	シカ	角繊片	R	繊維	02468	Ⅳ期	遺	
122	S D1650	堆積土	ドブダイ	腹皮灰	?	破片	02438-1	V期	遺	
123	S D1650	堆積土	ドブダイ	腹皮灰	?	破片	02438-2	V期	遺	
124	S D1650	堆積土	ドブダイ	腹皮灰	?	破片	02438-3	V期	遺	
125	S D1650	ウマ	中足骨	R	連造	02427	V期	遺	化骨化	
126	S D1650	堆積土	ウマ	下顎骨	R	P2	02432-1	V期	遺	
127	S D1650	堆積土	ウマ	下顎骨	R	P3	02432-2	V期	遺	
128	S D1650	堆積土	ウマ	下顎骨	R	P4	02432-3	V期	遺	
129	S D1650	堆積土	ウマ	下顎骨	R	M1	02432-4	V期	遺	
130	S D1650	堆積土	ウマ	下顎骨	R	M2	02432-5	V期	遺	
131	S D1650	上層	ウマ	下顎骨	R	M3	02432-6	V期	遺	
132	S D1650	上層	ウマ	上顎骨	R	P2-M2	02463	V期	遺	
133	S D1653B	堆積土	ウマ	下顎骨	R	P3-M2	02424	V期	遺	
134	S D1653A	堆積土	ウマ	下顎骨	R	P3-M2	02425	V期	遺	
135	S D1653B	上層	同北不動骨片	骨	R	骨破片	02472	V期	遺	大型歯四肢骨片、上腕骨? 大筋骨?
136	S D1653B	下層	アカニシ?	歯	R	骨破片	02456	V期	遺	
137	S D1653B	下層	アカニシ?	歯	R	歯冠一部断面破片	02456	V期	遺	
138	S D1653B	下層	アカニシ?	骨	R	骨破片	04597	V期	遺	大型歯四肢骨片、胫骨?
139	S D1653	上層	同北不動骨片	骨	R	骨破片	04598	V期	遺	火熟を受けて白化
140	S D1653A	堆積土(遠近)	ドブダイ?	腹皮灰片	R	繊維	02470	V期	遺	
141	S D1653	堆積土	ウシノクマ	棒骨	?	骨幹	02420	V期	遺	
142	S D1653	堆積土	ウシノクマ	棒骨	?	骨幹	02421	V期	遺	大型歯四肢骨片
143	S D1653	堆積土	ウシノクマ	棒骨	R	P2-M2	02422	V期	遺	
144	S D1653	堆積土	ウシノクマ	棒骨	R	P2-M2	02428-1	V期	遺	
145	S D1653	堆積土	ウシノクマ	棒骨	R	P2-M2	02428-2	V期	遺	
146	S D1653	堆積土	ウシノクマ	棒骨	R	P2-M2	02428-3	V期	遺	
147	S D1653	堆積土	ウシノクマ	上顎骨	R	P2-M2	02428-4	V期	遺	
148	S D1653	堆積土	ウシノクマ	下顎骨	R	P2-M2	02428-1	V期	遺	
149	S D1653	堆積土	ウシノクマ	下顎骨	R	P2-M2	02428-2	V期	遺	
150	S D1653	堆積土	ウシノクマ	下顎骨	R	P2-M2	02428-3	V期	遺	
151	S D1653	堆積土	カルミ	棒骨	R	P2-M2	02428-4	V期	遺	
152	S D1653	堆積土	ドブダイ?	腹皮灰片	R	繊維	02440	V期	遺	
153	S D1653	堆積土	クマ	前爪	L	完形	02469	V期	遺	
154	S E1637	堆積土	クマ	上顎骨?	L?	I	02429	V期	遺	完形
155	S E1643	堆積土	同北不動骨片	骨	R	骨破片	03209	Ⅳ期	遺	骨頭片?
156	S E1648	堆積土	クマ	上顎骨	R	P3-M2	02423-1	Ⅳ期	遺	咬耗進む。10才ぐらいか。
157	S E1648	堆積土	クマ	下顎骨	L	顎前突起	02423-2	Ⅳ期	遺	化骨化

第2表 中野高柳跡出土の動物遺体(2)

名	遺 墓	出 土 領 域	埋	部 位	L/R	分	登録No.	遺構期	報告書	備 考
158	S.I.1648	堆積土	クソ/ツマ	上顎骨	L	骨幹	02431	V期	本番	遺物側、シカより大きい。
159	S.I.1649	堆積土	同定不能骨片		R		02430	V期	本番	大型歯骨片。
160	S.I.1397	下層(遺物W下層)	シカ	下顎骨	R	中間部膜片	02438	V期	本番	M1, M2, M3長: 27.0mm 前歯片々々
161	S.I.1397	下層(遺物W下層)	同定不能骨片				02674	IV期	本番	
162	S.I.1397	下層(遺物W下層)	シカ	同定不能骨片			02675	IV期	本番	大型歯骨片？ 鹿角片？
163	S.I.1397	下層(遺物W下層)	ツマ	上顎骨	L	P3-M2	02676-1	IV期	本番	咀嚼あまり鹿人でない。
164	S.I.1397	下層(遺物W下層)	ツマ	上顎骨	R	P3-M2	02676-2	IV期	本番	咀嚼あまり鹿人でない。
165	S.I.1397	下層(遺物W下層)	ツマ	上顎骨	R	P3-M2	02676-3	IV期	本番	
166	S.I.1397	上層(遺物W上層)	同定不能骨片				02677	IV期	本番	大型歯骨片・骨端？
167	S.D.1496-C	堆積土	ツマ	下顎骨	R	P3-M2	02474-1	V期	本番	
168	S.D.1496-C	堆積土	ツマ	下顎骨	R	P3-M2	02474-2	V期	本番	
169	S.D.1494	堆積土	ツマ	下顎骨	L	P3-M2	02472-1	V期	本番	
170	S.D.1494	堆積土	ツマ	下顎骨	R	P3-M2	02472-2	V期	本番	
171	S.D.1494	堆積土	ツマ	下顎骨	R	P3-M2	02472-3	V期	本番	
172	S.D.1494		ツマ	上/下顎骨	?	I	02473-1	V期	本番	
173	S.D.1494		ツマ	上/下顎骨	?	I	02473-10	V期	本番	
174	S.D.1494		ツマ	上顎骨	L	P2	02473-11	V期	本番	
175	S.D.1494		ツマ	上顎骨	L	P3	02473-12	V期	本番	
176	S.D.1494		ツマ	上顎骨	L	M3	02473-13	V期	本番	
177	S.D.1494		ツマ	上顎骨	R	P2	02473-14	V期	本番	
178	S.D.1494		ツマ	上顎骨	R	P3	02473-15	V期	本番	
179	S.D.1494		ツマ	上顎骨	R	P4	02473-16	V期	本番	
180	S.D.1494		ツマ	上顎骨	R	M1	02473-17	V期	本番	
181	S.D.1494		ツマ	上顎骨	R	M2	02473-18	V期	本番	
182	S.D.1494		ツマ	上顎骨	R	M3	02473-19	V期	本番	
183	S.D.1494		ツマ	上/下顎骨	?	I	02473-2	V期	本番	
184	S.D.1494		ツマ	下顎骨	L	P2	02473-20	V期	本番	
185	S.D.1494		ツマ	下顎骨	L	P3	02473-21	V期	本番	
186	S.D.1494		ツマ	下顎骨	L	P4	02473-22	V期	本番	
187	S.D.1494		ツマ	下顎骨	L	M1	02473-23	V期	本番	
188	S.D.1494		ツマ	下顎骨	L	M2	02473-24	V期	本番	
189	S.D.1494		ツマ	下顎骨	L	M3	02473-25	V期	本番	
190	S.D.1494		ツマ	下顎骨	R	P2	02473-26	V期	本番	
191	S.D.1494		ツマ	下顎骨	R	P3	02473-27	V期	本番	
192	S.D.1494		ツマ	下顎骨	R	P4	02473-28	V期	本番	
193	S.D.1494		ツマ	下顎骨	R	M1	02473-29	V期	本番	
194	S.D.1494		ツマ	上/下顎骨	?	I	02473-3	V期	本番	
195	S.D.1494		ツマ	下顎骨	R	M2	02473-30	V期	本番	
196	S.D.1494		ツマ	下顎骨	R	M3	02473-31	V期	本番	
197	S.D.1494		ツマ	下顎骨	?	I	02473-32	V期	本番	
198	S.D.1494		ツマ	下顎骨	?	I	02473-33	V期	本番	
199	S.D.1494		ツマ	下顎骨	?	I	02473-34	V期	本番	
200	S.D.1494		ツマ	下顎骨	?	I	02473-35	V期	本番	
201	S.D.1494		ツマ	上/下顎骨	?	I	02473-36	V期	本番	
202	S.D.1494		ツマ	上/下顎骨	?	I	02473-37	V期	本番	
203	S.D.1494		ツマ	上/下顎骨	?	I	02473-38	V期	本番	
204	S.D.1494		ツマ	上/下顎骨	?	I	02473-39	V期	本番	
205	S.D.1494	2層	ツマ	骨膜片			02475	V期	本番	大型歯骨片
206	S.D.1494	2層	ツマ	骨膜片			02476	V期	本番	保存不良
207	S.D.1828	下層	イヌ	下顎骨	L	完形	02519	V期	本番	x, x, x, C, P1, x, P3, P4, M1, M2, x, 下顎骨全長 (1d-Gec) : 137mm (復元値) , 下顎骨高 (Cr-Gev) : 55mm (復元値) , Height of the Mandible behind M1: 23, Bas, M1: M2, M3 七十二探致
208	S.D.1828	下層	イヌ	頸骨	R	ほぼ全形	02519A	V期	本番	破片化。
209	S.D.1828	2層	イヌ	下顎骨	R	中間部	02526	V期	本番	中型歯骨片で火熱を受けて白化
210	S.D.1845	ベルト2層	ツマ	骨膜片			02534	III~IV期	本番	破片多
211	S.D.2020B	1層	ツマ	下顎骨	R	M1	04599-1	V期	本番	P3-M2, P3-M2
212	S.D.2020B	1層	ツマ	下顎骨	R	M2	04599-2	V期	本番	
213	S.D.2020B	1層	ツマ	下顎骨	R	M3	04599-3	V期	本番	
214	S.D.2020B	1層	ツマ	下顎骨	L	P3-M2	04600-1	V期	本番	
215	S.D.2020B	1層	ツマ	下顎骨	L	P3-M2	04600-2	V期	本番	
216	S.D.2020B	1層	ツマ	下顎骨	L	P3-M2	04600-3	V期	本番	
217	S.D.2020B	堆積土	ツマ	下顎骨	R	中間部膜片	04601	IV期	本番	
218	S.D.2241	下層	ツマ	下顎骨	L	完形	04593	V期	本番	土ごと採取、かなり焼い
219	S.D.2241	下層	同定不能骨片				04594	V期	本番	大型歯骨片？ 土ごと採取、保存不良
220	S.D.2241	堆積土	シカ	角膜片			05081	V期	本番	
221	S.D.2241	堆積土	同定不能骨片				05080	V期	本番	大型歯骨片？ 火熱を受けて白化
222	S.D.2165B	堆積土	ツマ	上顎骨	R	P3-M2	04602-1	V期	本番	
223	S.D.2165B	堆積土	ツマ	上顎骨	R	P3-M2	04602-2	V期	本番	
224	S.D.2165B	堆積土	ツマ	上顎骨	R	P3-M2	04602-3	V期	本番	
225	S.D.1007	堆積土	ツマ	上顎骨	R	P3-M2	05274	IV期	本番	
226	S.D.2474	上層	同定不能骨片				05092	V期	本番	大型歯骨片？ 火熱を受けて白化
227	S.D.2363	堆積土	ツマ	上顎骨	L	P3-M2	04498	V期	本番	
228	S.D.2360	堆積土	同定不能骨片				04500	V期以降	本番	火熱を受けて白化が進化
229	S.D.12363	堆積土	ツマ	下顎骨	R	M1/M2	04507	IV期	本番	保存良
230	S.E.2105	6層	同定不能骨片				04532	V期	本番	火熱を受けて白化
231	S.E.2105	6層	ツマ	下顎骨	R	I	04604-1	骨頭凹路	本番	
232	S.E.2105	6層	ツマ	下顎骨	R	M1	04604-2	骨頭凹路	本番	
233	S.E.2105	6層	ツマ	下顎骨	R	M2	04604-3	骨頭凹路	本番	
234	S.E.2105	6層	ツマ	下顎骨	R	M3	04604-4	骨頭凹路	本番	
235	S.E.2105	6層	二枚貝	殻			04606	骨頭凹路	本番	イシガイ科？
236	S.E.2212	堆積土	同定不能骨片				04607	V期	本番	

第3表 中野高柳遺跡出土の動物遺体(3)

番	遺構	出土場所	埋	部位	部 分	標印No.	遺物名	報告書	備考
237	S.E.2028	堆積土	アカシシ	股	R 骨片	04609	骨片	本番	
238	S.E.2152	堆積土	ハマグリ	股	L 骨頂部破片	04609-1	骨頂部	本番	
239	S.E.2152	堆積土	ハマグリ	股	L 骨頂部破片	04609-2	骨頂部	本番	
240	S.E.2152	堆積土	ハマグリ	股	L 骨頂部破片	04609-3	骨頂部	本番	
241	S.E.2152	堆積土	ハマグリ	股	R 骨頂部破片	04609-4	骨頂部	本番	
242	S.E.2152	堆積土	ハマグリ	股	R 骨頂部破片	04609-5	骨頂部	本番	
243	S.E.2152	堆積土	ハマグリ	股	R 骨頂部破片	04609-6	骨頂部	本番	
244	S.E.2152	堆積土	ハマグリ	股	R 骨頂部破片	04609-7	骨頂部	本番	
245	S.E.2152	堆積土	ハマグリ	股	R 骨頂部破片	04609-8	骨頂部	本番	
246	S.E.2152	堆積土	ハマグリ	股	R 骨頂部破片	04609-9	骨頂部	本番	
247	S.E.2356	堆積土	シカ	神奈	L 骨片	04610	本番		
248	S.E.2601	3層	マグロ	椎体	R 椎体	05187-1	椎体	本番	椎体幅:43~48mm
249	S.E.2601	3層	マグロ	椎体	R 椎体	05187-2	椎体	本番	椎体幅:43~48mm
250	S.E.2601	3層	マグロ	椎体	R 椎体	05187-3	椎体	本番	椎体幅:43~48mm
251	S.K.2601	3層	イヌ	下脛骨	R 中間部	05188		本番	X, X3, P4, M1, M2, M3, Height of the Mandible behind M1:23.9mm, M1長:20.0mm, 05190とは同じ大きさ、同一個体。
252	S.K.1454	7層	ドブダイ	股表面		02439	V筋	本番	
253	S.K.1454	堆積土	ウマ	上顎骨	L I	02434-1	V筋	本番	
254	S.K.1454	堆積土	ウマ	上顎骨	L M3	02434-10	V筋	本番	
255	S.K.1454	堆積土	ウマ	上顎骨	R I	02434-11	V筋	本番	
256	S.K.1454	堆積土	ウマ	上顎骨	R I	02434-12	V筋	本番	
257	S.K.1454	堆積土	ウマ	上顎骨	R I	02434-13	V筋	本番	
258	S.K.1454	堆積土	ウマ	上顎骨	R P2	02434-14	V筋	本番	
259	S.K.1454	堆積土	ウマ	上顎骨	R P3	02434-15	V筋	本番	
260	S.K.1454	堆積土	ウマ	上顎骨	R P4	02434-16	V筋	本番	
261	S.K.1454	堆積土	ウマ	上顎骨	R M1	02434-17	V筋	本番	
262	S.K.1454	堆積土	ウマ	上顎骨	R M2	02434-18	V筋	本番	
263	S.K.1454	堆積土	ウマ	上顎骨	R M3	02434-19	V筋	本番	
264	S.K.1454	堆積土	ウマ	上顎骨	L I	02434-2	V筋	本番	
265	S.K.1454	堆積土	ウマ	上顎骨	L I	02434-3	V筋	本番	
266	S.K.1454	堆積土	ウマ	上顎骨	L I	02434-4	V筋	本番	
267	S.K.1454	堆積土	ウマ	上顎骨	L P2	02434-5	V筋	本番	
268	S.K.1454	堆積土	ウマ	上顎骨	L P3	02434-6	V筋	本番	
269	S.K.1454	堆積土	ウマ	上顎骨	L P4	02434-7	V筋	本番	
270	S.K.1454	堆積土	ウマ	上顎骨	R M1	02434-8	V筋	本番	
271	S.K.1454	堆積土	ウマ	上顎骨	R M2	02434-9	V筋	本番	
272	S.K.1454	1層	ウマ	上顎骨	L I	02434-10	V筋	本番	
273	S.K.1454	7層	クシノウマ	中手骨	R 骨片	02436	V筋	本番	化骨化。
274	S.K.1458	2層	クマ	系統骨	ラ 齧歯一連化	02437-1	V筋	本番	化骨化。
275	S.K.1458	2層	クシノウマ	中手/中足骨	ラ 齧歯	02437-2	V筋	本番	片側。
276	S.K.1492	堆積土	クマ	上顎骨		02476	本番	上顎骨 左右	
277	S.K.1761	2層	同上	不動骨片		03299	V筋	本番	大型歯、保存不良
278	S.K.1846	2層	同上	不動骨片		03291	本番	大型歯、ほとんど土壌化	
279	S.K.1846	2層	同上	不動骨片		03283	導期以前	本番	
280	S.K.1869	2層	ヒト	腰椎		03289	本番	複数多い	
281	S.K.1878	4層	ウツクシ	腰椎	R 前院	03297	腰椎	本番	化骨化。
282	S.K.1878	4層	シジミ	腰	L 骨頂部破片	03288-1	腰椎	本番	
283	S.K.1878	4層	シジミ	腰	R 骨頂部破片	03288-10	腰椎	本番	
284	S.K.1878	4層	シジミ	腰	R 骨頂部破片	03288-11	腰椎	本番	
285	S.K.1878	4層	シジミ	腰	R 骨頂部破片	03288-12	腰椎	本番	
286	S.K.1878	4層	シジミ	腰	R 骨頂部破片	03288-13	腰椎	本番	
287	S.K.1878	4層	シジミ	腰	R 骨頂部破片	03288-14	腰椎	本番	
288	S.K.1878	4層	シジミ	腰	R 骨頂部破片	03288-15	腰椎	本番	
289	S.K.1878	4層	シジミ	腰	R 骨頂部破片	03288-16	腰椎	本番	
290	S.K.1878	4層	シジミ	腰	R 骨頂部破片	03288-2	腰椎	本番	
291	S.K.1878	4層	シジミ	腰	L 骨頂部破片	03288-3	腰椎	本番	
292	S.K.1878	4層	シジミ	腰	L 骨頂部破片	03288-4	腰椎	本番	
293	S.K.1878	4層	シジミ	腰	L 骨頂部破片	03288-5	腰椎	本番	
294	S.K.1878	4層	シジミ	腰	L 骨頂部破片	03288-6	腰椎	本番	
295	S.K.1878	4層	シジミ	腰	L 骨頂部破片	03288-7	腰椎	本番	
296	S.K.1878	4層	シジミ	腰	L 骨頂部破片	03288-8	腰椎	本番	
297	S.K.1878	4層	シジミ	腰	R 腹部	03288-9	腰椎	本番	
298	S.K.2300	直付近	クマ	上顎骨	L P3-M2	04417	V筋	本番	保存良、ほぼ完形
299	S.K.2209	直付近	クマ	上顎骨	R P3-M2	04611	V筋	本番	
300	S.K.2209	1層	同上	不動骨片		04612	V筋	本番	火熱を受けて白化
301	S.K.2209	直付近	同上	不動骨片		04613	V筋	本番	火熱を受けて白化
302	S.K.2238	9層	同上	不動骨片		04614	V筋	本番	其の破片?
303	S.K.2246	2・3層	同上	不動骨片		04615	V筋	本番	
304	S.K.2258	堆積土	同上	不動骨片		04616	V筋	本番	火熱(白)を受けて白化
305	S.K.2475	7層	シカ	角	R 第2後脚+角削り?	05098	V筋	本番	角削削削に横方向のカットマーク 2箇所
306	S.K.2475	7層	同上	シカ		05099	V筋	本番	火熱受けて白化
307	S.K.2475	7層	シカ	角	R 第2後脚	05102	V筋	本番	火熱受けて白化
308	S.K.2514	2層	ヒト	腰	R M3	05113-1	腰椎	本番	
309	S.K.2514	2層	ヒト	腰	R M3	05112-2	腰椎	本番	
310	S.K.2514	2層	ヒト	腰	R M3	05112-3	腰椎	本番	
311	S.K.2514	2層	ヒト	腰	R P2	05112-4	腰椎	本番	
312	S.K.2514	2層	ヒト	腰	R P2	05112-5	腰椎	本番	
313	S.K.2514	2層	ヒト	腰	R P2?	05112-6	腰椎	本番	

第4表 中野高柳遺跡出土の動物遺体(4)

報告書抄録

ふりがな	なかのたかやなぎいせき						
書名	中野高柳遺跡 IV						
副書名	宮城県仙台港背後地地区画整理事業関連調査報告書IV						
巻次							
シリーズ名	宮城県文化財調査報告書						
シリーズ番号	第204集						
編著者名	村田晃一・保原恒雄・白崎恵介						
編集機関	宮城県教育委員会						
所在地	〒980-8423 宮城県仙台市青葉区本町3-8-1 TEL 022-211-3685						
発行年月日	西暦 2006年 3月 31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	二 一 ド	北緯 ° ° ′ ″	東経 ° ° ′ ″	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
なかのたかやなぎ 中野高柳 遺跡	04100 みやぎけんせんたいし 宮城県仙台市 みやぎのく 宮城野区 なかのあがけんどうまえ 中野字県道前	01146 04100 1分 1秒	38度 1分 58分 55秒	140度 5分 5秒	1次調査 199410~11 2次調査 199907~08 3次調査 20000703~0929 4次調査 20010409~1106 5次調査 20020108~1112 6次調査 20030407~1117 7次調査 20040412~1109 8次調査 20050418~0704	約 1,050 約 950 約 3,250 約 6,500 (確認300) 約 10,400 (確認1,120) 約 6,930 約 8,200 約 2,900 約 1,850	土地区画整理事業に伴う事前調査
たけのうち 竹ノ内遺跡	04100 みやぎけんせんたいし 宮城県仙台市 みやぎのく 宮城野区 がもうあたけのうち 蒲生字竹ノ内	01152 3分 50秒	38度 1分 5分 59分 26秒	140度 5分 59分 26秒	使用測地系		
					日本測地系 (改正前)		
所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主 な 遺 物	特 記 事 項		
中野高柳 遺跡	烟跡	平安時代 中頃	土器類 須恵器 赤焼土器 河原跡	南に流れる河川両岸の自然堤防上を畝として利用している。畝は、河川に接続する溝で「コ」字状に区画されている。灰白色火山灰の降灰で焼絶したのち復旧されるが、洪水中で埋没する。	平安時代末期～江戸時代は、ほぼ連続して集落が営まれた。平安時代末期は幅1mの溝で囲まれた屋敷数を3区画確認し、その居住者が西側の溝地に遺物包含層を形成したことわかった。		
	集落跡	平安時代末期～江戸時代	屋敷跡 区画溝跡 掘立柱建物跡 井戸跡 土塙 溝跡	かわらけ 中世陶器 近世陶磁器 青磁・白磁 土師質土器 木製品 漆製品 石製品 金属製品 動物遺体 植物遺体	平安時代末期～江戸時代は、ほぼ連続して集落が営まれた。平安時代末期は幅1mの溝で囲まれた屋敷数を3区画確認し、その居住者が西側の溝地に遺物包含層を形成したことわかった。 縄文時代から室町時代の集落は、幅3mの大溝によって区画された星形と幅1mの溝で囲まれた屋敷が構成される。前者は在地職主層、後者は住民や従者などの住民層と考えられる。在地職主の屋敷は、主屋・副屋・堆積・廐庭・井戸・ゴミ穴などが一定の場所に配置されていることがわかった。こうしたあり方は他の屋敷と共通しており、屋敷の間隔の使い分けは、時代を超えて基本的に変わらなかったことを示すと考えられる。出土遺物の分析は、平安時代と同時構造とするが、出土遺物から見て規模の大きなものは、さながら農具の量で考えられる。発掘によって遺跡の9割以上が覆収された。しかし、平安時代中期から江戸時代の集落の実態をある程度復元できるところが最大の成果といえる。また、植物遺体の分析も行っており、平安時代中期から南北朝時代には、屋敷とそれを取り巻く環境を含め、当時の生活を復元する上で貴重な資料が得られた。		
竹ノ内遺跡	集落跡、寺跡	江戸時代	屋敷跡 区画溝跡 掘立柱建物跡 井戸跡 土塙 溝跡	土師質土器 近世陶磁器 青磁・白磁 木製品 漆製品 石製品 金属製品	幅4mの大溝で囲まれた有力農民層の屋敷跡のうち、寺が営まれたと考えられる。寺名は天台宗「耳取山洛德寺」と考えられる。		



黒漆二枚居木鞍

宮城県文化財調査報告書第204集

中野高柳遺跡 IV

-宮城県仙台港背後地土地区画整理事業関連調査報告書IV-

平成18年3月25日印刷

平成18年3月31日発行

発行 宮城県教育委員会

仙台市青葉区本町三丁目8番1号

印刷 株式会社 佐々木印刷所

〒983-0035 仙台市宮城野区日の出町2丁目2番16号

TEL. 022-236-1281㈹ FAX. 022-236-1284

E-mail sasaki_insatuh3@syd.odn.ne.jp
